
異世界エース

兄二

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界エース

【Nコード】

N6931W

【作者名】

兄二

【あらすじ】

地球軍人型機動兵器パイロット、望月虎鉄。エースと呼ばれていた彼は、最後の任務を終えた時、異世界に召喚される。

召喚されたのは中世ファンタジー世界。龍が闊歩し魔物がうごめき、魔術と科学をあわせたような巨大なロボットが存在するアンバランスな世界。

その中で、虎鉄は召喚されし者として人型機動兵器SHに乗れと言われる。

召喚当初、最後の任務を終えたためか、無気力状態だった虎鉄だが、

特別な機体のAI部分を担う少女や、彼の専属メイドとなった少女との出会いを経て、彼は事件に巻き込まれていく。

つまるところ、元エースが、女の子と機体に乗り込んで戦う話。

主成分は、主人公のチートパイロットぶり、女の子との絡み、一抹のファンタジー成分です。

ブローグ・エース

始まりは、ふと突然に。

宇宙。

黒が支配するその空間にて、人型機動兵器が流星の如く駆けていた。

『望月少尉！ 聞こえますか！？ 目標まで後五百メートル！！』

コクピットの中に響く声を、男は黙殺した。

悪意ではなく、余裕の無さを以って返す。状況は、返事も出来ないほどには、切迫していた。

前方には起動寸前の敵、人型機動兵器。

そして、それを守るような、集中砲火の嵐の中を、機体は駆ける。

ただ、黙して、男は、地球軍、望月 虎鉄は前へ向かって機体を走らせた。

前方にある、ソレは危険だ。

火星で建造された新兵器。時空間圧縮という新技術を用いて造られたその機体は無人機であり、一度起動すれば、誰も止められない、破壊を撒き散らす修羅と化す。

追い詰められた、火星軍の最後の一手。

それを止めるために、虎鉄はひたすらに、敵弾を避け、その機体へと肉薄する。

『ミサイル！ アラート！！』

年若い通信士の男の声も、どこか遠い。

ただ、目前にミサイルが迫ってくるのが見える。

虎鉄は半ば無意識に操縦桿を左へ倒した。

それに反応して、大きく左に逸れる機体。

背後で、爆発が巻き起こる。

避けた。だが、それでは終わらない。

すぐさま、虎鉄は機体を上下左右へと激しく揺さぶる。

駆け抜けていく閃光。

もう、シールドは無い。避ける他の手段も無かった。

そう、もうシールドはないし、左腕もない。

ライフルも捨ててきた。ミサイルも、何もかも。ウェイトになるからだ。

防いだところで、倒したところで、焼け石に水。

だから、あるのは、手の中のレーザーブレード一本だけ。

それだけで、敵機五百の集中砲火を潜り抜け、最終兵器を破壊する。

それでも、虎鉄は呟いた。「なんと簡単な任務か」。

喉が渴いていた。まるで砂でも多量に飲み干したように、水分は

どこかへと消えていた。

それでも機体は飛び続ける。

『目標との距離二百！！』

思えば、この通信士とも長い付き合いだ。

心のどこかで、声でも掛けたいと思ったが、声は出なかった。

だから、モニタの向こうに無理やりに笑みを作り返す。

そして。

『有効射程距離に入ります！！』

捉えた。

「……お」

青い機体が、たった一本のブレードを構える。

「お」

枯れたように思えた喉から、雄叫びが漏れた。

「おおおおおおおおおオッ!!」

その距離は。

奇跡の距離は。

零に。

『目標、撃破!! やった! やりました、虎鉄さん!!』

どっしりとした機体の胸を、ブレードが貫いている。

通信士の声で、虎鉄は終わったのだということを実感した。

何か、言葉にしようと思ったが、やめる。

どうせ、声は出ないだろう。

そうして、虎鉄はシートに沈み込むように背を預けた。

終わった。

そう思って、大きくため息を吐く。

その時。

『エネルギー反応増大……っ!? 虎鉄さん!!』

「……、ああ」

機体の方でもそれは捉えていた。
目の前の機体の中でエネルギーが爆発しようとしている所を。
この最終兵器の圧縮された時空間が、元に戻るうとしているのだ。
周囲にいた火星軍の機体は蜘蛛の子を散らすように逃げ出している。

だが、虎鉄の機体は動かない。
動けなかったのだ。

機体のバーニアは焼け付いていて、腕や足も衝撃でろくすっぽ動かない。

そして、虎鉄自身も、疲労で指一つ動かない。
だから、虎鉄は枯れた喉を振り絞った。

「……じゃあな」

光の奔流に飲み込まれる。

それが、宇宙を駆けたエースの最後だった。

『遅いぞコテツ！！』

「と、言われても……、な！」

広い荒野で、機械の巨人が剣で打ち合う。

まるで、騎士甲冑じみたデザインの、二人の巨人は、荒野を飛び跳ねては斬り合っていた。

「くっ」

異世界へと呼び出され、望月虎鉄が、コテツ・モチツキとなつてから、一週間が経過していた。

プロローグ エース（後書き）

見切り発車でスタート。

テンプレ異世界モノを一度やってみたかった心境。

読み切りレベルで終わるかも知れませんが、よろしければ、お付き合ってください。

1話 白黒の巨人

虎鉄が爆発の後に目を開いたとき、そこにいたのは閻魔でも神でもなく、ただの女だった。

その女は己を王女だと言い、そして、魔法で虎鉄をこの世界に招いた、と言った。

虎鉄は何の疑問も持たず、それを受け入れる。

『時空間圧縮の爆発に巻き込まれれば、こうなってもおかしくは無いか』と。

そして、あてもない虎鉄は、言われるがまま、ソムニウム王国軍のエトランジエとなった。

「コテツ。お前は本当にエトランジエなのか？」

「それは王女が保障しているが」

今日の訓練を終え、機体から降りて、コテツの教育を担当する騎士団の団長、シャルロット・バウスネルンと王城の廊下を歩いていた。

「それにしては弱すぎないか？ コテツ。お前は私の部下の中でも中の下だ」

「ならば、そもそも他の異世界人はどれほどだったんだ？」

”エトランジエ”。この言葉が、この世界でコテツを括る言葉だ。異世界から呼び出される、人型機動兵器、シユタールヘルツォーク、通称SHの操縦に長けた、もしくはその素養がある人物のことだ。

この国は、いつの時代も必ずエトランジエを一人保有する。彼らは、戦争があれば駆り出される他、国際親善試合などに出場し、国の立場を担うこととなる。

「……そうだな。先代は素晴らしい操縦技術の持ち主だった。我が国では思いもよらない操縦技法を行っていた。曰く、俺の動きは”ろぼあく”の”げえむ”と同じ。だそうだ」
「……」

コテツは押し黙った。

言葉の端々から、どうにも、歴代エトランジエが異世界人だということを痛感する。

又聞きとなるが、先代は瞬く間に操縦技術を吸収し、トップクラスの操縦士になったと言う。

そんな中、

「お前は、最初からSHに乗れた割に」

そう言って、シャルロッテはその眉間に皺を寄せた。

シャルロッテは、二十過ぎくらいの金の長髪をストレートに伸ばした女で、訓練中などの戦闘時はポニーテールにして括っている。

目の色は赤みがかっていて、つり目気味。身長は百七十センチ後半と言ったところか。

「期待されても出来ることと出来ないことがある」

対するコテツは、平均的な日本人の顔をしていた。

短い黒髪と、黄色人種らしい肌。その中で身長だけは百八十センチ超と高いほう。

顔つきは精悍であると言っても良いのだが、どうにも顔の印象は薄い。

そして、二人は揃いの黒い軍服を着ていた。

「早く使い物になれ。親善試合で負けるわけにはいかん」

そう言って、シャルロットは横道に逸れていく。

コテツは直進した。部屋へと戻るのがそちらだからだ。

「……一週間。すぐ過ぎ去ったが、十分長い期間だったか」

そう呟いて、コテツはベッドに倒れこんだのだった。

一週間。

その期間は、周囲の人間がコテツに失望するのに掛かった時間だ。操縦系統が、コテツの居た世界の機動兵器、ディストラクションフレームDFと同じだったため、初めからSHに乗れたコテツへの期待と、雑兵と一対一で互角がやっとなったコテツへの失望の落差は非常に大きかった。

おべっかを使って擦り寄ってきたSH乗りは三日で目つきを馬鹿にするようなものへ変えた。

おこぼれに預かるうとやってきた王の家臣たちは六日で姿を消した。

今ではまともな態度を取るのは、シャルロツテと、コテツを召還した本人である王女くらいか。

他にもいるが、実に数が少ない。

「コテツさん、起きてください。コテツさん」

そして、今、コテツに声を掛けている女性も、数少ないその一人だ。

「何か、用があるのか？」

すぐさま、コテツは身を起こした。

すると、メイド服の女が視界に飛び込んでくる。

リーゼロツテ・クリツツェン。エトランジエであるコテツ付きのメイドである。

茶色の髪を三つ編みにし、後頭部で丸く纏めた、碧い目のおっとりとした女性だ。

印象的なのは、頭にある狐耳と、大きな尻尾。否応なく、異世界を感じさせてくれる。

「アマルベルガ様がお呼びです」

「わかった、すぐ行くこつ」

言つて、コテツはベッドをから出て外へと向かつた。
アマルベルガとは、コテツを召還した張本人、王女である。
待たせるわけには行かない。

コテツは、リーゼロッテを伴い、廊下を歩くこととなつた。

「コテツさん、もう、ここには慣れましたか？」

「……一応はな。慣れるものだ。機動兵器が当然のように存在するの
に、生活レベルは中世と大差ないこのアンバランスにも」

「よくわかりませんが、コテツさんはことはまったく違つたと
ころから来たんですね？」

「宇宙をふらふらと、だ」

「宇宙？」

「そう、宇宙だ。宇宙で、火星の人間と戦つていた。思えば長い戦
争だつたな」

この世界の機動兵器は密閉性が無いものが多い。

例え宇宙を見てきた者がいても、それはほんの一握りよりもさら
に少なく、天体に関する学問もあまり進んでいないため、この世界
では宇宙はどこか遠いものだった。

「どうして、戦争が起こつたんですか？」

「早くどこかに行け、邪魔だから。と言つていても、いざ手を離れ
るとなると惜しくなつた。だから、飼ひ殺しにしようとして手を嚙
まれた」

地球が人口の限界を迎え、余つた人類を火星に押し込むことにし
たが、火星から取れる資源、そして移民の労働力は惜しかった。

だから地球側が指導の名目で圧政を働き、力を付けないようにな
すべく搾り取つた。

ただし、それでも不満とは爆発するもので、戦争は起こった。たとえ、物が無くとも不満によって生み出された鬼気迫る火星軍の戦いは、一時期腑抜けた地球軍を追い詰めるほどだった。

それが、コテツの駆けてきた戦場のすべて。

コテツが、エースだった空。

「帰りたいですか？」

「こちらを気遣う様な問い。

「……いや、そうでもない」

帰りたいと、不思議と思えないのは、すべきことを終えてしまっただからだろうか。

コテツの心には一切の焦りが無かった。

「任務中と、爆発前。二度も死んだと思ったからな。どこにも何の実感もない」

帰ってすることも無ければ、戦争終結後に結婚を誓った女性もいない。

「逆に、いいのかもしれないな。役立たず判定を受ければ、どこかの田舎で畑でも耕そうか」

「だ、大丈夫ですよ、コテツさん！ きっと、すぐに上手になります。焦らないで、ゆっくりやっていけば」

言われて、コテツは曖昧な笑みで返した。

（果たして、俺に出来るだろうか……）

最後の任務を終えるまでの、あの頃の熱は、今は既くない。まるで、燃え滓のような、燃え尽きた灰だ。

と、そこでふと、中庭に面した廊下から、一機のSHの姿が見えた。

「……………あれは？」

黒と白の、騎士甲冑を模したようなデザインとは一線を画す、どちらかと言えばコテツのいた世界の機動兵器に近い空気。

下半身のがつしりとした空気とは対照的に、上半身はスマート。腰元には二つの巨大なバインダーが付いており、力強い印象を与える機体だ。

腕に刻まれた不可思議な文様が、何故かコテツには印象的だった。

「ディステルガイスト。我が国の所有するアルトの一機です」

リーゼロットは、誇らしげに笑う。

「アルト……………、初期型SH、だったか」

「はい。最初のエトランジェ様が造ったSHバリエーションの一つです」

「なぜ、中庭に飾ってあるんだ？」

SHは、兵器だ。なのに、中庭にまるで飾るように放置されているのには、違和感がある。

「パートナーが、いないんですよ。気難しい機体みたいで。たまに活躍してみたいなんです」

「たまに？」

「私が生きてる間に一回だけ、です。よほど腕のいい操縦者じゃないと認めてもらえないらしいですよ」

「先代エトランジエは？」

コテツにとってはSHもただの兵器としか映らない。

だから、兵器が人を選ぶと言うのはどうにもピンとこないものだったが、先代は大層操縦が上手かったのではないかと思いついた。それほどの人物ならば、このような機体でも乗りこなせたのではないかと。

が、リーゼロッテは首を横に振る。

「一度、乗ったことはあるらしいですが、曰く『あれはピーキーすぎる。ハイスコア狙い向けだけど、ハイスコアなんて狙う場面はない。元々パイロットじゃないからそういう技術も操縦勘もないし、多分年単位かけても使いこなせないよ。そもそも元がもやしの貧弱一般人じゃ即ミンチ』だそうです」

その言葉に、コテツは先代への観を改めた。

ゲーム、ロボアク、などの語彙がしばしば出てくる割に、戦争に対してはシビアな考えを持った人物だったらしい。

ハイスコアを喜び勇んで狙うような人物でないことには、好感を覚える。

「なるほどな」

「すごい人だったらしいんですけどね。戦闘の呼吸への勘が鋭くて、隙を抉り込むのが得意だったらしいです」

「そうすると、ずいぶん我侷な機体だったんだな」

「まあ、アルトなんて搭乗者が決まっているほうが稀なんですけどね」

言いながらも、二人はデイステルガイストの前を通り抜ける。
二人を、モノクロの巨人が見下ろしていた。

1話 白黒の巨人（後書き）

主人公最強を標榜し、事実その通りになる予定ですが、見せ場まではまだしばらく、と言ったところ。

2話 灰と塵。

王女の部屋。

上品な調度で纏められたその部屋に、王女が優雅に椅子に座っていた。

「よく、来たわ」

「用件は如何様な？」

本来なら謁見という方向でも良かったのだが、今のコテツの立場は非常に微妙である。

現状のコテツの状況を耳目に触れさせるには、リスクが高かった。そんな糾弾されかねない状況。

それ故に、なんらかの噂が立つ可能性に目を瞑って、王女はわざわざ自分の部屋にコテツを呼んだ。

「調子を聞きたいだけよ。教えてちょうだい」

「変わりなく。良くも悪くも」

「そう」

落胆する様子もなく、アマルベルガは言った。

「まあ、所詮一週間と言ったところかしらね。これからも、精進なさい」

「了解」

「貴方はやっこのことで引っ掛けて来た私のエトランジェなのだから」

アマルベルガ自身は、魔法の歴代の使い手というわけではなく、魔法処理レベルも最高位というほどではない。

故にこそ、此度のエトランジェ召喚は難航したと言う。

（本来なら何も引つかからなかったところを、時空間圧縮の開放に巻き込まれたせいで俺が引っかけやすくなった、と言ったところか）

心中、コテツは考察するが、言うような事情でもなんでもない。押し黙るコテツに、アマルベルガは続けた。

「不完全ながらも、急ぎ召喚を行ったのは不穏な隣国との戦いに備えるため。エトランジェは我が軍の柱だわ」

異邦人を柱にするのは如何なものかと考えたが、コテツは何も言わないことにする。

「故に、急ぎ強くなりなさい。今はいるだけでも構わない、それだけでも牽制にはなるから。だけど、そのうちすぐに貴方の實力は世間に晒されるでしょう。そうなったときが、我々の命日かもしれないわ」

「善処しましょう」

エトランジェは滅法強い、一個師団とやりあえるクラスだ。というその風評がある限り、相手はコテツと、ひいてはこの国に手を出すことを躊躇ってくれるだろう。

問題は、それを本当にしなければいつかはばれる。そして、この国の軍にとってエトランジェが心の支えだと言うのなら、エトランジェの弱さは士気の低下に繋がり、戦場は不利になる。

(どんな国だ、一体……)

もしくは、世界すべてが抱える問題なのか。

「もう戻ってもいいわ」

「了解」

退室しながら、コテツは思いを馳せる。

果たして、たった一機の機体がこの世界に与える影響力はどれくらいだろうか。

確かに、コテツの世界にも一機で戦況を変える者は居た。そもそもコテツもその一人。

だが、この世界はそれ所ではない。
たった一機で世界を変えかねない。国一つを滅ぼしかねない。

「リーゼロッテ。ここで分かれるとしよう。少し中庭で休憩してくる」

「あ、はい。ではここで」

すると、リーゼロッテは気を遣ったのか、何も言わずに歩いて去った。

コテツは中庭に出て、草の上に寝転ぶ。

「……エースか。笑わせる」

そう呟いて、コテツは目を瞑ったのだった。

「起きていただけですかね？ その人」

軍人と言う職業柄、コテツは気配に鋭い方だ。

近づいてきた人間が声をかけた時点で、すぐにコテツは身を起こした。

「何か用か？」

起きた視線の先にいるのは、黒髪の少女だ。ぱつと見ショートカットなのだが、首元から太もも辺りまで、尻尾のような髪が一房、まっすぐに流れ落ちている。

「いえね、こんなところで寝ている人は珍しいものですから。気になったんですよ。なんてったって面白そうじゃないですか」

そう言ってコテツを見つめる瞳は金。

年は少女と言ってもいいだろう。

敬語を使つてはいるが、その調子は明るく、まったく畏まったものを感じさせない、逆にフランクな空気だ。

衣服は、何故かブラウスに、短いスカートだった。

「君は誰だ？」

「私はあざみ。彼の、エーポスですよ。今代エトランジェさん」

そう言つて、彼女は背後のモノクロの巨人を指差した。

「エーポス……。君が、ディステルガイストの」

エーポス。初期型SHに存在する、言わば女性型AI。強力な機体の制御を一手に担う存在。

「本当に、人型なんだな。不可思議だ」

実際に出会つたのは初めてだったコテツは、好奇の視線を向ける。その視線に怒ることもなく、あざみは笑った。

「仕方がありませんね。初代エトランジェは機械工学に長けた人物でしたが、機体制御のAIは専門ではありませんでした。それ故に、魔術を使って作り出した人工生命体である私たちがAI制御を担当するので」

「なるほどな」

「それに、我々アルトは、機械と魔法のハイブリット。ただのAIでは制御し切れませんからね」

誇らしげに、あざみは言った。

コテツは、その言葉に首を傾げる。

「ふむ、では現行機であるノイにエーポスがいない理由を聞いても？」

最初期に造られ、初代エトランジエが何らかの形で関わったSHをアルトと呼び、以降、この世界の人間がそれを解析して製作した機体をノイと区別する。

その、ノイにはエーポスはいない。

「当然ですよっ、それは。私たちアルトを模して造ったのがノイ。性能は足元にも及びませんから。エーポスはありません」

「そうか。だとすれば大層強いのだろうな。君は」

「貴方はどうなんですか？パイロットとして。ねえ？今代さん」
「俺は、今の所練習機さえ乗りこなせそうにないからな」

諦めたように、コテツは言う。

「練習機を、ですか……、それは大変ですね」

慰めるでもなく、あざみは返した。

むしろ、面白くなさそうな目をしている。

やはり、エーポスとしては操縦の得手不得手は重要な評価項目なのだろうか。

だが、慣れた視線だ。コテツはあっさりと受け流す。

「今回のエトランジエは外れみたいですねー」

「かもしれん」

「では、さようなら」

あっさりと、会話は打ち切られ、あざみは自分の機体の中へと入っていった。

コテツは、部屋へと戻ることにした。

コテツは、部屋で一人考える。

(期待……、するだけ無駄だ)

期待には応えられそうもなかった。

期待に応える気概がないのだ。

むしろ、あざみのような反応がいい。

あれくらい、淡々としているほうが気が楽だった。

期待も失望もなく、事実だけを見つめる。

(そう思えば……、中庭に居たときがもっとも心安らいたかもしれん)

そして、いつそ逃げ出してしまおうか、と少し考えた辺りで、その考えをコテツは笑った。

逃げてどうする。やりたいこともないくせに。

どうせどちらにしたって朽ちていくだけ。

逃げても逃げずとも変わらない。

(まあ……、結局はのうのうと生きて、いつかどこかで死ぬだけか)
国はエトランジエを失いたくない。

それゆえ、コテツが戦場に出られるレベルになるまで、戦闘に出
そうとはしないだろう。

しかし、コテツはこれ以上に操縦が上達する気がしない。

そのため、いい加減に痺れを切らした上が彼を不要と判断するそ
の時まで、コテツは生きていられる。

(しばらくは……、ぼつと過ごしてみるか)

死ぬその時まで、ぼんやりと物事を考えながら過ごすのもいい。
と、コテツは考えていたが。

しかし、そうはならなかった。

「ジルエットの空中戦艦！ 何故ここまで接近を許した!!」

「アマルベルガ様！ 相手はステルスを搭載していたようです！」

「敵SH、来ます!!」

慌しい周囲。

聞きなれた音。

ただ、ぼんやりとコテツは空に浮かぶ鉄の塊を眺めていた。

2話 灰と塵。(後書き)

早く無双までたどり着きたいところ。

3話 無言の棺

その日の訓練を終え、コテツは王城の廊下を歩く。

「コテツ。お前もすこしはマシになってきたんじゃないか？」

シャルロツテが、言う。

「そうか？」

コテツが聞き返すと、シャルロツテは珍しく笑みを返した。

「まだ色々と粗末なものだが、しかしたまにこちらが驚くような良い動きをする。そういう奴は良い操縦士になれる」

顔には出なかったが、むしろコテツの方が驚いた。まさか、この鉄面皮が笑みを向けて来ようとは。少し、むず痒かった。

「しかし、それもこれからの訓練次第だ。さ、明日も頑張れよ」「了解」

それを求められる場面ではなかったがコテツは敬礼で返した。

軍人時代の性、と言ってもいい。ただ、なんとなく敬礼で返し、シャルロツテは満足したようにコテツを見て、廊下の道を横に外れた。

そうして、去っていくシャルロツテを見送って、コテツは中庭に出た。

草原に転がって、目を瞑る。

思い出すのは、シャルロツテの『お前もすこしはマシになってきたんじゃないか?』という人を褒める言葉。

それともう一つ。訓練中にだが、王女騎士団長に言われた言葉がある。

『まだダメなんですか? 此度のエトランジエは本当に使い物になりませんか? ……』

コテツは、目を開いて空を見上げた。

(嬉しくも悔しくもないとは、随分末期だな……)

腑抜けた、と言う表現が正しいのか、日和つたというべきか。

褒められて発奮することも、罵られて悔しがることもない。

もし、そんな状態なら、こうして中庭に寝転がっているわけもない。

そんなコテツに語りかける人影があった。

「あらら、また来たんですか貴方」

「悪いか」

「悪くありませんけど、珍しいですよ? 元々ここに来る方なんてほとんどですし。それに、エトランジエ様だからって特別扱いしませんし?」

そのあんまりと言えばあんまりなまっすぐな言葉に、コテツは久

々に口の端を吊り上げて苦笑を作った。

「だから、いいんだ」

「はあ……？」

よく分かっていなさげなあざみに、コテツは続ける。

「その方が、気が楽だ」

だから、毎日のように訓練が終わればコテツはここに来るのだ。
あざみは、来たり来なかつたりだ。

「あらあら、意外と繊細？　そうは見えませんが」

「正直言つて煩わしい」

はつきりと言うコテツにあざみは苦笑で返す。

あざみはコテツを特別扱いしない。期待もしなければ、エトランジエとして蔑むこともしない。

色眼鏡なしで操縦者としての事実を見ている。

「それをシャルロットに言ったら最後ですよー？」

「それはぞつとしないが」

「足腰立たなくなるまで訓練させられる……、っていうか、王女に
対しても不敬罪じゃないですか？」

「不敬罪で死刑か」

「前代未聞のエトランジエ様ですね」

そうして、二人は少し黙る。

その後、しばらくしてから、ふと、思いついたかのようにあざみ
は聞いた。

「で、結局、あなたはなにがしたいんですか？」

突然の質問だった。

ただ、あざみの顔は興味津々と言ったところ。

「なにを、とは」

「いえね？ 今の心境をどうぞ、と。一部から期待され、多数からは蔑まれる現状に、望まずやってきた身としては」

楽しみに、聞いてくる。

なんとも悪趣味だったが、その気の遣わなさがコテツには好ましい。

「恨むとか、復讐してやりたいとかこれ拉致だるマジで、王家ぐるみとか何考えてんだ殺すぞとか、シャルロットの胸に顔をうずめてすーはーしたいとかないんですか？」

そして最後に。

「それとも……、一念発起とか、しっちゃったりします？」

その言葉に、コテツは一度あざみから視線を外し、中庭から見える空を見上げた。

一念発起できるなら、こんなところには来ていない。
今頃自己鍛錬を続けているだろう。

「何がしたいのかと問われれば、何もしたくない、だ」

正直に言えば、あざみは詰まらなさそうな顔をした。

「どうしようもないへたれですねえ。何食べたらそんな無気力になるんです?」

首を傾げるあざみに、コテツは珍しく冗談で対応しようとする。

「大量の敵軍と、メインディッシュを食べれば、それは満腹に、…!?!?」

そんな時だった。

瞬間、大地が揺れる。

地面に寝転ぶ形だったコテツは跳ねるように身を起こした。

「まるで艦砲射撃…!?!?」

心当たりがある振動。

これは、艦の主砲クラスの一撃だ。

「……あららら、これまずいですよ。宣戦布告も無しに奇襲? 一体守備隊は何をやってたんでしょうね?」

あざみの言葉を背に、コテツは中庭から廊下へ出た。

そして、空を見上げる。

その時、丁度のことだった。

その空に紫電が走り。

巨大な戦艦が空に現れたのは。

「空中戦艦……、本気みたいですねえ。あちらさんも」「そう、見えるのか?」

異世界人のコテツには空中戦艦が来た所でどれくらいの意味があるのか分からない。

追いついてきたあざみに問うと、あざみは眉一つ動かさずに答えてくれた。

「視覚的ステルス、あのサイズ、外観から分かるSH搭載可能数からして、敵国旗艦の国宝級の戦艦でしょう。普通は地上戦艦を持つてきますから、あのクラスじゃ最悪経費で国家が傾きますよ?」

つまり、国家予算クラスをもって起動させられる戦艦、と言つことらしい。

何にも気づかれずに敵国の喉元に食いつけると考えればそのコストは納得できる。

ただし、一度で決着が付かなかった場合、出費がかさむのだろうが。

「この国にはそれほどの旨みが?」

そして、それを覚悟しての電撃戦。確かに、戦争が長期化するよりは必要な軍事費も軽くなるだろうが、それにしだって博打の要素が強い。

この国に一体何があるというのか。

その質問に、茶化す空気もなく、あざみは答えた。

「私、とかどうでしょう? ね、別に茶化してませんよ? 初代エトランジエのいた国ですから、ハイスペックなアルトの保有数は最大です」

そこまで言われても、今のコテツにはピンと来なかった。

エースとその機体が時として戦場で脅威になることはわかっては

いたが、しかし、アルトはパイロット不在。
はたしてそれだけの価値があるのか。そんな疑問に、あざみは口を開く。

「そもそもアルトなんてほとんど誰も使えないんですけどね。でも
まかり間違つて全部使えるようになったら困るでしょう?」
「ああ、なるほど」

コテツは少々の納得を覚える。敵は馬鹿ではないらしい。
技術は常に革新する。そして、今使えないアルトを使いこなせる
ようになったら脅威が過ぎる。

が、先代エトランジェは強かった。そう簡単に手出しは出来ない。

(見抜かれているぞ、王女……!)

故にこのタイミングだ。先代エトランジェから、今代へ。エトラ
ンジェがいない、もしくは慣れていなくて役に立たないこの瞬間に
しかこの国を打ち倒せないと判断したのだ。
だから賭けに近い電撃戦に出た、という訳だ。

「それで? 君から見たらどちらが優勢だ?」

「うーん、こつちのぼろ負けですねえ」

あつけらかんと、あざみは言った。

「何故?」

「余裕である戦艦には50機以上のSHが積まれているでしょう
「こちらにもSHはあるだろう? しかもここは本拠だ」

「いいえ。確かに数はありますけどね。常に全部動かせるわけじゃ
ないんですよ。整備環境上、相手の半分動かせればいいほうです」

「……どうかしている」

「とはいえ、こんな奇襲想定されてないんですよ。型破りにもほどがあります。むしろ国境付近のほうがすぐ動かせるSHは多いですよ」

そうして、今度は質問の応答者が変わる。

「貴方は？ どう思います？」

平然とあざみは聞いてくる。

コテツは、思ったことを答えた。

「……その戦力差ならまずいだろう。敵は有能だ」

「どうして判断できるんです？」

「現時点では、アルトがほとんど動かせないこの国はさほど驚異的ではない。しかし、それでも奇襲作戦に出たと言うことは、将来的な脅威、もしくはアルトを手に入れることによる利益を見ている」

「ははあ。確かに私もちよっと自信がありますよ。最終的に全部動かせるようになれば驚異的でしょうね」

「だが、それを今の脅威ではない、と目を背けず、今この時が千載一遇のチャンスだと襲ってきた。相手は未来を見ている」

「その場凌ぎを考えて貴方を召喚したこの国とは格が違いますか？」

「君はこの国をどう思ってるんだか……」

あまりにあんなりな物言いに、逆にコテツのほうが微妙な気分になつた。

だが。

「大切な国ですよ。いざとなったら私が守りますから」

そう言っつて、彼女は笑顔になる。
気高い獣の笑みだった。

格納庫。

整備員が慌しく動き回るそこにコテツはいた。
そして、それを見つけたシャルロッテが、コテツに駆け寄ってく
る。

「コテツー!!」

「ああ」

「よく来てくれた」

「呼び出したのはそちらだろうに」

にべもなく言うコテツは、そのままに続けた。

「それで、俺に出撃命令か？ 役に立てるとは思えんが」

当初、コテツが考えていたのはそついうことだった。
人手が足りない。

ならばコテツの練習機も出せるだけ出してしまおうと思ったのだ
ろう、と。

しかし、シャルロツテの返答は、実に予想外だった。

「……違つ。お前に出撃命令は出ていない。私はお前に頼みがある
んだ」

「頼み？」

出撃前の兵士に頼まれることと言えば一体なんだろうか。

考えるコテツの肩に、シャルロツテは両の手を乗せて、まっすぐ
に彼の瞳を見た。

「これは私の個人的な願いだ。断つてくれても構わない。関係ない
国のことだと逃げてくれても構わない」

「長い前置きだ。時間はないんだろう？」

シャルロツテがここまで言う頼みを、コテツは断ろうと思わなか
った。

だから、先を促す。

すると、シャルロツテは、苦しそつに、辛そつにその言葉を口に
した。

「お前にはつ……。ここで王女様を守って欲しい！！」

そして、筋違いなのは分かっている、とシャルロツテは呟いた。

「前の敵は私たちが命を賭けて、意地でも倒す。絶対に、必ずだ。しかし……、もしも、万が一抜けた敵がいたならば」

その言葉を、コテツが遮る。

「期待に添えるとは思えんが。……努力は惜しまん」

真面目腐った顔のコテツに対し、シャルロッテは泣きそうな顔で破顔した。

「ありがとう……、では、私は行ってくる!!」

颯爽と駆けていくシャルロッテをコテツは見送り、自分も自分の機体の元へ。

「これが、俺の棺桶か」

感動もなく、彼はそれを見上げた。

青い、騎士甲冑のようなフォルム。練習機、名前をアインズという。

ここに来て以来、コテツが乗り続けた機体だ。

コテツは、その機体の胸にあるコクピットに乗り込もうと動き出し、声をかけられ振り返ることとなった。

「コテツさんっ」

「……リーゼロッテ」

メイド服と獣耳。遠目に見ても彼女はわかりやすい。

しかし、コテツは首を傾げた。

一体何をしにきたのだろうか、と。

その彼女は、しばらく、何か言おうとしてやめ、口を開け閉めすることを繰り返していたが、ついに、覚悟を決めたのが、コテツに言った。

「死なないでください」

簡潔な台詞。とてもわかりやすい一言だった。

しかし、出会って一週間あまり。それだけなのに、こうして有事の際にわざわざ心配して声をかけてくれる彼女は、大層優しい性分なのだろう。

コテツは、そんな彼女に笑いかけた。

「約束できんな」

3話 無言の棺（後書き）

次回出撃。

ご意見、ご感想お待ちしております。

4話 エースの空

かくして、敵は来た。

異世界に来て初めて見た飛行を行うSHと、この国のSHが戦闘を行う様子をコテツは最後方で眺めていた。

文字通りの、最後方である。城の目前に立つコテツを越えればもう防衛戦力も何もあつたものではない。

「押されているな」

冷静に、コテツは戦況をそう判断した。

SH戦は空対地なら空の方が有利だ。そして、整備不足か、圧倒的に味方には空戦機体がない。

対空兵器も、撃てば当たるといふものでもない。

そして、圧倒的存在感を放つ空中戦艦の存在。

その砲火はもちろんのこと、その存在自体が土気に多大な影響を及ぼす。

「……………そして、やはりか」

『前の敵は私たちが命を賭けて、意地でも倒す。絶対に、必ずだそんなものはただの意気込みで、希望的観測だ。』

周到な罠を張った上での地上戦ならいざ知らず、この状況ですべてを防ぎきるなど不可能。

高速で迫る航空兵器。レーダーがそれを捉えた。
コテツは、機体の腰のブロードソードを抜く。
そして、唐突に通信が届いた。

『うおおおおおおお！！』

「……うるさいな」

この世界はSH技術以外は中世なことであって、騎士道精神に重きを置く風潮もまた存在する。

こつもあつさりつながる通信もその風潮から生まれたものの一つだ。

必要があれば切ることも出来るが、自ら切ろうと思わなければ、相手から勝手に通信をつながれる。

名乗りを上げる。裂帛の気合を見せ付ける。勝者と敗者、もしくは好敵手同士が言葉を交わすための仕様。

コテツにはどうも馴染めそうになかったが。

そして、その裂帛の気合を見せ付けた相手は、同じブロードソードを構えて、空中からコテツへと迫ってきていた。

ブロードソード。人間サイズで言えば、80センチくらいの幅広の剣だ。

一般的な機体の大きさは人間の十倍ほどのサイズ、つまり18メートルのものが多いから、ブロードソードも八メートルほどのものになる。

これも騎士道的な考え方なのか、それとも、銃器の性能が低いのが悪いのか、SH乗りは剣を重用する。

コテツはそんな考えもないが、練習機であるアインスにこれ以外の武装を搭載することは出来なかった。

『おおおおお！』

突貫してくる機体。

コテツは、それを横に大きく跳んで避ける。

飛び込むような無様な回避だったが、それでも避けることには成功した。

すぐさま、敵機はターンをし、コテツに突っ込んでくる。

(さて、どうにか止めなければ……)

叫び続ける敵兵とは対照的に、コテツは無言で機体を動かしていた。

シャルロツテの頼みに応えたのだって、彼女と同じく王女を守りたかったのではなく、断る理由がなかったただけだ。

だがしかし。

「約束は、したからな」

二度、三度と攻撃を避ける。

そう、約束はした。

したから、努力は惜しまない。

そして、四度目の突撃。

(生身であれば……、一撃ごとに体が鈍る。ダメージは蓄積し、逆転は出来ない)

コテツは、避けない。

「だがSHならそうではない……!!」

貫かれる機体の腹部。いや、避けたのだ。コクピットには刺さっていない。

コテツは、ここで初めて相手に向かって声を出した。

「捕まえたぞ」

『え？』

ブロードソードを持っていない方の手が、敵機の肩を掴む。

冷淡だったコテツの声は、まるで死神の宣告のように相手に響いたことだろう。

アインスはブロードソードを振り上げ。

思い切り相手の胸に突き込んだ。

青い機体が、悠然と立っている。
敵機が三機。地に転がっている。

「……最善は尽くしたぞ」

咄くと同時、コテツのアインスが倒れこむ。

結局、コテツの最善、限界はここまでのこと。

コテツに傷一つなくとも、腹を刺され、片腕は千切れ、片足を失った機体はもう動かない。

コテツが取った戦法はまさに肉を切らせて骨を断つ。

腕も機動力も劣るコテツは無傷で勝つことなど考えず、ただ、切らせて隙を見せた相手に一撃必殺を叩き込むことだけを行った。どんなに痛めつけても、動ける限り機体は動いてくれる。それ故の戦法だった。

ただし、その戦い方にはどう頑張っても限界が訪れる。

「ここまでか」

暗くなったコクピットでコテツは無感動に呟いた。

「まあ、余生にしては上々か……」

ここで待つことは、座して死を待つことと変わらない。

この戦闘はどう考えても負け戦だ。

はたして、エトランジエは生け捕りにしてくれるだろうか。

いや、しかし、仮に生け捕りにされたとしても役立たずだと知ればきつと敵国はコテツを殺し、この国の王族に新たなエトランジエを召喚しろと要求することだろう。

だから、コテツはその場から動こうとしなかった。

遅いか速いかの差でしかない。ここで死んでも変わらない、と。

そして、待つこと数十秒にして、機体の装甲を叩く、足音が聞こえてきた。

（敵兵か……。随分お早いご到着だが、そのままコクピットにソードでも突き刺せばいいものを）

そう考えるコテツを余所に、唐突に暗かったコクピットへ光が差し込む。

こうして、致命的なダメージを受け要救助状態となったSHは、コクピット側の操作でロック状態にしない限り外からのレバー操作

でコクピットを簡単に開くことができるのだ。
そして、そんな風に簡単に開いたコクピットの向こう。そこに敵兵の顔でも拝んでやろうかと、コテツは目を向けた。
すると、そこにいたのは意外な人物だった。

「……リーゼロッテ？」

メイド服と、狐耳。見間違えるはずもない。
必死な姿で、彼女はいた。

「早く、この手に掴まってください!!」

思わず、呆けた。

半ば無意識に言われるがまま手を伸ばすと、一気に機体の外まで引き上げられた。

何故彼女がここに、と、疑問が心を支配する。

そして、コテツは口を開きかけた。

「君は、何故」

「まずは逃げましょう!」

しかし、聞く間もなく、力強く手を引かれる。

女性とは思えない力で手を引かれ、呆けたままコテツは引きずられるように走り出した。

閉められた城門の脇の勝手口のようなところから内部に侵入し、そのまま城の中へ。

そして、廊下を駆け抜け、中庭に出て、やっとコテツとリーゼロッテは一息吐いた。

「こ、コテツさんっ、怪我は？」

「いや、大丈夫だ」

「よかった……、壊れた機体の中から出てこないから、怪我をしたのかと」

「すまない。心配を掛けた。それとありがとう、君の勇敢な行動のおかげで命を救われた」

別に望んだわけでもないが、救われた以上は礼を払わなければならぬ。

そのためにコテツはリーゼロッテをまっすぐに見つめる。
のだが、そこでコテツはあることに気がついた。

(震えて……?)

リーゼロッテが、肩や手を震わせている。

先ほどまでは無我夢中だったのだが、ここに来た今、それら張り詰めていたものが切れて、恐怖が戻ってきたようだった。

年相応な、女性になりきれない少女の恐怖が、そこにはあった。

「君は、どうしてここまでして」

思わず、コテツは聞いていた。

コテツにはよく分からない。

恐怖に打ち勝つてまでなぜ役立たずを救いに来たのか。

何故、彼女は死の危険を冒してまで、コテツを救ったのか。

その不可解を放置できず、口を付いて出た言葉に、リーゼロッテは肩を震わせたまま答えた。

「私……、エトランジェ様のお話が好きなんです」

「は？」

「歴代エトランジェの人たちは、亜人を差別する人が少なかったそ

うです。会うことは叶いませんでしたが先代もそうだったそうです」

野蛮な獣は下、知恵のある理性的な人間は上。そういう考えは、この世界にも根付いている。

そのなかで、亜人とは、知性を兼ね備えた獣ではなく、野蛮な者として扱われる。

彼女は亜人。城で働いているのは王女が変わり者なただけだ。城でも尚、差別は残る。

でも、彼女は気丈に笑った。

「だから、エトランジエ様は全亜人の憧れです。差別せず、勇敢で気高く戦場を駆ける」

「俺はそれとは程遠いと思うが」

「だからですよ」

そう言って彼女は微笑んでいる。

綺麗な、笑みだった。

「私は、コテツさん中庭に寝転がって昼寝しているのが一番”らしい”とおもいます」

「らしい……？」

「はい、だからコテツさんは戦場で死んじゃだめなんです。逃げて、どこかで畑でも耕してください」

その言葉に、コテツは愕然とした。

それだけで、命を賭けるに足りるのか、と。たったそれだけで戦場に命を晒せるのかと。

「私、人間が大好きなんです。差別しない人は、もっとすきです」

だとするならば。

コテツの命をそうまでして救いに来たりゼロツテに報いるのは、シャルロットの思いに応えるのは、恩を返すのならば。

(命を賭けるに、十分だ)

コテツは、胸中に火種が灯るのを感じた。そして、見る。

白と黒の機体。腕に刻まれた文様が、相変わらず何故か気になった。

(……やるだけ、やろうじゃないか)

「あざみ、いるんだろう?」

胸に灯りかけた炎。

それに任せて、機体に向かい、コテツは呼びかける。

ふっと、コテツの前に、女の姿。

「なんででしょう?」

コテツは、ここに来て初めて己の希望を口にしたような感覚に囚われた。

(ここに来て、俺が望む初めての言葉は)

ここに来て、心から何かをやりたい、と思ったのは、この世界に来て一週間あまりの中で。

今日が初めてだった。

「君に俺を乗せる」

リーゼロツテも、あざみも、驚愕に固まっていた。

コテツだけが、真剣にあざみを見ていた。

「だめか？」

「い、いえ。確かに私としても搭乗者がいないと動けませんし。誰でもいいから兵士を探しに行かねばならないところでしたが」
「ならば丁度いい。俺を乗せてくれ」

間髪入れずにコテツは返した。

あざみは、少し考えるようにあごに手を当てていたが、すぐにコテツを見る。

「まあ、貴方ごときに私がいこなせるとは思えませんが。どうせ変わりませんしね。最終的に私がコントロールして、貴方は座っているだけですから」

「とりあえず、乗せてくれるだけで十分だ。後は俺次第、だろう？」
「わかってるじゃないですか」

コテツは言いながら、直立している機体の装甲を軽やかに上って、コクピットである胸まで到達した。

「……タラップ下ろしましょうか、と言おうと思ったらすぐに上ってこられるとは。これだけ見ると熟練者みたいなんですけどね」

あざみが呟くが、コテツは無視して乗り込もうとする。
と、その背に声が掛かった。

「コテツさん！ また、行くんですか!？」

リ―ゼロツテだ。

心配が、声に多分に含まれていることは、コテツにも感じ取れた。だから、コテツは振り向くと、笑って返した。

「今度は生きて帰るぞ」

見た目よりずっと軽やかに機体が空に舞い上がる。

「強気の発言、いただきました」
「問題ない」

コクピットは複座になっており、すぐ後ろにはあざみがいる。

「しかし、エトランジェと言うものは本当に感性が一個ずれてますね」

「なんだ」

「亜人。中でも獣人に対する態度がすごいですよ。先代なんて『ケモ耳馬鹿にするとか潰すよこの国』とか言って一時期騒ぎになりましたし」

先代の言葉は、聴かなかったことにした。

「彼らは、慎み深い獣だ」

「ほほう、これまた面白い表現ですね」

「どうも俺には俺が彼ら以上だとは思えん」

そう呟いた瞬間、有効射程内に敵機の姿を視認する。

「さて、では戦闘ですね。少しでも無様な真似をしたらコントロールをこちらに移しますから」

「武装は？」

問えば、返ってきたのは、小馬鹿にしたような、試すような声色だった。

「男なら拳なんじゃないですか？」

今度の相手は、銃を持っている。

冷静に、コテツは相手を観察。

「了解、では行くか」

「え？」

果たして、自分の言葉に怒声が返ってくると思っただのか、あざみから呆けた声が聞こえてくる。

無視して、コテツは飛んだ。
アルトであるこの機体を警戒して、困んでいるのは五機。
その眼前へとコテツが迫る。

『っ……、速い!?!』

相手の通信が、唐突に聞こえてくる。

「うるさいな、相変わらず」
『撃てッ!?!』

そして、構えられた銃口から、無数の弾丸が吐き出された。
その場にいた全員が、それは当たると判断した。

アルトの装甲を抜けるかどうかはともかくとして、当たるとは思
っていた。
しかし。

「遅いぞ」

右へ、左へ。上へ、下へ。

(っ……!?! この機体は ……!?!)

直角よりも鋭い角度で白黒の機体が宙を踊る。
当たらない。

五機による一斉射撃が、いくら続けても、一度も当たらない。

『くそ、撃てっ、撃てっ!! いつかは当たる! こちらのほうが
数が多い!?!』

その、次の瞬間。

隊長機の眼前に、コテツの機体は現れた。

『いつ！？ いつの間に……』

「射撃に夢中になるからだ」

既に腕は引き絞られている。

そして、すぐさま鉄槌は放たれた。

拳が、唸りを上げて敵機の頭を砕く。

「い、一機撃墜です……」

そして、そのまま反転。

近場にいた機体に勢いそのまま回し蹴り。

太い足に、機体は砕かれ地に落ちる。

「に、二機、撃墜……！？ 嘘でしょう！？ こんな簡単に……！」

驚愕の声で、あざみが撃墜をコテツへ伝える。

コテツは、答えもせずにもう一機へと迫った。

『うわあああああ！！』

怯えて下がりながら銃を乱射する機体に向かって、すべての弾丸を避けながらコテツは迫り。

「覚悟はいいか」

敵機を掴むと地面へと叩きつけるように放り投げた。

『な……』

三機目が地面に落ちて動かなくなり、動揺が広がる。

『強い……』

『一瞬で三機落ちたぞ!!』

『化け物か!!』

「……すごい。すごいです……!!」

敵にも、後ろのあざみにもだ。

「腕が悪いなんてとんでもない……!! こんな実力を隠していたんですかあなた!!」

(機体が俺の意思に付いて来る……)

そんな中、コテツだけが冷静な顔で敵を見ている。

(機体が、思ったとおりに動く……!!)

そして、無意識にその口の端は、吊り上っていた。これは、そう。

前の世界の感覚。エースだった、望月虎鉄の感覚。そう、あの頃の。

「そうだった……。何故忘れていた。……これだ」

この世界に来て初めて出会ったと思う通りに動く機体。この世界で初めて出会った相棒。

まるで、頭に溶けた鉄をぶち込まれたようだ。

ただひたすらに頭が熱い。

「そう、これが……」

持てるすべてを、叩き付けたい。

胸に、燃え立つものを、コテツは確かに感じていた。

エース。コテツはエースなのだ。

ただの練習機如きでは我慢できない。

あんな機体ではコテツを満たせない。

あんな機体では、あの空を飛べない。

だが、今なら飛べる。

「これが、エースの空だ　　！！」

『ディステルガイスト』

その機体は悠然と宙に立つ。

そして、そこで気がついた。

何故腕の文様が気になっていたのか。

何故そこにコテツは違和感を感じていたのか。

もう見ることはないだろうという先入観が見逃していた。

腕の文様は英語。何故か縦書きと横書きとだから余計に読みづらかった。

(そうか。これは、初代からのメッセージか)

態々、ドイツ名の機体に英語で記されたメッセージ。

地球人なら誰でも読めるように、という配慮。

コテツは、機体の右腕を胸の前に出し。

左の肘を右腕の上に乗せ、立てる。

「確かに……、受け取ったぞ」

左腕には縦書きで D E A D の文字。
そして、右腕には L I N E の文字。

『 D E A D L I N E 』

> i 3 1 2 8 6 — 3 1 2 5 <

”これが、最後の砦だ。”

その時、全ての機体が、それを見ていた。

開発者のメッセージ。

開発者の思い。

開発者の祈り。

今は。

コテツの気迫。

何故か、戦いすらも忘れて、皆それを眺めた。
唐突な、死線の出現を。

「覚悟を決めて……、越えに来い！」

4話 エースの空（後書き）

ついに無双発揮の予感。

そして、まさか挿絵まで入れることになることは自分でも思っていなかった。

5話 Line Over!

「もう一度問う！ あざみ！！ 武器は！！」

「は、はい！！ 腰部バインダー内に日本刀とハンドガンが入ってます！」

「日本刀を出せ！！」

言われるがまま、あざみは巨大な腰部バインダーを操作し、ハッチを開閉させ、日本刀をせり出させる。

それを両手にディステルガイストは敵へ迫る。敵は、銃からブロードソードに持ち替え、迫るディステルガイストへと振り下ろす。

『え？』

だが、果たして敵に何が起こったかわかっただろうか。

すれ違い様の一瞬のうちに細切れにされ、地に落ちた兵士の声は、なにも分かっていないように聞こえた。

「次っ」

それを尻目に、もう一機へ、ディステルガイストは飛翔する。

その機体は、努めて冷静に銃弾を放つ。

「行けるか……、いいや、行くッ！！」

次の瞬間、あざみは信じられないものを目にした。

振り払われる、己が機体の刀。

横に振るったそれが、弾丸を切り裂き、弾く。

(人間にこんなことが!?)

あざみの驚きを無視して、距離はゼロへと狭まり、敵は貫かれる。

「ハンドガンを出せ!」

「はいっ、すぐに!」

「射撃操作をマニュアルに!」

「はいっ!」

腰部バインダーからハンドガンがせり出す。

すぐさまディステルガイストはそれを掴むと、早撃ちのように、向かってきていた敵を撃ち抜いた。

そして、ブーストを吹かし、前進しながらの回避行動で機体は錐揉みに進んでいく。

その中で、まるでめちやくちやな射撃の嵐。

しかし、その弾丸は的確に敵機を落としていく。

(こんなことって……)

心中で、あざみは呟いた。

通常、振り回されるのは操縦士だ。どんな機体でもまずは操縦士が機体に振り回され、そして振り回されないようになっていくのが上達というものだ。

しかし、これはどうだ。

気を抜けば自分のほうがコテツに振り回されそうになっている。

(動く……、今までとは大違いだ。思ったとおりの動きが出来る!)

そんな中、聞こえるコテツの心の声は、歓喜に溢れているように聞こえた。

ディステルガイストに乗っている間、エーポスと操縦士はスムーズな行動のために、お互いの思考が読める。

(確かにピーキーな機体だが。そんなものにはいくらでも乗ってきた。その度にどんなじゃじゃ馬も乗りこなしてきた)

(並みの機体じゃ動けないわけですね。この反応速度じゃ、アインスなんかじゃついていけない)

コテツの腕が悪いと評されたのは、まるで嘘だった。

機体の方が、まるでコテツに付いていけないのだ。

あざみには分かる。まるで嵐のような入力のは普通のは機体じゃ処理しきれない。

そして、この見切りには、ただの機体じゃ付いて行けない。

パイロットの能力を、百分の一も引き出せない！

(……練習機なんかじゃこの人の相手は務まらない。もっと、私みたいな)

飛び続けるコテツの前に、一機の赤く輝く騎士に鋭い羽の生えたような機体が立ちふさがる。

(私なら　!!)

それが、あざみの意識を現実へと引き戻した。

「エース機ですつ、気をつけてください！」

油断なく細身の剣を構えるその機体には隙がない。

『……まさかアルトが起動しているとは』

「……エースか」

『如何にも。我こそはジルエットが筆頭騎士、グラット・エイサツプ！ いざ参る！！』

「望月虎鉄。これでいいか？」

コテツが名乗りを終えた瞬間、場は動いた。

コテツの銃撃を、大きく横に避けながら、グラットの機体がコテツに迫る。

「避けるか」

『いかにアルトと言えど、一機で戦局を左右できるものか！ 私がこの場を引き受ける！ 諸君はこのまま戦闘を続けよ！！』

飛び込むグラット。

振り下ろされた剣と、盾にされた刀が鏝迫り合いを行う。

『ぐぐぐ……！！ さすがにパワーでは勝てんか』

パワーで勝るディステルガイストが剣を押し返し、グラットを後ろへ弾く。

「あざみ、ハンドガンを！」

「すぐにっ！」

即座にディステルガイストはハンドガンに持ち替え、銃撃。グラットはそこからすぐさま左に回避する。

『こちらから行くぞ！！』

そして、今度はグラットが襲い掛かる。

「剣による高速の連撃。

あらゆる角度から、斬撃がディステルガイストに迫る。

『おおおおおおおおお！！』

対するコテツは、両手持ちにした刀で受ける。

そして、幾度となく剣戟が交わり、甲高い音を上げ。

遂にディステルガイストの刀が弾かれる。

「そんなー！！」

これはまずい。

上半身が大きく後ろへ逸れた。

このままでは胴体ながら空きになる。

と、そこで気がついた。

目の前のコテツからは、焦りどころか、まるで笑うような感情さえ感じ取れたのだから。

（まさか　！）

逸れた上体が、更に深く沈みこむ。

『フェイント！？』

そう、フェイントだ。刀を弾かれたのは一撃を隠すための演技だった。

反りかえった上半身に追従して、足が跳ね上がる。

”サマーソルトキック”

ディステルガイストの足が、敵機の胸の装甲に直撃する。

『ぬおおおおおお！?』

そして、揺れて制御不能となる機体に、コテツは間髪をいれず拳を放つ。

右、左、そして右。

『ぐ、お、お！ だが!』

ダメージ甚大。

しかし、機体を立て直すグラット。

そんな彼に、コテツは冷たく言い放った。

「いや、終わりだ」

真上に弾き飛ばされた刀が、今、するりとディステルガイストの手の中に戻ってきた。

『な、な、な……』

一閃。

『ぬおおおおおお!』

両断。

(あり得ない……、エース相手になんて手際……)

「こんな……っ、激しすぎますっ……」

落下していく機体に目もくれず、コテツはあざみに問うた。

「あざみ。この場を一番手っ取り早く収める方法は何だ。やはり敵を殲滅すべきか？」

余韻もない。ただ、出来ることをこなしただけという空気。

(エース機なんて眼中にもないんですね、あなたは……！)

それが更に、あざみを熱くした。

あざみは、目の前の操縦士のために、本気でデータを漁り、思考する。

(えっと、どうしよう……、この場で一番速い手は……！?)

内心の焦りを抑えて、あざみは思考の結果を口にした。

「いえ、今回は相手が空戦用ということ念頭に戦いましょう」

「つまり？」

「戦艦を落とせばいいのです」

「どういうことだ？」

「空戦用機体は総じてエネルギー効率が悪く、戦闘継続能力に著しく欠けます。そんな彼らが補給のアテを失ったら？」

「戦場で孤立するのはごめんだな」

「そういうことです。よって戦艦を叩けば、皆すぐさま飛んで帰りたいくなるはずですよ」

「では、この機体の最大火力は？」

質問の内容が変わる。当然と言えば当然だ。

コテツはこう聞いている。

『この機体で敵艦は撃墜できるのか？』

あざみは、自身の顔がにやけるのを抑え切れなかった。

「ご心配なさらず。攻勢魔術を使います。ただし、実戦で使った試しはありませんから、どこまでやれるか未知数です。だから限界まで艦に近づいてください」

「攻勢魔術……？」

「ただの、光の束を打ち出すだけの魔術ですよ。実戦使用が初なのは、貴方が操縦してくれてるからです」

あざみが操縦までを担当してしまうと、魔術処理が追いつかない。しかし、この男には操縦アシストすら必要ない。

だから、撃てる。

「私は、貴方の元で、今日、初めて本気を出します。だから、信じてください」

ディステルガイスト、そして、あざみの全力。初めて出せるそれに、あざみは歡喜に打ち震えた。

(ああ、なんて愉快なんでしょう……!!)
「信じよう」

信じる、と彼は言った。言ってくれた。

誰よりも懂れた、たった一人のパートナー。

それが、眼前にいた。

「行くぞ、あざみ」

行くぞ、と言って名前を呼んでくれる。

それがこんなにも幸せなのだ、と。あざみは今気がついた。

「はい！ 行きましよう！！」

戦艦へと機体が、飛翔する。
無論、無抵抗とは行かない。

敵が、こちらの意図に気が付いた。
陣形を組み、戦艦への進行を止めようとする。

「邪魔だ！」

その射撃を避け、第一陣を抜ける。

そこからは、更に敵の壁が厚くなった。

敵機全てが、アルトを脅威と認識し、戦艦を守ろうと動いている。
とたんに激しくなる射撃。

しかし、それすらも避けて飛ぶ。

「まだまだ！ まだもっと速く飛べるはずだ！！」

あざみの耳朵を叩く、その声がなんとも心地よかった。

(どんな機体もモノにしてきた……。それで戦場を駆け抜けた。今回もだ。今ここでモノにする！！)

心の声も、ずんと胸の奥に響いてくる。

『第二陣突破されました！！』

(イイ……。いいですよコテツさん。私、あなたのものになってしまいそうです……。！)

色濃くなる砲撃。

戦艦の艦砲射撃も混ざってくる。

あざみも初めて見るほどの砲火。

『第三陣！ 壊滅！！』

だが、彼は言った。

「生……、温いッ！！」

生温いと。

この程度では小揺るぎもしないと！

「ああッ、コテツさんッ。こんなの……、初めてッ」

あざみは愉悦と歓喜に打ち震えた。

乗りこなされている。

今日初めて乗った男に。

『第四陣！！ 死んでも守りぬけええ！！』

それがなんとも、あざみには気持ち良かった。

「おおおおおおおおおッ！！」

『だめです！ 突破されました！！』

しかし、敵陣を突破したその時、敵艦の先端に光が集まり始める。

「主砲です！ ダメ！ 避けてください！！」

巨大なレーザー砲が、一瞬後には襲い掛かってくるだろう。

ディステルガイストの装甲を完全に抜くことは出来ないが、少な

くとも、機体は外へと押し出される。そうするとふりだしだ。また、敵陣を突破しなければならぬ。

だから、避けなければならぬのだが、コテツは猛進をやめなかった。

「え……、なんで？」

「あざみ」

いや、違う。

だからこそ。

「君にエースというモノを見せてやる」

コテツは猛進をやめなかったのだ。

あざみは、その、コテツのエースというものを嘘だと思った。

さもなければ、夢だ。

あり得ない。

それほどまでにあり得ない光景だった。

眼前を埋め尽くすほどの光の奔流を。

機体を包み込む太さのレーザーを。

ディステルガイストは刀で切り裂いて飛翔を続けているではないか！

(すごい……、すごいすごいすごい……！)

あざみは知る。

「これが……、エースの空っ」

これがコテツの世界。

エースの次元。
あざみと彼の、到達点。

「抜いたぞ……！ 後は任せた」
「はい！！」

攻勢魔術、展開。

ディステルガイストの前面に輝く魔方陣が描かれる。
コクピット内に響く、機械音声。

『Pentagram Standby・DEAD LINE……』

この戦いを終わらせる、最後の一撃。

「これが私と、コテツさんの……！！」

そして、彼と始める、最初の一撃。

「初めての共同作業です！！」

『Overr……』

魔方陣から、戦艦に大穴を明けるような光の奔流が放たれた。
。

慌てて逃げていく敵軍。こちらは、無理に追おうとはしなかった。
コテツは、深くシートに沈みこんで、ぼつりと呟く。

「……柄にもなく、熱くなったな」

「もう、休んでていいですよ。後は、私が操縦します。だから、帰りましょ」

「ああ、そうだな」

こうして、一つの戦いが終わる。

5話 Line Over! (後書き)

とりあえずこれを書き始めて一番やりたかったことはやりました。
次回エピソード。

6話 中庭と空

翌日。

謁見の間に、コテツは呼び出された。

アマルベルガが、跪いたコテツの前に立っている。

「貴方の働きを賞し、武勲勲章を授けましょう」
「は」

周囲がコテツを見る目は、お世辞にも祝福しているようには見えない。

彼らは、コテツの活躍に懐疑的である。

いや、王女含め、全ての人間はあざみが動かしたディステルガイストによって救われたのだと思っており、コテツは座っていたただけだと思っている。

ただし、ディステルガイストに乗って生還できた以上は国のために働いたものの一人だ。

故の勲章。
なのだが。

「ご主人様ーっ！ 探しましたよまったくもう！」

一人の闖入者によって、空気ががらりと変わった。

「…………ご主人様？」

いやな予感がして、コテツが振り向くと、そこには陽気に手を振るあざみがいた。

「あ、あざみ…………、今コテツをご主人様と…………」

「はいっ、アマルベルガ様」

「それがどういう意味かわかってるの？」

「ええ」

あっけらかんと、あざみは笑って答える。

そして、コテツを見た。

「今この時から私はモチツキ コテツをマスターと定め、この先いかなるときも、いかなる戦場でもお傍で貴方に仕えます」

「…………は？」

思わず、コテツの口から声が漏れ出た。

頭が痛い、とばかりにコテツは眉間に皺を寄せる。

「よろしくお願ひしますねご主人様」

「いや、しかし、そんな話は聞いていないし、俺はそんなこと要求した覚えは…………」

言えば、あざみは照れたように身をくねらせる。

「やですよう…………、もう。昨日はあんなに激しかったのに…………！」

場の空気が凍った。

「あんなに熱く、俺のモノにしてやるって……、責任とってくださ
いね？」

今代エトランジエはアルト乗り。

一躍、コテツは時の人となった。

まだ、城外には知れ渡ってないのが救いだが、しかし、時間の問
題でもある。

「……結局ここか」

場内では、どうにも好奇の視線に晒される。

それ故に、彼は今日も人気のない中庭に居る。

良いも悪いもない、ニユートラル。
それが一番コテツにとって落ち着く場所だ。
そんな彼は、これからの波乱を予測して。

「ご主人様ーっ！」

どう考えてもニユートラルではない声を無視することにした。

「……いつそ本気で農家でも目指すか」

中庭から見えるエースの空は、あんなにも遠い。

6話 中庭と空（後書き）

ということ、ひと段落。

続くかどうか未定の話だったもんで、書いてある分はここまでです。

元々、息抜きにテンプレ異世界召喚物がやりたくて始めたこれですが、非常に書きやすく楽しかったです。
ここまでコテコテなのは初めてでした。

テンプレのおかげですらすら書けるので、もしかすると続くかもしれません。

6・5話 寂しがりチャーターボックス（前書き）

これはおまけのようなものであり、七割方人物紹介のようなものです。

見なくてもまったく問題ありません。

6・5話 寂しがりチャーターボックス

召喚されてから一週間余り。

未だに私物の増えない殺風景なコテツの部屋に、長年置いてあった置物のように、当然のように、あざみは居た。

「何故君がここにいる」

訓練が終わって帰ってきたと思ったらこれだ。

元から部屋においてある椅子に、あざみは優雅に座って待っていた。

「いいじゃないですか。ご主人様。私はあなたの所有物なんです。

部屋においておいてくださいよ」

「断る」

「えー……」

「用はそれだけか？」

にべもなく言うコテツに、不満そうだったあざみが表情を変える。

「あ、それですすね、ディステルガイストは、あなたの搭乗機になったじゃないですか」

「否応なくな」

「ええ、ですから、あなたとあなたの周りの人間関係について把握しておこうかと」

なるほど、とコテツは一応の納得を覚えた。

これからあざみとコテツは長い付き合いになるかもしれないのだ。となれば、互いに理解しあっておくことは無駄ではない

コテツ・モチツキ

「では、まずあなたについて、聞かせて貰えますか？」

「俺、か。言うまでも無いが、俺の名前は望月虎鉄。元地球軍パイロット。こちらでは、コテツ・モチツキ。エトランジエをやっている」

「どのような経緯でこちらに？」

「火星を前に最後の任務を行った所、敵機の爆発に巻き込まれ、気が付いたらここへ、だ」

「なるほど……、歴代と似たパターンですね」

「どういうことだ？」

「どうもこの世界に呼ぶときには、そちらの世界から乖離しかける者の方が呼び易いようなのです。瀕死の重傷だとか、事故にあった瞬間だとか」

「なるほど。俺はまさに空間圧縮の爆発に巻き込まれていたからな。それで言えば、世界からかなり宙ぶらりんだっただろう」

「ははあ、そこをさつと掠め取られたわけですか」

「まあ、そんな所だろう。コテツ・モチツキ。エトランジエ、搭乗機はディステルガイスト。と、最低限でいくならこんなものか」

「そして、私の未来の旦那様で、ピーキー機体中毒って所ですかね」

「……色々聞きたいことはあるが、とりあえずピーキー機体中毒について聞いておこうか」

「ご主人様はピーキーな扱いにくい機体を乗りこなすことに無上の喜びを感じる方でしょうか？」

「……」

「だって……、こないだの戦闘中はおんなに……」

「確かに、昔からピーキー機体ばかりを押し付けられてきた経歴があるから否定しきれないかもしれんが、しかしその言いようは非常に人聞きが悪い」

あざみ

「私はあざみ。ディステルガイストのエーポスで、あなたの嫁です」
「……」

「長らくパートナー不在でしたが、ご主人様との運命的出会いによって、今に至ります。ちなみに、名前が日本系なのは初代エトランジエの趣味だそうです。他のエーポスはどうか知りませんが。ついでに、地球系の知識も持ってますよ。初代がインプットしたもので、時代がら偏っているかもしれませんが」

「そうか。しかし、聞きたかったんだが、そんなに良いパイロットは見つからないものか？」

「はい。これでも私は私とディステルガイストに誇りを持っていますから。パイロットの腕で侮られるのは我慢なりません」

「というか、どのように、前までのパイロットは駄目だったんだ？」

「機体に振り回されるのは勿論、コクピットで吐いたり、気絶したり、失禁したりならいいほうですよ」

「そうか」

「……操縦士を、殺してしまったこともあります」

「ああ、そうか」

「試しに乗られる分になら手加減が出来ますけど、国の危機となるとそうもいきませんから。私が制御して、本気で機体を動かすと、負荷で人が死んでしまうのです……」

「だから、有事の時以外はパイロットを乗せないようにしてきた、か」

「文字通り、命を燃やして国を守る英雄なのですよ。私に乗った人は。だから、あなたも」

「そうか」

「そ、そうかって……」

「俺は死ななかつた。そして死なない」

「あ……、はい」

シャルロツテ・バウスネルン

「うーん……、役立たず扱いだったご主人様に分け隔てなく接し、一人前の戦士にしようとする努力が続けた……、これはライバルになるかもしれませんね」

「なんだいきなり。シャルロツテ・バウスネルン。王女騎士団団長。俺にとっては上司に値する。が、今回の件で正式な戦力としてエトランジエと認められたおかげで、直接の指揮下からは外れるな」

「エトランジエは基本的にどの権力、階級からも離れた存在ですからね」

「まあ、騎士団に所属していたのは、戦闘レベルに達してない俺への一時的な措置だったというわけだ。と言っても、しばらくは騎士団と行動を共にすることになるだろうし、シャルロツテに指示を仰いで動くことになるだろう」

「まあ、ご主人様もこの世界は初心者ですからね。自分の判断で動くにはまだ早いですし」

「とりあえず、俺から見れば、彼女は高潔な武人と言った所か。腕も良い。この国ではトップクラスだろう」

「あと、胸が大きいんですよえ……」

「なにを言っているんだ君は……」

「まあ、王女騎士団は王女と王都の守りの要ですから。団長ともなれば当然の強さです。むしろ、此度の戦いで持ちこたえられたのは王女騎士団の働きがほとんどですよ。攻めたのはご主人様ですけど」

「なるほどな」

「そもそも、常に整備を完全しておくような部隊は王女騎士団くらいなものです。他の部隊は油断しきつてますから。戦争始まったって聞いてから整備すれば首都防衛に間に合うはずって」

「まあ普通はそうなんだろう」

「エトランジエが稼働すれば一人でもどうにかなる風潮だったので」

今回の件で整備体制を見直したそうですが」

リーゼロッテ・クリッツェン

「ケモ耳少女……。萌えですねえ」

「……リーゼロッテ・クリッツェン。エトランジエ専属メイド、ということになっている。俺の召喚と同時に自ら志願したらしい」

「亜人の要望が通るとは珍しいですね」

「王女が許可したらしい」
「なるほど」

「王女は使えるものは使う、と言った空気で能力さえあれば亜人でも関係なく扱う。周りからの反応は、主立って差別をすると王女への反逆になるため、できる限りいいものと扱っているようだ」

「根は深いですね」

「本人は、それでも気丈に振舞っている。戦う人間ではないが、気高く憤み深い」

「あら……。好感度高め？」

「王女曰く、エトランジエの付き人は常人じゃ務まらない、だそう
だ。まあ、危険な場所にも出向くことになるだろうしな」

アマルベルガ・ソムニウム

「王女だな。アマルベルガ・ソムニウム」

「優秀な方らしいですよ。王が崩御してからは、彼女が国を切り盛りしています」

「一週間と少しで見極めれた訳でも無いが、まあ、確かに、指導者として優秀なのは感じる」

「まあ、王様もピンキリですからね。国の一つ一つを見ていけば凄い人も駄目な人もいますよ。この国も先々代は駄目な人でした」

「この時期に呼ばれた俺は幸運ということか」

「そうかもしれない。ぱっと見分かりませんが、慈悲深い人ですし」

「まあ、俺を処分しなかった辺りな」

「その慈悲深さは正解だったと思いますよ。私とご主人様のタッグは最強ですから」

クラリツサ・コーレンベルク

「……誰です？ それ」

「騎士団副団長だ。まあ、俺とも関わりは多くないからな」

「ははあ、副団長」

「年は俺より年下だろう。というか、一回りは下……、十六、七と言ったところか」

「所で、ご主人様の年齢は？」

「三十二だが」

「詐欺ですっ！ 三十路とか嘘でしょう！？」

「……君の目にはどう映っているんだ」

「若くて十代。そうじゃなければ二十代前半」

「まあ、日本人は若く見えるという話だ」

「私だって日本人ですよ。見た目のベースが、ですけど」

「機体の製造日から考えれば随分な若作りだな」

「ええと、それはともかくですね。そのクラリツサさん？ どんな人ですか？」

「優秀だが、青いな。上手いのだが、巧くはない。老獪さを覚えていく前段階、と言ったところか」

「未来有望ですね」

「融通が利く柄じゃないらしく、役立たずのエトランジエである俺に反感を抱いてるらしい」

「あ、敵ですか。殺しましょうか？」

「やめろ。ともかく、まあ、ことあるごとに嫌味を言ってくるが、可愛いものだ」

「可愛いものですか」

「嫌味代わりにコクピットにライフル撃ってくる奴よりはマシだ」

「そんな環境あるんですか」

「俺達のエースというのは、頭のネジが一本取れた相手を指すこと

が多い」

デイステルガイスト

「私自身であり、私の相棒であり、あなたの相棒で、あなたの嫁です」

「そんな鋼鉄の嫁は御免だぞ」

「スペックは……、どちらかと言うと高機動接近戦よりですかね。

装甲は厚めで、重いですが、しかし速いです」

「そうだな」

「ただし。重いのに速いという特性を手に入れるために、操縦難易度が非常に上がりました。速いのに重いから、その機動に振り回されます。まあ……、ご主人様には関係ない話ですか」

「ふむ」

「砲撃もしますが、これは私の方で制御する攻勢魔術系統なので、やっぱり接近戦よりと考えておいて構いません」

「砲撃は勝手に君の方で行ってくれる、ということでもいいのか？」

「基本的には、ですね。もしかすると機体の足を止めて欲しいとか協力を要請する場合もあるかもしれませんが」

「なるほど、では武装に関しては何？」

「メインで扱い易いのは先の戦闘でも使った日本刀とハンドガンですね。あと、私の得意分野は光魔術。つまりレーザーです。他にも腰部バインダー内に多彩な武装が積まれているのですが……、多彩すぎて、使えるのか分からないものまであります。私もちよつと思いついてからでない」と

「選択肢が多いのはいいことだが……」

「初代はかなりずれた人だったんですよ」

「まあ別に問題ないか。ところで、途中から戦闘中に君の心の声が聞こえるようになったが、アレは？」

「アルトの機能の一つです。イーポスと操縦士の円滑な意思伝達のため、という奴ですよ。普通に乘せると一方的に操縦士の声がイーポスに聞こえるんですけど、マスターと認めた相手なら、相互に思考を伝えることが出来ます」

「と、まずはこんな所ですかね。あなたを取り巻く環境については、また今度お話ししよう」

いいながら、あざみがテーブルの上のろっそくを消す。

「そっだな」

「コテツが頷くと、あざみは笑った。

「では、おやすみなさい」

「……なに？」

にっこりと笑ったあざみは……。

コテツのベッドに柔らかな音を立てて転がった。

コテツは、頭痛をこらえて、それを見ることとなる。

「あざみ」

「ふふふ、なんですか？」

ベッドの上に寝転がって、にこにこことあざみは笑う。

「そこは俺のベッドだと思っていたが」

「ええはい、そうですよ？」

「俺が寝れないと思うのだが……」

「何を言ってるんですか、ご主人様」

何を当然のことを、とあざみは笑っていた。

「一緒に寝るんですよ？」

「……すまない。ここ数秒で急に耳が遠くなったらしい」

「一緒に寝ましようっ、ご主人様っ」

「床で寝る」

迷わずコテツはそう吐き捨てた。

何時でも整った場所で寝られるわけではないのがコテツの職業だった。

そのため、床で寝ることに苦痛はない。ベッドがあるに越したことはないが。

壁にもたれかかり、彼は床に座り込むと、目を瞑った。

そして、しばらくそうしていると。

肩に温かな感触。

「なんだ」

「ご主人様と一緒に寝たいんですよっ、私は」

いつの間にか隣に来て、肩に頭を預けていたあざみに、コテツは半眼を向けた。

「どうして君は」

その言葉は途中で遮られる。

「ずっと、待ってたんですよ？　ずっと憧れていたんです」

突然、あざみが寂しげな声を出したからだ。

「私の相棒、私のご主人様、私の伴侶。ずっと、一人で待ってました。だから……」

アルトができたのは千年以上も前のこと。それだけの時間を、彼女は待ち続けていたことに鳴る。

それを聞いて、コテツは立ち上がった。

「ベッドで寝る」

「あ、や、や、鬱陶しかったですか……？」

「君も入ればいい」

「え？」

「好きにしる」

呆けていたあざみの顔が、喜色に染まる。

「あ……。さすが私のご主人様ですっ！！」

「……あまりはしゃいだら部屋から放り出すからな」
「はいっ、大丈夫ですよーっ。大丈夫、ほどほどにしますからっ」
「……」

コテツは溜息を吐き、夜は更けていく。

6・5話 寂しがりチャーターボックス（後書き）

クラリッサ・コーレンベルクは次回出る予定のキャラです。

ついでに更におまけ。

> i 3 1 5 1 1 — 3 1 2 5 <

アインス

コテツが乗る練習機。

性能は中の下。機械としての頑丈さはないが、訓練生の安全を考え、装甲は厚い。

主機の出力も低く、勢い余った訓練生が全力で地面に激突しても死なないような配慮のなされた出力と言える、ただし、バランスがよく、上手くパーツを組みかえれば前線で戦える。

7話 量り謀り

鉄のヒトが、飛ぶ、跳ねる。
剣で打ち合う。

「鈍いぞコテツ！」

荒野で、二機のSHが戦闘を繰り広げていた。
戦況は誰がどう見てもわかる。

シャルロットの操るSHが優勢だ。

コテツのアインスは受けに回り続け、攻める空気を見せない。
シャルロットは、手に持つブロードソードで鏢迫り合いをしながら、シャルロットは声を上げた。

「どうしたコテツ、本気を出せ！」

『本気だ。可能な限りのな』

「確かに、お前の活躍を疑っている者は多い。だが、私はあの戦場で空を駆けるお前を見た。そして、あざみがお前を気に入っていることは、お前が只者ではない証明になる」

さすがに、全ての訓練にアルトを回せるわけではない。

アルトとエーポスとの関係に慣れておくのは、操縦士としての重要な課題といえど、ずっと死蔵されてきたに等しいディステルガイストが戦闘訓練、などというのは前代未聞過ぎるのだ。

手続きや周囲の慣れが出るまではやはり間に合わせの機体に乗せるしかない。

「だとすれば、こんなものではないはずだろう！ コテツ！」

シャルロッテは叫ぶが、コテツの動きに変化はなかった。相も変わらず後手に回り続けている。

ただひたすら受けに徹し、切り返す気配を見せない。

「それとも、私では不足か!？」
「……………」

シャルロッテの叫ぶような声に返事は無く。

声は返ってこないが、呆れたような空気が帰ってきたのは、シャルロッテにもわかった。

「やる気を出せ!！」
「と、言われても、な」
「何が悪いのだ!！」

やはり私では満足できないというのか。

シャルロッテは、口の中だけで悔しげにそう呟いた。

『お互い様だろう』
「何がだ!！」
『ここを狙っていない以上は』

そう言って、コテツが自分の機体の親指で差したのは、コクピットだ。

だが、当然である。いくら刃引きされたブロードソードであっても、当たり所が悪ければたちどころに死んでしまう。

訓練とは、相手を殺すのが目的ではない。

(しかし……！)

シャルロットは、連動型操縦桿を思い切り引き絞った。
連動型操縦桿。コクピット左右上部に付いている、ワイヤー付きの操縦桿だ。

握力に反応して手を握り、腕を振ればその通りに機体の腕が動く。そして、その連動型操縦桿を、シャルロットは前に突き出した。

「ならばお望みどおりにしてやる……！」

瞬間、無駄のない高速の突きが繰り出される。

相手が、それなりのパイロットであれば、何かアクションを起こすはずだ。

しかし。

コテツは、動かなかった。

ぴたりと止まる刃。

(反応すらできなかった？ ……いや、見抜かれていた！？)

反応しきれないにせよ、微動だにしないのはおかしい。

動揺すら見て取れないのは、寸止めに見抜いていたからか、とシャルロットは生唾を飲み込んだ。

(だったら……！！)

ここで、シャルロットは一つの覚悟を決めた。

(私はこの国のためにこの男を見極めなければならない……。この程度で死ぬのなら、この先もどうしようもない ……！)

更に、腕を。
突き出す。

『!!--』

刺されば、コクピットを貫くコースだった。
コテツが息を呑む音が聞こえた気すらする。

(本物なら、かわしきれないまでもコクピットくらいは逸らせるはず!--)

と、その時。

耳に響いたのは鉄がかち合う硬質な音。

装甲が刃を弾いたのか？

「は……」

否。

弾かれたのは、シャルロツテのブロードソードだ。

固まるシャルロツテの背後の大地に、その切っ先が突き刺さる。

一瞬にして、コテツの刃によってブロードソードは弾き飛ばされていた。

あの、一瞬で。

思わず、シャルロツテに笑いがこみ上げる。

「ははははは！ やるじゃないか、コテツ!--」

『狙い通り、か？ 悪趣味だ』

「さあ、今日の訓練はここまでにしよう」

『いいのか？』

「ああ。満足だ」

シャルロットは笑って、頷く。
本気的一端を知ることができた。
彼女としては、今のところはそれで満足だった。

もしも、王女もイーポスすらも騙しきる、実力は全く無い詐欺師ならば、例え己がどうなるかとシャルロットは排除しなければならぬ。

逆に、本物であるならば、何の問題もない。
そして、コテツは本物だった。それだけだ。

(これでこの国も一息つける。一つの峠は越えたと言っていていいだろう)

溜息を吐きながら、シャルロットはコンソールを操作し、ハッチを開いた。

コクピットハッチを開けば、太陽の光と共に清涼な空気が飛び込んでくる。

コクピット内には空調があり、内部の空気は整っているのだが、空調が効きすぎているばかりに、いささか作り物のような空気がある。

その空気が、シャルロットには嫌いだった。

「とは言っても、贅沢な悩みか」

そう、シャルロットは一人ごちる。

SHに空調が取り付けられたのは、さほど昔の話ではない。
軍人の乗る兵器というものに関して、人間のために予算は下りない。

この空調だって、電子機器の冷却のために、という名目で取り付

けられたものだ。しかも、一部の指揮官機のみを搭載されている。シャルロツテも昔は、空調の付いた民間の冒険者のSHを見て羨んだものだ。

それに、コテツのアインスには空調が付いていないのだ。訓練生の間からそういった快適な環境に身を置くとろくなことにならないという結果である。

だから、やっぱり贅沢な悩みだ。

「……ふう。少し暑いな」

シャルロツテは、片膝立ちになった機体の装甲を伝って地に降り立った。

夏が近づいて来て、気温は徐々に上がり始めている。

この国は季節による寒暖差がほとんどないのだが、それでも上がる時は上がる。

と、そこで、彼女はコテツのアインスを見た。

丁度コテツは、コクピットから出て地に降り立ったところだった。それに駆け寄る人影が二つ。

「ご主人様ー！ タオ」

「コテツさん、タオルです」

出遅れたあざみと、普通にタオルを渡しに行ったりゼロツテ。

「……出遅れました」

当然といえば当然か。リーゼロツテはエトランジェ付きのメイドなのだから。

「ああ、ありがとう」

無表情でコテツは返し、タオルを受け取るが、シャルロッテの視界には、汗一つかいているようには見受けられなかった。

(底知れんな……)

結局、今回は実力の一端を引き出しただけに過ぎない。只者ではないということがわかっただけで、詳しいことは何も、だ。

前回の戦闘はまったく参考にならない。そもそもアルトとパイロットがまともに稼動した、というのがこの国では珍事だ。

どこまでがエアースと機体性能の力で、どこからがパイロットの力なのか判別できないのだ。

(私より少し下か、互角か……)

シャルロッテはそう判断した。例えやる気を出したとしても訓練機あのレベルなら、それくらいであろう、と。

訓練機は誰にでも扱いやすいように組んである。

(……ただ、私の剣を弾いた一瞬は圧倒的、そのものだった)

結局、そこまで考えて、シャルロッテは頭を振った。

悩むのは性分ではない。どうせ、そのうち知れることだと、そこで丁度良く、シャルロッテに声が掛かった。

「お疲れ様です団長」

声をかけてきたのは、クラリッサ・コーレンベルク。シャルロッテが率いる騎士団の、副団長だ。

金の、柔らかく波打つ髪を肩まで垂らした少女で、吊り目がちであり、少々きつい印象を受ける。

背は低めで、そして印象通り、多少きついところがある。

非常に優秀な部下だが、融通が利かないところがあり、その辺りは今後の課題であろう、とシャルロットは捉えている。

そして、そんな部下に、シャルロットは目を向けた。

「ああ。なにか用が？」

「王女様がお呼びです」

「ん、そうか。では行ってくる」

「お気をつけて！」

その言葉に、シャルロットは苦笑すると歩き出した。

慕ってくれるのはいいが、慕われすぎると問題だ、と心中で彼女は呟くのだった。

7話 量り謀り（後書き）

自分の想定外の反響を貰ったので急遽二話製作開始です。

というわけで、前回までが一話なら、今回から二話目です。

クラリツサのキャラが二転三転したおかげで大変でした。

今回のメインはそのクラリツサです。

前回までに台詞一つだけと、キャラ紹介で出てきただけのキャラですが、前回までは読み切りの空気でテンポ確保のため必要最低限しか周囲を描かなかったので、これからは周囲にもスポットを当てて行きたいかと思えます。

8話 依頼否応無し

コテツは王城の廊下を歩く。

「ご主人様、やる気を出してくださいよ。そんなだから周囲に調子に乗られちゃうんですよー?」

「と、言われてもな。別に適当にやっているわけでもない」

左にはあざみ、右にはリーゼロツテ、だ。

「本当ですかー?」

「まあ、見た目にはなかなか分かんたろうが」

「えー、でもですねえ。こつ、あれじゃないですか。最後のアレみたいなガキインツって」

「確かに、アレはすごかったですね。あれだけ、雰囲気違いました。素人目ですから、よくわかりませんが」

あざみの言葉に、リーゼロツテも追従する。

しかし、コテツにとってあの一撃は本意ではなかった。

彼は、惘然と肩を落としながら口を開く。

「あの動かし方は、褒められたものではない」

「そうなのですか?」

だが、リーゼロツテが疑問符を浮かべると同時、あざみも首をか

している。

コテツは、説明しようとして口を開くが、背後から声が掛かって、それは中断された。

「コテツ・モチツキ！　こちらを向きなさい！」

刺々しい声に、コテツが無表情で振り向くと、そこにいたのは、

「クラリッサか」

「クラリッサか、じゃありませんコテツ・モチツキ」

そこにいたのは、王女騎士団副団長、クラリッサ・コーレンベルク。

「今日の訓練はどうでした？　まあ、どうせシャルロット様に負けたんでしょうけど」

「ご主人様、いきなり喧嘩売ってるんですかこの人」

「気にするな、いつものことだ」

「無視しないで、コテツ・モチツキ。不愉快です」

「無視はしてない」

「それで、今日の訓練は？　まあ、私にも一勝もしたこと無いあなたじゃ善戦しても三分持たないでしょうけども」

その言葉を、コテツは適当に流して返した。

わざわざクラリッサの嫌味に付き合うときりがない。

「用件は？」

「なにがです？」

「俺を蛇蝎の如く嫌う君が用も無しに？」

（いや……、嫌味を言いに来ただけかもしれないが）

結果としては、ちゃんとした用事はあつたらしい。
忌々しげに、クラリッサは口を開いた。

「王女様からのお呼びです。死ぬほど嫌だけど、一緒に行くから早くなさい」

「わかった」

彼女はコテツを嫌うが、律儀で真面目な性格でもある。決してコテツに不利になるよう賢しく立ち回ったりもしない。

見たまま、ストレートに考えをぶつけてくるだけだ。些か直情的ではあるが。

だから、命令があれば如何に気に食わない命令であっても彼女は遂行するだろう。

「と言うわけだ。俺は王女に会いに行くが」

振り向いて、二人に言うコテツ。

リーゼロツテは素直に頷いた。

「わかりました」

しかし、あざみは食い下がる。

「私はエトランジエのパートナーですから。同席しても構いませんね？」

対するクラリッサは少し戸惑った顔をしたが、すぐに平然として答えた。

「ええ、問題ありません、あざみ様」
「では行きましょうか」

いつの間にか、あざみを取り仕切っている。

険悪になり、クラリツサの嘲りに晒されるコテツを氣遣ってのものなのかどうかは判断が付かなかったが、なにを言つてもなく、コテツはそれに続いたのだった。

「よく来てくれたわ」

王女の執務室。

謁見の間以外で話をする、ということはまだ公にしたくないと言
うことだ。

その上、コテツ、騎士団団長、副団長と来れば、室内には厄介ご
との空気が漂っていた。

その、厄介ごとの気配のする空気を切り裂くように、アマルベル

ガは切り出した。

「公の会議でもなんでもないから前置きなしで行くわ。村から苦情が出てるから、三人で最近住み着いた山賊を倒してきて頂戴」

まさに、厄介ごと。

その言葉に、いち早く反応し顔を歪めたのは、クラリッサ。

「何故三人なのですか！？　こんな奴いなくても私と団長がいれば……！」

確かに、この三人という面子は異常でもある。騎士団としてでもなく、エトランジェとしてもなく、混成の三人で、だ。

その説明として、アマルベルガは更に口を開いた。

「クラリッサ、この討伐の目的はコテツのためにあるのよ。分かるかしら？」

「……どういことですか」

クラリッサが聞けば、アマルベルガはコテツのほうへと目を向ける。

「コテツ。貴方の風評は貴方がどうにかしなさい、というごことよ。

分かるかしら？　コテツ」

「……は」

そう、コテツの現状の評判は非常に不安定だ。

先の戦いの活躍を信じて敬意を払う者も居れば、頑なに信じない者もいる。

だから、評判をある程度固定化しなければならない。

一応のこと、コテツもそれは理解していた。
それ故、王女に言われ、コテツは頷きを返すのだが、それだけでは不服なのか、アマルベルガは彼に言った。

「公の場以外では素で構わないわ。むしろ思ったことを話してちょうだい」

言われて、素直にコテツは思ったコトを口にすることにした。
王女は聡い。下手に取り繕っては、火傷をすることになるだろう。ならば、言われたとおり本音で話したほうがいい。

「俺は別に……」

そして、本音を言うならば、コテツとしてはどうでもいいのだ。
風評も、なにも、馬鹿にされて怒るなら、もっと前に暴れている。むしろ、風評など知ったことではなく、好きに行きたいと思うのだが。

だが、そうは問屋が卸しはしない。アマルベルガは、ぴしゃりと言い放った。

「貴方がそうでも、国としては困るのよ。貴方の評価が低いと。だから、盗賊討伐をこなしなさい」

そこまで言っつて、アマルベルガは、今度はシャルロッテとクラリツサの方を見る。

「貴方達はその証明役よ。私が想定している最も上手くいったケースならね。王女騎士団団長と副団長が盗賊討伐への貢献を認めたら誰も文句は言えないでしょう?」

「ですが、こいつは……」

食い下がるシャルロッテに、王女は言葉を被せた。

「勿論、それは最高のケース。駄目なら、貴方達が討伐なさい。結果は変わらないわ」

「つまりこの男に手柄を渡せというのですかっ」

「貴方達にとってそれは誇りを汚す行為だということは分かっているわ。ただどお願い。必要なのよ」

不満はあるようだが、王女に言われ、クラリッサも渋々ながら、頷くこととなった。

「王女様が、そこまで言うなら……」

「そういうことよ。お願いね」

「はっ、了解です！」

クラリッサと、シャルロッテが揃って敬礼をする。

そして、話は纏まったのかと、コテツはどうでも良さげに窓の外へと目を向けるが。

「それとコテツ」

ぴしゃり、とそこに王女の声が掛かった。

「貴方がやる気になるかどうかは自由よ。ただどね、貴方の意思に関わらず貴方は国の中心に立つし、私が立たせるわ」

「今回の件のように？」

皮肉。だが、アマルベルガは涼しげな顔のまま。

「ええ」

「ふらりと呼び込んだ外人が国の中心か」

「そうよ」

「正気じゃない」

「わかってるわ」

最後まで、王女は、表情一つ変えなかった。

「お願いね」

「了解」

だから、結局コテツは、それだけ言って退室することにした。

「あなたは！ 女王様になにを言っているのですっ」

出るなり、コテツはクラリッサに肘で小突かれることになった。

「ちょっとちょっと、クラリッサさん、別に王女様も怒ってなかったじゃないですか」

「あざみ様……、貴方は何故こんな男のことを……」

「素敵だからですよ。他に理由がいます？」

言われ、クラリッサは言葉に詰まる。

行き場を失った矛先は、結局またコテツへと向けられた。

「コテツ・モチツキ！ 少し来てください！」

「何の用だ？」

「訓練です。特別に私が付き合っただけだから来なさいっ」

強引にクラリッサがコテツの腕を掴む。

（最近引き摺られてばかりだな……）

思いながらも、抵抗せずに引き摺られていくコテツ。

「あ、待ってくださいよご主人様ー」

「……大丈夫なのかこの面子で」

シャルロツテの問いに答えるものは、誰一人としていなかった。

8話 依頼否応無し（後書き）

ファンタジーテンプレの極致といえば盗賊の討伐だと思います。

9話 狐耳R&mp;R

「……まったく、やってくれる」

山賊の討伐を依頼された夜。

自室で、コテツはベッドの上に転がっていた。思わず、口から溜息も漏れ出る。

「大丈夫ですか？ コテツさん」

そして、そんな淀んだようなベッドの隣には、心配そうにコテツを見つめるリーゼロットが居た。

ちなみに、コテツの疲労の原因は簡単。

クラリツサとの訓練が、全ての原因だ。

「別に肉体的疲労は大したことはないのだが。精神的には少しな」

訓練自体はいい。最終的に夕方を過ぎるまで振り回され続けたが、体力には自信があるほうだったので、問題ない。

しかし、コテツを苦しめたのはクラリツサの嫌味攻撃である。

あまりに続く、とどまるところを知らない罵詈雑言は、容赦なく、じわじわとコテツを疲労させたのだった。

おかげさまで、やる気の一つも沸いてこない。

「なにか、して欲しいこととか……」
「特にないな」

言っと、リーゼロッテはしゅんと肩を落とす。
それに追従するように、耳と尻尾も垂れ下がった。
コテツは、それを見ようとせぜず、天井を見つめて思い馳せる。

(今回の訓練でラグの具合は随分と把握できた。しかし、機体の着地時のクセは……)

思い浮かべるのは今日の訓練のことだ。
行った操作。それに対する機体の反応。全てを思い出し、理想との差を浮かべていく。

それを蓄積し、もっともベターな操縦を探る。
そんな深い思考の海に、コテツはもぐりこんでいく。
のだが、そんな最中。

「む………?」

何故か、自分の手首が握られ、そして、何故かベッド脇に屈みこんだリーゼロッテの頭に自分の手が乗せられていることに気がついた。

思考から一気に覚めて、思わずそちらを見ると、唐突にひよっこりとベッドの縁からリーゼロッテが顔を出した。

「あ、あの。その、お姉ちゃんが言うには、えと。私に触ると、癒されるって、そんな感じのことを……」

戸惑うように、その狐耳がぴくり、ぴくりと震えている。

コテツは、思わず目を丸くしていた。

そんな中、リーゼロッテは続ける。

「ひ、膝の上に乗せて頭を撫でるのがベスト、だそうですっ」

そこまで来て、やっとコテツは苦笑で返した。

気遣われているのだ、と今更気が付く。

「その……、私じゃ貴方を、癒せませんか……？」

気が付いた頃には、その一生懸命さに申し訳なくなるほどだ。

「あー……、遠慮……、いや」

故に、そこまでしてもらっただけじゃない、遠慮しよう、とコテツは言いかけたのだが。

やめた。

また、失敗してしまったか、とばかりに耳が垂れそうになるのを見たからだ。

そして、彼は思い直すことにした。

(まあ、何事も経験か……)

気遣いや厚意を遠慮するのも美德だが、やりすぎは無粋である。

時にはそれに甘えることも肝要だ。

と、自分を誤魔化すように、コテツは頷いた。

「お言葉に甘えましょう」

「は、はいっ」

今度は緊張したようにピンと立つ尻尾と耳。

その緊張具合を見て、やっぱりやめたほうが良かっただろうか、とコテツの思考はあちらこちらとふらふらする。

だが、コテツが何事かを口にする前に、リーゼロッテは覚悟を決めたようだった。

「じゃ、じゃあ、失礼しますね」

ベッドの端に座りなおしたコテツの膝に、ゆっくりと腰を下ろすリーゼロッテ。

甘い香りが鼻腔をくすぐり、その髪が、物理的にコテツの首元をくすぐった。

そして、くすぐったさも無くなった後、コテツは、すっかりとりゼロッテ座ったのを確認して、聞く。

「それで、どうすればいいんだ？」

「え、っと、その、撫でてください……」

言われて、不器用にコテツは、リーゼロッテの頭の上に手を置いた。

ぴくん、と体全体で震えて、彼女は驚きを示す。

その反応に、コテツは一度手の動きを止めることにした。

「何か、まずかったか」

「だ、だいじょうぶです、はい」

「じゃあ、次はどうすればいい？」

「えっと、じゃあ、手、動かしてください……。髪を、梳いてみたりとか」

言われるがまま、コテツは手を動かす。

さらさらとした毛の質感は、人の髪の毛、と言うよりももっとふ

わふわとした気持ちのいい、まるで猫でも撫でているかのような手触りだ。

「こてつ、さん」

「なんだ」

「その、ちよつとくらい、癒されますか？」

「ふむ……」

「なんか、私の方が、癒されてる気がする、ごめんなさい。また、失敗ですね」

そんな言葉に、コテツは少し思案して、こんな答えを返した。

「いや……、そうでもない」

はたして、リーゼロッテをどれだけ撫でたか。

コテツの部屋に時計はない、というか、コテツはこの世界で時計を見たことがないわけだが、とにかく正確な時間はわからない。

が、それなりの時間が経ったため、緊張しっぱなしだったリーゼロッテもやっと、落ち着いて話が出来るようになっていた。

「すまないな」

「えっと、いきなりなんでしょう。謝られる心当たりがないんです

が

「こんなことまでさせて、だ」

撫でながら、唐突にコテツは呟いた。

リーゼロツテは、苦笑して返す。

「いいんですよ」

「そうか？」

「いいんです。私、あの時、コテツさんが生きて帰ってくる、って約束してくれて嬉しかったんです。だから、いいんです」

「そんなに、嬉しかったのか？」

「亜人の約束を守ってくれる人なんて、早々居ませんよ？」

「……そうか」

コテツには、耳と尻尾が狐の物であること以外に、リーゼロツテが普通と違うところを見出せない。

むしろ、かなり上等な人間にすら思える。

故に、リーゼロツテの受けているであろう差別を、どうにも実感できなかった。

「そういえば、コテツさん。クラリツサさんと訓練してたんですよ」
ね

そして、その話は終わりだ、とでも言うようにリーゼロツテは話題を変更。

特に追求すべきではない、とコテツは判断し、普通に頷いた。

「ああ」

「それで、お疲れなんですよね？」

「そうだ。突っかかって来るのは、可愛いものだが」

天を仰いで、溜息を吐くコテツ。
対するリーゼロッテは、嗜めるようにコテツに言った。

「適当に、あしらってるからじゃあ、ないんですか？」

「む……」

「ダメですよ？ 本気で相手してあげなきゃ」

「いや、しかし、別に手を抜いていると言っわけでもないのだが…

…

言い募るコテツに、リーゼロッテは、振り向いて真面目そうに言う。

「なら、ちゃんと言葉で伝えないと」

「むっ……」

「伝えようとしないと、何も伝わらないんですよ？」

そう言って、彼女はにっこりと笑う。

なんとなく、がらんどうの心に、暖かいものが入り込んできたかのような感覚を、コテツは覚えた。

そして、やっぱり、彼女の方が人として上等だ、と苦笑する。

この世界に来て、初めてコテツに火種を与えたのが、彼女。

だからこそ、そんな彼女をコテツは。

「……言葉を尽くすのは得意ではないが」

なんとなくではあるのだが。

「やるだけやろっ」

裏切りたくないと思った。
すると、彼女は笑う。コテツを信じるように。

「はい。応援してます。大丈夫ですよ、コテツさんはすごい人ですから」

「そうか？」

「はい……！ 私が保証します。驕らず、偏らず、ニュートラル。それって、すごいことです」

果たして、コテツがこのように人と触れ合うのはいつぶりだったろうか。

コテツ本人にはわからないが、どうにもリーゼロッテの笑顔だけは、眩しくて仕方が無かった。

「だから、色々諦めないください。頑張らなくてもいいですから」
「……諦めない、か」

「はい。微力ながら私が、全力でお手伝いしますから」

言われて、少しだけ、空の心に火が灯る。

彼女が、コテツに親切な理由を、コテツが全てを窺い知ることはいできない。

語ってくれた言葉の中にあつたものの他にも、もっと多くの理由があるのだろう。

（いつか、聞くこともあるかもしれん）

だが、こうして献身的に向き合ってくれる彼女を見て。

不思議と、胸に灯った火種を消したいとは思わなかった。

「……ご主人様、疲れてます?」

「いや、そうでもない」

アインスの狭いコクピットに、あざみと二人乗りをしながらも、コテツは涼しい顔で機体を動かす。

昨日結局夕方を過ぎるまで訓練を続けていたコテツをあざみは気づうが、彼は眉一つ動かさなかった。

『ちゃんと付いてきてますか?』

「問題ない」

コクピット内の響くのは、クラリツサの声だ。

コテツ、あざみ、シャルロツテ、クラリツサ。実際に移動しているのは三機。

「んー、でもアレですね。早めに予備の機体を用意してもらったほうがいいでしょうか。もしくは複座にこれを改造して貰うとか」

「そうかもしれないな。この世界の複座機がどんなものかは知らない

が」

「ディステルガイストを見せてしまうと盗賊が警戒する、と言うのも分かりますけれど、操縦しにくくないですか？」

「こういう状況にも対応するのが優秀な軍人、と言えどもこの先恒常にこうだと少々苛立つな」

「私としてはご褒美なんですけど」

あざみは、コテツに抱きつくように体を固定している。

「しかし、君は本当にディステルガイストを呼び出せるのか？」

「ええ。アルトの基本の機能ですよ」

こうして、アインスに乗っているのも、あざみが居れば即座にディステルガイストを呼び出せる、という機能があるからだ。

空間を渡って、機体を呼び出すことが、エーポスには可能らしい。

『さて、そろそろ中継の村に着くぞ。今日は一旦そこで休んで明日戦いに出る』

シャルロットの声が響き、その仏頂面を遠くにある村の遠景へと向けた。

「ところで、この件の山賊とやら、一体どのような相手なんだ？」

『ふむ、コテツは山賊の相手は？』

「元の世界ではそのような相手ともやったはずだが、その経験が役に立つとは思えん」

『それもそうだな……。今回の山賊は、今見えている村から更に奥の山にいる。奴らは山道に陣取り、そこを通る者から物を奪い取る。山賊がSHを所有していた場合馬車であればまったく歯が立たん』
「だろっな」

『通常は通る側もSHの護衛をつけるが、それができない場合は通行止めも同じだ。厄介がすぎる』

「これを討伐すれば名誉としては十分、ということか」

『無論。ここは重要な街道だからな』

石畳で整備されているわけでは無いが、一面の草原に、一本描かれた土色の道はかなり広い。

『さあ、村に着いたぞ。話は既に付いてる』

そうして、三機の機械の巨人は、草原へと膝を付くのだった。

9話 狐耳R&mp;R（後書き）

可愛いのは正義だと思います。まあ、リーゼロッテを出した時点でこういうことしたかったのは火を見るより明らかだった気もしますが。

一章のほうは読み切りのな空気ですっきり終わるようにアクを少なめで行きましたが、続くとあつてはとりあえずやりたいことやってきます。

しかし、これで私が狐耳萌えだということがばれてしまった様な気が……。

いえ、まあ、ケモ耳とかまるっと好きなんですけどね。

とりあえず、焦らずゆっくり一人一人前面に押し出して行けたらと思います。

どう考えてもメインキャラ全員並行に同時進行でプッシュとか無理ですし。技量的に。

10話 すれ違う訓練

「はあ……、このお方が、今回のエトランジエですか」

S Hの技術は、通常の生活にまったくと言っていいほど転用されてはいない。

そのため、村は周囲を木の柵で囲っただけ。村長の家でさえ木造建築。

鉄の色など、どこを探しても見当たらない。

「よろしくお願ひします、エトランジエ様」

エトランジエの名は、国中、村の一つ一つまで広まっているようだった。

村長は深く頭を下げ、コテツの手を握る。

コテツは、無言で村長の姿を見ていた。

「やるだけやらせてもらおう」

そう言って、コテツは村長から背を向けた。

その背を、あざみが追う。

コテツは、家を出て近くにあった木を倒して削っただけのベンチに座る。

「ご主人様？ どうかしたんですか？」

「いや……」

さりげなく、あざみがコテツの隣に座った。

「初めて首都から出たわけだが、こうしてみると」

「こうしてみると？」

「異世界に來た事を実感させられる」

「そんなモンですか？」

「外に出るまでは、いつそ地球に封建制の国が残っていたと言われたほうが信憑性が高いと思っていた」

「はあ、なるほど。異世界設定とか、壮大なドッキリの方が信じ易いかもしれませんね」

「だが、こうして世界の奥行きを見せられると、遠くまで來たものだ、とな」

遠く空を見上げてみても、コテツの居た地球と変わったところは見当たらない。

「大丈夫ですよっ、ご主人様。私がいいますからっ」

「まあ……、ある程度俺の世界の話題が通じるのは、助かる」

と、そんな二人に駆け寄る人影が一人。

コテツが足音のする方に目を向けると、底にはクラリッサが立っていた。

「コテツ・モチツキ。なにいきなり家から出てるんですか。村長さんが何かしたかって戸惑ってました」

「まあ、少しな」

クラリッサは、コテツに呆れた目を向けている。

世間知らずを見る目だ。

「まあ、それは異世界から來たんだから色々あるんでしょうけど。村長さんは今、いつ盗賊が山を降りてくるかって怯えてるのです。」

それを安心させるために胸を張るのも、私たちの仕事。余裕のあるフリだけでもなさい」

「そうだな。すまん」

「さて、じゃあコテツ、行きますよ」

「どこにだ？」

踵を返したクラリッサに、コテツは首を傾げた。

「訓練です、付いてきなさい」

有無を言わせず、クラリッサは言い切る。

これに逆らうと、ろくなことにならない。

ちくちくと、嫌味が続く上に、結局訓練させられるのだ。

コテツは、無言で立ち上がった。

そして、二人無言で歩く。

さほど広くも無い村を出て、膝を付く機体の元へ。

装甲を登ってするりと胸のからコクピットに入り込む。

コンソールを弄ると、ハッチが閉められ、機体が立ち上がった。

それは、クラリッサの機体も同じのようで、アインスと似ているようで、どこかスマートな印象を受ける赤い機体が立ち上がる。

それと同時に、コクピットに声が響く。

『真剣だけど、問題ありません。あなたの剣くらい避けるし、こっちは寸止めにするから』

「了解」

コテツは短く答えた。

確かに、コテツもクラリッサも、壊れる寸前で止めるくらいの技量はある。

それに、コテツのアインスであれば、壊れたとしてもディステル

ガイストがある。

山賊が警戒する件に関しては、他の面子に相乗りするなり、SHの手のひらに乗るなりして移動し、必要とあらばディステルガイストを呼び出せばいい。

そもそも、城内で信頼を得るまでコテツは一日も無駄にできないはずの立場だ。

だから、訓練も当然。

熱が入る。

『じゃあ、行きますよ!』

クラリツサからの通信が届くと同時、高速で赤い機体が踏み込んできた。

シユテイルフランメ。特徴は高出力による機動力とハイパワー。弱点は装甲の薄さ。クラリツサはその弱点を巨大な大剣を盾代わりに扱うことで、機動力を殺さずカバーすることができる。

コクピットには、その大剣が風を切る音すら聞こえてきた。

(機体が少し振り回されているな……)

考えた瞬間、インパクト。

横から迫る黒い大剣を、コテツはブロードソードを立てることで対応した。

「……ぬ」

初撃は防御に成功。

しかし、通常の出力が違いすぎる。

ともすれば押し切られかねない。コテツは受け流すように、しゃがみ込む。

頭上を大剣が駆け抜けていき、コテツはそのまま大剣を振り切った体制のシュティールフランメに突きを放つ。

『んっ……！ 悪くないけど、当たらない!!』

あるいは当たるかと思われた攻撃だが、すんででクラリツサは身を翻した。

コテツから見て右に体をずらしたシュティールフランメが、そのまま縦に剣を振り下ろす。

コテツは、片膝をついて、剣を横にし受け止める。

「ぐ……、くっ」

機体が軋む。

出力の違いは絶対的な差として、コテツのアインスを押しつぶさんと押し掛かって来ていた。

まず一番最初にガタがくるとすれば腕だ。まず腕が裂けて千切れる。

(避けられるか……?)

迷う暇はない。潰されない内にかする必要がある。

コテツは連動型操縦桿を握り、繊細な操作を行った。

機体を右にずれるようにしながら立ち上がり、剣は次第に切っ先を下へ向けるようにする。

調整をしくじれば立ち上がれず潰されるか、先に大剣が滑り落ちて体を切り裂くかのどちらかだが、コテツは上手く成功させた。

かみ合っていた刃は滑りあい、大剣は地へと向かう。

コテツはそのままブロードソードを横薙ぎにするが、あっさりと弾かれた。

(やはりこの動かし方だと、攻めは合わんな)

考えながらも、機体を動かす。

とりあえずは距離を取る。大剣の間合いの外へだ。

(しかし、このラグと即応性の悪さ。俺の世界で行けば何世代前の機体になるんだ……?)

クラリツサが踏み込んで、連撃を行う。

(しかも魔術補正か、妙に性能が良いから手に負えん)

まともに受けてはられない。

その全てをコテツは流すように受ける。

(この世界の技術では操縦周りの設計は難しすぎるのか？ だから機体性能にばかり目が行ってしまっ……、いや、マイルドな方が確かに動かしやすいか)

続く連撃。

コテツは受け続ける。

(……まあ、今回はこんなものか)

そして、最後に、コテツは持っていたブロードソードを弾き飛ばされた。

「参った」

『いつも通りですね！ コテツ・モチツキ！ シャルロット様が直

々にあなたを鍛えているというのに申し訳ないとは思わないんですか！！」

そんな声を聞きながら、コテツはコクピットから出て、機体を降りる。

そして、そのままコテツは近場にあつたベンチに座り込んだ。

少し遠くでは、クラリツサが機体を降りているのが見えた。

そんな彼女は、機体を降りるなり、すぐさまコテツの前へとやってくる。

「今日も私の勝ちですね」

そして、そう言ってクラリツサは無い胸を張った。

コテツは、そのクラリツサを見上げ、素直に頷いた。

「そうだな」

「……。ええ、これで私の何勝でしたっけ」

「七勝目だ」

「……そう」

何故か、彼女の眉間には皺が寄っていた。

コテツにも、機嫌がよろしくないことは見て取れる。

「……歴代最弱ですものね」

「そうかもな」

いや、現在進行形で悪くなっている。

コテツが言葉を紡ぐ度に、彼女の顔は不愉快そうに歪んでいった。

「本当、前代未聞ですね」

「だろうな」

「なにか思うことは」

「ない」

コテツは真顔で答えた。

「あなたは……！」

「なんだ」

「あなたは一体何なんですか……！？」

「君は俺に何を答えさせたいんだ」

そして遂に。

コテツはクラリツサの堪忍袋を引きちぎってしまったことを知ることとなった。

「……悔しがってくださいよ」

ぼつり、とクラリツサはその言葉をこぼした。

コテツは、意味がわからず首を傾げる。

「何故だ？」

すると、まるで堰き止めていたものが決壊したかのように。

「どうして悔しがりもしないんですか！」

遂に、クラリツサは語気を強めて言い放った。

コテツは、表情に出さないまま面食らっていた。

「負けても馬鹿にされてもへらへらと！　それが愉快的な訳じゃない

んでしょう？　あなたが悔しいと言つのなら　　！！」

コテツは、黙ってクラリツサを見上げる。

「ど、どうしてそこで捨てられた犬みたいな顔するんですか……」
「すまん」

捨てられた犬のような顔、というよりは困り顔だ。
コテツは人付き合いが下手だ。それを求められなかったからだ。
機体に乗って、勝ち続ければ何も文句は言われなかったのだ。

「なんで、謝るんですか」

「すまん。……とりあえず、どうして俺が悔しがらないのか、という話だったか」

コテツは、人付き合いの薄さゆえに戸惑う。
が、しかし、彼はそれでも一応考えて答えることにした。

コテツは、クラリツサを見上げたまま、口を開いた。

「負けたら死だった。悔しがる暇もない」

情けもまた誉れであるこの世界とは違う。

コテツの世界はもっと血なまぐさい。むしろ、エースは意地でも殺さなくてはならない存在だ。

「次があるのは素晴らしいことだ」
「だ、だからって！　どうして、あなたは……」

言葉に詰まるクラリツサ。それを見上げながらも、コテツは彼女の言葉の意味を考える。

「あなたを見てると苛々します！ どうして、あなたは平然としてるのです！」

「君は、俺に悔しがつて欲しいのか」

「っ……、そう」

クラリツサ。クラリツサ・コーレンベルク。

優秀だが、まだ未熟。融通が利かないが、真面目な努力家。

「……君が、努力家だからか」

「は？ あなたは何を言っているのです？」

どうやら、上手く伝わらなかったらしい。

コテツは今一度言葉を吟味する。

「つまり。努力もせず、嘲笑される側に甘んじていながらも、エトランジエでありアルトの操縦士に納まった俺が気に食わない、という事ではないのか？」

「っ……！！」

少なくとも。ただコテツ・モチヅキが気に食わないというわけで突っかかってきているのではない、とだけコテツは判断できた。

とりあえず、彼女が努力家の一人として怒っているのだ、ということも、わかった。

つまるところ、努力家からすれば、努力しないコテツは見てて立つ、嫌いだ、ということなのだろう、と考えたのだが。

言われたクラリツサは、驚いたような顔をしていた。

まるで、シヨックだ、とでも言いたげな顔だ。

「違う……、違いますっ！ もう……、知らないっ！！」

クラリツサが踵を返す。

コテツは声を掛けようとしたが、言葉が見つからなかった。

ただ、クラリツサの背を見送って、コテツは首を傾げながらのろのろと立ち上がる。

「……難しいな」

ぼつりと呟くが、それに返ってくる答えはない。

と、そこへ、見計らったかのように、あざみがやってきた。

「訓練、おしまいですか？」

「ああ」

頷くと、あざみはタオルを差し出し、コテツはありがたくそれを受け取った。

そして、少し、あざみに聞いてみる。

「あざみ」

「なんでしよう？」

「努力家にとって、努力しない人間は、どう映る？」

言葉に対し、あざみは首を傾げ、数秒の思考の後、考えを語った。

「私も努力家じゃありませんからわかりませんが。努力しろよこの野郎！ って感じじゃないですかね？」

「……ふむ」

結局、移動と訓練で日は暮れかけている。

コテツは、村に戻って眠ることにした。

「ねえ、ご主人様」

夕食を終えた後、ふらりと外へ向かい、一人佇んでいたコテツの背に声が掛かる。

コテツを主と呼ぶ女性など、一人しか心当たりはない。
あざみだ。

「なんだ」

「ご主人様って……、操縦以外基本的にダメ人間ですよね」

確認するような言葉に、思わずコテツは脱力する羽目となった。

「……否定の言葉は出てこないが。一体何の用だ」

「いえね、今日の訓練が終わってからクラリツサさんにガン無視されてたなあ、と思ひまして。何かあったんですか？」

「ふむ、まあ、そうだな。怒らせた」

事実だけを、コテツは短く告げる。

「怒らせたって……。まあ、いいです。とにかく、明日は出撃ですね」
「そうだな」

今日が終わり、明日の日が昇ればコテツ達は山へと向かうことになる。

コテツの初仕事であり、何もかも未知数だ。

「頑張りましょう、ご主人様っ」

「そうだな」

「むう……。やる気ないですねー」

拗ねたように口を尖らせ、あざみはコテツを見る。

そして、すぐに表情を戻し、コテツに向けて、妖しく笑った。

「そんなご主人様に一つご忠告を」

「なんだ」

「何も持たない、夢も見ないし願望もない。それは自由で楽ですけど」

月夜の下で、黒髪の少女はコテツに向かって囁いた。

「状況はそんな貴方を許しません。結果が同じなら自ら進むか、無理やり背中を押されて進むか。どっちがいいか、決めておいた方がいいですよ。？」

言うだけ言って、後はおやすみなさいと言い残し、あざみはコテツの元を去っていく。

「……この世界には、お節介焼きが多いのか？」

残されたコテツは、一人ぽつりと呟いたのだった。

10話 すれ違う訓練（後書き）

次回辺りから戦闘に入ります。

11話 イージーストレート

翌日。

S Hに乗って、一同は山へと向かっていた。

「しかし、相手の規模はどのくらいなんだ？ そもそも、三機で戦えるのか？」

コテツは、モニタの向こうに向かって質問を投げかける。

『問題ない。多くて十機。少なければ一機。構成員は三十はいるだろうが、全てがS Hを持っているなどということはあり得ない。目撃情報では四機は確認されている。伏兵追加で考えて、六機前後といったところか』

「こちらの二倍いると思っていいいのか」

『だが、こちらは騎士団長と副団長だ。そして、お前はディスプレイに乘れば一騎当千も同じだろう？』
「さてな」

しばらく歩き、山は目前となる。

緑が生い茂る、変わったところは見受けられない山だ。

そして、その前でコテツは機体を立ち止まらせた。

『どうした？』

「妙だ」

嫌な、予感がしていた。

無論、それはただの予感であり、気のせいであるとも言える。

だが、戦場において臆病であることは、生き残る上でプラスにな

る。

『怖気づいたのですか？ コテツ・モチヅキ』

コクピットに、クラリツサの声が響き渡るが、コテツは無視して山を睨み付けた。

リーダーには、何の反応もない。

やはり、妙。

(ここまで何の偽装もせずにSHで歩いてきた……。どう考えても山賊にばれているはずだ。なのに相手のSHが一機も見えない……。)

定石であれば、斥候を出す。

山賊にそういった用兵術がないとしても、見張りぐらいは立たせるはずだ。

「畏だ」

コテツは強めに口に出す。

『畏？ 山賊たちは飲み明かして寝こけているだけかもしれないぞ』

違和感は、嫌な予感に変わって、ひしひしと迫ってきていた。

あまりにも静かな山。まるで嵐の前の静けさではないか。

敵のSHを見つけて慌しく駆け回るでもなく、ただ、静か。

(十中八九、待ち伏せか)

コテツの感覚からすれば、静か過ぎるのだ。

そう、過ぎる。まるで、あえて息を潜めるかのような。

静寂に徹しているかのような空気。

この業界で慎重に過ぎるとい言葉はない。

用心に用心を重ねてなお、一撃で死ぬ可能性がある世界だ。

樂觀どころか、もしかするとこちらを一瞬で葬り去れる罠が張つてある可能性を考慮すべきだ。

少なくとも、コテツはそうあるべきだと考えていた。

だが、しかし。

『怖気づいたのですか、コテツ・モチヅキ。ならば、あなたはここに残っていなさい』

「罠の可能性は」

『どちらにせよ私たちは山賊を倒さなければならぬ。なら、どちらでも一緒です。待ち伏せされていようと、私と団長の腕なら問題になりません』

『悪いが、こればかりはクラリッサと同意見だ。やることは変わるまい。それに、罠があったとしても、それごと突破するまでだ』

「ここは、そう。」

「ここはコテツがいた、泥まみれの戦争を続ける世界ではない。」

正々堂々を誉れとする、騎士の世界なのだ。

(軍人の理屈は騎士には通用しないのか……！)

そこをコテツは失念していた。今所属しているのは合理性を突き詰めた軍隊ではないということ。

歯噛みした時にはもう遅い。

『そこまで言うならあなたはそこで見ていなさい！ 私が一人で片付けてきます！』

既にクラリツサは大きく飛び上がり、山へと駆け出していた。

「シャルロット、すぐに呼び戻せ」

『そこまでか?』

「ここまでやって何もしないということは懐に潜り込ませる気だ」

『いや、しかし山賊にそのような高度な考えがあるとは……』

シャルロットが呟いた瞬間、場に動きがあった。

山中に突如現れる反応。立ち上がる一機のSH。

「……アレはなんだ?」

「ストラッドですね。量産型ですが、バランス良く纏まった軽快な動きをする機体です」

コテツの隣で、じっと事態を見守っていたあざみが呟く。

緑の、スマートな機体だ。

「意匠が、随分と違うように見えるが」

「我々の機体が騎士に似た意匠なのは軍のモノだからです。民間用は多種多様です」

コテツからしてみれば、そのストラッドは随分と軍人的な外見に見える。

そして、その緑の機体は、ナイフを片手にクラリツサのシュティールフランメに斬りかかる。

そんな中、シャルロットは呟いた。

『ふっ、お前の嗅覚もまだまだだな。アレが罠だとすれば』

そして、余裕たっぷりな笑み。

クラリツサの機体が、背の大剣を跳ね上げる。
それは明らかにナイフの迎撃には間に合わないような速度だった
が。

『随分とお粗末だ』

刃ではなく、柄を振り下ろして、クラリツサはそのナイフを弾いて見せた。

『舐められたものですね！』

そして、手首を捻って横薙ぎ。

相手のストラッドは、慌てて後ろへと避けて、尻餅を突く。

そのまま、クラリツサは大剣をストラッドの眼前に突きつけてみせる。

『おとなしく、機体を降りなさい。そうすれば殺しはしませんが』

確かに、見事な手際であった。

この腕の差、そして、武器無しではクラリツサに山賊が敵うわけが無い。

あっさりと、無力化されストラッドのコクピットハッチが、開く。

『やはり、警戒しすぎだな、コテツ。山賊のことだ。昨晚飲み明かして、大半が使い物にならないのだから』

(いや、しかし……)

果たして、コテツが異世界の山賊について知らないだけなのだろうか。

だが、コテツの嫌な予感は払拭されないでいる。

むしろ、更に深まっていく。

(上手く行き過ぎている……!?)

そう、むしろ、だ。

相手の本拠に飛び込んだら、一機だけという温い待ち伏せ。

そして、あっさり負け、素直に投降する盗賊。

あまりに上手く行き過ぎていないか。

だとすると、これは相手の仕組んだものではないのか。

そして、これが本当に相手が仕組んだものだとすれば、狙いはなにか。

(あの機体は囷。だとすれば次に狙うのは……)

考えてみれば、恐ろしく簡単だ。

今、クラリツサは一機に剣を向け、足を止めている。

恐ろしく、いい的だ。

「狙撃だ、クラリツサ！ 避けるっ!!」

『え?』

コテツが叫んだのと、レーダーに光点が映ったのは、ほぼ同時だった。

そして。

クラリツサが驚いた声を上げた瞬間には、既に銃声が響いていた。

『あ……、きゃあああああ!』

倒れていく機体に、コテツは歯噛みした。

(なんとという腕だ……！ 機体が起動してから一瞬で関節に当たった！)

山賊の放った銃弾は、クラリツサの機体の膝の裏に命中し、そのまま貫いた。

結果として、左足の膝から下が切り離され、機体はバランスを保てず仰向けに地に伏すこととなった。

コテツの元まで、地響きが聞こえてくる。

『な……、クラリツサ！ 無事か……！』

『はい、団長、なんとか。ですが、足がやられました！ 機体を立て直せません……！』

クラリツサの声は、ほとんど悲鳴と言ってもよかった。

完全に嵌められた。油断し、釣られて、撃たれた。

これでクラリツサはまったく身動きが取れない。

コクピットを出たが最後、すぐさま撃たれてしまっただろう。そうなれば、ハッチをロックして神に祈るほかに、出来ることなどない。

『すぐに救援に向かう……！』

その状況を見て、シャルロツテが叫ぶ。

だが、その彼女を、コテツは制止した。

「待て」

『一体なんだ……！』

「これこそ罠だ。落ち着け、シャルロツテ。クラリツサはすぐには死なん」

瞬間、今一度銃声と悲鳴が響く。

銃弾が、クラリツサの機体の胸部装甲を叩いた。

威力的に貫通することも無く、少し装甲が削れたただだったが、部下の悲鳴はシャルロッテの頭に血を上らせるには十分でもあった。

『なにを戯言を！』

「だから待てと言っている！」

遂にコテツは、声を荒げた。

クラリツサが先行してしまったのは、コテツの態度が中途半端だったからでもある。

だからこそ、今回は意地でも止めることにした。

「狙撃手には常套な策の一つだ。一人目の手足を撃ち抜き、甚振つて、それを見かねて出てきた仲間を撃つ」

例え機体の元に辿り着くまでは避けられてもだ。例えば、自機のコクピットにクラリツサを招きいれようとすれば、その間は確実に避けられない。

機体を担いで戻ったとしても、運動性は加重によって大きく落ちる。避けきれない。

そしてもう一つ。

クラリツサは、人質でもあるのだ。妙な動きをしてもクラリツサは殺す、と。

『ならばどうすればいい！ 指を啜えて見てるといふのか！』

さらに勘が正しければ、クラリツサの周囲には十機近いSHが潜伏している。いや、これはほぼ確定と言ってもいい。

ここまで周到な相手がこれしか手勢を用意していない訳は無い。いかに上手くクラリツサの機体を確保できても集中砲火を受けて、

クラリツサは無事ではいられないだろう。

(ならば……)

と。

コテツが自分の考えを述べようとしたそのときだった。
クラリツサから通信が入る。

『怖気づいたのなら、帰りなさい、コテツ・モチヅキ!』

まるで、よくしなる鞭のような声だ、とコテツは思った。

「君はこの状況でなにを……」

敵のテリトリー内で機体は動けず、身動きがまったく取れない。
果たして、その恐怖はいかほどか。
なのに、クラリツサは言った。

『これは私のミスです。あなたがフォローする必要は……、ない
です』

「だが……」

『帰りなさい！ 私は自分で何とかします!』

自らでは機体も立て直せないこの状況で。

しかし、彼女はコテツの助けを拒む。

確かに、そうだ。コテツもまた、このような状況になったなら、
放っておけというだろう。

己のミスでの危機的状況。おいそれと助けは呼べない。

(だが、俺は死なせたいとは思えん)

死なせたくない、と、コテツは思う。

間違っているのだ。先を展望せず、流されるままに生きる自分が生き残り、将来有望なクラリツサが死ぬ。

そんなものは、間違っている。

無論、コテツも死にたいとは思っていない。

ならば、答えは一つ、全員で生き残るしかない。

『あなたでは足手まといですから！ だから、帰りなさい！！』

だが、話は聞いてくれそうにもない。

コテツは、押し黙った。

(……駄目か)

そもそも、コテツはコミュニケーションは得意ではないのだ。

彼女を上手く説得する言葉も何も思い浮かばない。

どうにかしようにも、彼女がそれを許さない。

故に、八方手詰まり。

なのだが。

しかし、しかしだ。

ただの一度も。

望月虎鉄は戦場で諦めることを望まなかった。

だからコテツは息を大きく吸い込んで。

叫んだ。

「話を、聞けええええッ！！」

一緒に乗っていたあざみが耳を押さえて顔をしかめるが、とりあえず無視した。

そして、モニタの端に映るクラリッサとシャルロツテが驚いた顔をしていたが、それも無視だ。

やっと静かになった。ここに来てやっと、コテツは発言権を得た。
(やってみようじゃないか。伝える努力というものを……！)

思い浮かぶのは、リーゼロツテの言葉。

こうなってしまったのは、コテツの怠慢でもある。

何も伝えようとせず、信頼されようともしなかったのはコテツの失敗だ。

だから、今語る。

「いいか！ 俺は君が思っているほど弱くないっ。そしてもう一つ！」

慣れないからこそ、最短で、簡潔に。

「君は必ず助ける。絶対にだ」

11話 イージーストレート（後書き）

そろそろテンション上げていきます。

展開の強引さとか、力不足を実感しながら書いてますが、二章も大詰め。このまま走りきりたいです。

ちなみに、本編でも出てきますが疑問が出るかもしれないので先にここで。

軍用機：ある程度の整備を前提として、魔術と機体性能を優先。優れた魔術は銃に勝ると言う考え。ついでに、剣で戦うのが華々しい騎士の流儀である。見栄と威圧を意識して洗練されたデザインを指す節がある。

民間機：満身に整備を受けられない可能性も考え、汎用性を重視。また、魔術が使用できないものも多いので、銃を持つことが多い。弾丸は魔術の展開スピードに勝るという考え。

12話 リバーサル

生身で森をひた走る。

それが、コテツの出した答えである。

『ご主人様ー、貴方ほんとに人間ですかー？』

シャルロツテが警戒しているように見せかけ、極めて遅いスピードで山を登り、それを囿にコテツが生身で走る。

これなら、気づかれずにギリギリまで接近できる。

『ちよつと正気じゃないスピードが出てるんですけど……』

「殺人マシーンに乗って生きている人間を人間と呼ぶなら、人間だが」

無謀にも見える策だが、コテツの走る速度は、常軌を逸していた。それ故に、迷わずコテツは其の選択肢を選んだ。

『初耳ですけど、それ』

コテツにとっては、否。コテツの居た世界においては、腕のいいパイロットをエースと呼ぶのではない。

従来機を一足飛びに越えた、エース機に乗ることができた者をエ

ースと呼ぶのだ。

ース機を起動させるために、何人のパイロットが死んだか定かではない。

ただ、少しの加速で人体が破壊される機体群を動かすには、それほどまでのことが必要だった。

「俺が君に平気な顔で乗れるように、俺はそれに乗り、慣れた。その結果だ」

腕のいいパイロットを捨石にしてもースを得ようとする風潮はどこから生まれたのか。

それは、最初に乗りになせてしまった男が居たからだ。

そのースはパワーバランスを覆すほどに強かった。それ故に、その彼と同じものが必要だったのだ。

AI分野も研究されたが、実用化に成功したのは結局戦争も末期。その上、人の操る繊細で有機的な操縦に敵うことはなかった。

それ故に、万の人間を殺してでも、あらゆる勢力はースを作り出すことに躍起になる。

そして、そんな風潮の中、コテツはース機に乗せられ、生き残った。

その上更に。人間とは必要以上に適応する生き物で、機体に慣れた。

ース機の機動によって人体に掛かる過負荷は、脳の使用領域の拡大と、筋肉の異常発達を招く。

『つまり、アルト乗りになれるひと、なった人は全て、人間やめるところですか？』

ヘッドセットから聞こえる声に、コテツは答えなかった。

そうとも言えるし、そうでもないと言える。

一応遺伝子的には人間とまったく変わりない。

(一番変わるのは精神的部分かもしれんが)

コテツが係わり合いになった全てのエースはどこかずれていた。人として致命的に、ブレていた。

「だが、便利だ。平和なときにはまったく役に立たないがなっ……」

と、木々の向こうに赤い影が見えた、と思ったその瞬間。身の危険を感じて、コテツは大きく横に飛びのいた。

『ご主人様!!』

轟音と共に、地面が抉れる。

「どつやら目視で発見されたようだ。シャルロッテ、あざみ、囃を頼む！」

『任せてくれ』

『お任せあれっ』

言葉を伝え、コテツは走ることに集中した。姿勢を低く、ただ、クラリッサの下を目指す。

上を見上げれば、既に十機近い機体が動き回り、その中の一機は、コテツに銃口を向けている。

「くっ……」

勢いのまま、前に飛ぶ。

背後の地面が抉れ、振動と共に土や木の破片がコテツの背を叩いた。

『こ、コテツ・モチヅキ、来てるの!?!』

クラリツサの慌てたような、驚いたような声がコテツの耳に聞こえてくる。その声に、攻撃を受けているような焦りはない。

どうやら、所詮生身の人間だと思って、クラリツサを人質として扱うつもりはないらしい。

好都合だった。

「すぐに着く」

『やめなさい! 危険です!?!』

「そんなこと、言われなければわからないと思うか?」

危険は百も承知。コテツはただ、付近を穿つ銃弾を無視して走り続ける。

「それに、君は俺が嫌いだろう。ここでもしも事故死したなら、それはそれでラッキーだ」

皮肉るような、コテツなりの冗談。

恐ろしいほど笑えない冗談だったが、冗談のつもりである。

そうかもしれないね、と軽口のような言葉が返ってくるだろう、とコテツは考えていた。

しかし。

コテツの予想に反し、返ってきたのはそんな台詞ではなく。

『そんなわけないじゃないですか?……』

返ってきたのは、涙声だった。

『あなたは大切なエトランジエ様なんですよ……!?!? ばか!!!』

コテツは、酷く面食らう羽目となった。

(なんだと……?)

彼女は、コテツを嫌っているのではない、と言う。

しかし、言われてみれば、彼女は非常に優秀で、物事に簡単に私情を挟んだりしない人間だ。

そう、コテツ自身がそう評価したのだ。

『決して好きだと思っただけではありませんが！ 誰が死んで欲しいなんて思っただけですか!!!』

決して彼女はエトランジエが期待はずれだったからと言ってわざわざ差別をするような人種ではない。

そして、嫌いではない、と彼女は言う。

ならば、彼女の態度はなんなのか。

(怒って、いるのか？ 俺が不真面目な態度だから)

そして、思い出す。

(彼女は悔しがれ、と言った。悔しがらせたいと)

あの態度の理由。

それが、嫌いから来るものではないのだとしたら。

もう後は一つしか思い当たらない。

思い当たって、コテツは思わず呟いた。

「……なんて不器用な」

あざみの言葉を借りるなら、『努力しろよこの野郎!』という「
とだ。

つまり、敢えて嫌われる態度で発破をかけようとしていたのだ。

(そこまでの考えがあったかどうかは知らないが……)

不器用に、あえて苛立つ態度を見せて、発奮させようと。

(不器用すぎるだろう……。俺には難解すぎる)

まったく、コテツには伝わっていなかった。純粹に嫌われている
とすら思っていた。

だが。

がらんどうの心に、炎は燃え上がる。

(なんともまあ、伝えようとしなければ伝わらないことの多いこと
か。……リーゼロッテの言う通りだな)

『帰りなさい!』

「断る」

背後では、ディステルガイストが非常に緩慢な動きで動いている。
パイロット無しではあの程度の動きしかできない。まさに動く的
だ。

それでも、あざみも頑張っているのだ。

「ずっと、不器用な湯を入れられていたらしいからな。今の俺は、

やる気に満ち溢れているんだ」

コテツは走る。

彼我の距離は約十メートル。

ここから先は限りなく迅速に、だ。

「クラリツサ！！ ハッチを開ける！！」

瞬間背後に衝撃。

迷わず、跳んだ。

そして、勢いそのまま垂直になった壁のような装甲を駆け上がる。

無論、重力に逆らえずやがて駆け上がる速度は零になり、今にも逆走を開始せんとするが、そんなことは最初から承知のこと。

「届けっ」

伸ばした指が、装甲の縁に引っかかる。

そのまま、腕の力だけで引き上げて、転がり込むように、コテツは仰向けの機体の上に着地した。

そして。

コテツは即座にずれた胸部装甲の下。コクピットに潜りこんだ。

「着いたぞ」

やはり、一人乗りのコクピットに二人は狭い。

コテツはクラリツサを押しつけて、高速でコンソールを操作し始める。

「あなたは……っ、なんで」

クラリツサは、泣きそうな顔をしていた。
綺麗に整った顔が、台無しなほど。

そんな彼女に、コテツは操作を続けながら、真顔で答える。

「君は若い」

「だからって……」

「君は可愛らしい」

「なっ……!!」

「君には未来がある」

「あ、あなたは何を言って」

そこまで来て、自分は何かおかしいことを言っただろうか、とコテツは首をかしげた。

「戦うよりも。子を産み、育て、次の時代を創る。そういうものの方が尊いんじゃないのか？」

果たして、この世界では違っただろうか、と。

しかし、クラリツサは、今、泣きそうになっていたことすら忘れて、呆けていた。

「君ほどの器量ならきつといい男を捕まえるだろう。そして家庭を作る。素晴らしいことだ。まあ、決め付けるわけにも行かないが、しかし」

コクピットハッチが閉じる。

「君は生きる。死ぬにはまだ早い」

「……」

首にコテツの首に回された腕に、ぎゅっと力が籠る。

「時代を守るために戦うのも、創ることに負けてはいません」

耳元でクラリッサが囁き、コテツは頷き返す。

「そうか」

クラリッサは、じっとコテツを見つめた。

「それに、あなただって」

「……それもいいかも知れんな。当面、嫁でも探す……、か？」

「な、なにそれ……、ぶろぽー……」

「さて……。機体を立て直すか」

コテツは、操縦桿を握りながら、もう片方の手の指でコンソールを叩く。

「……あ、む、無理です！ そんなの！！ もう片足もないって言うのに！」

「問題ない」

少しずつ、機体の上半身が持ち上がっていく。

さすがにこれには相手も気が付いたらしい。

唐突に弾丸が飛来する。

「きゃあ！」

「……バランスをオートからマニュアルへ……！ 片足へのエネルギーバイパス遮断……！！！」

掠める、周囲に着弾する、中^{あた}る。

良い当たりを受けた。肩の装甲の隙間に当たった弾丸が腕をもぎ取っていく。

「そ、それに、片足に、今腕も片方なくなりました！ これでは踏ん張りが利かなくて剣もまともに……」

だが、コテツは表情一つ、変えはしなかった。

「十分だ」

同時に、機体が立ち上がる。

瞬間、その機体は空へと舞い上がった。

「……今回はかりは手加減しない。機体に合わせて能力を下げるくらいなら、思い切り機体を振り回してやればいいッ!!」

「な、なんだアイツは!! どっかおかしい!!」

盗賊の目に映るのは、手負いの獣だった。
四肢のうちの二つを切り落とされた、容易な獲物のはずだった。
だが、現実はどうだ。
あれは、捕食者だ。

「当たらねえ！ 当たらねえ！！ 当たれえ！！」

手に持つ銃。攻勢魔術よりも威力は低いが、連射性に優れる。
だが、現実は一体どうしたと言うのか。
連射するだけ無駄ではないか。

『……無駄弾だな』

その紅の獣は、片足だけで立っている。
巨大な剣を、片腕だけで支えている。
獣が、跳んだ。

そして、剣を大きく振り回す。
それだけで、当たらない。

振り子のように、独楽のように、大剣の動きに耐えるどころかあ
えて振り回されるように。

機体は移動を繰り返す。

細かく跳躍を刻み、遠心力に任せ弾を避け。
時に弾き。

そして、それは大きく天へと舞い上がる。

『チャンスだ！！』

仲間の誰かが言った。

空中では無防備、ことここに至っては願ってもない。

「うおおおおおおおおおおおおおおー!!」

『撃て撃て撃て撃て!!』

『当たれ!! 当たれよ!!』

『さ、さすがにこれだけ撃てば……』

撃つ。撃つ。撃つ。

手持ちの弾装を空にする勢いで撃った。

下に控えている機体との戦いを気にすることすらなかった。

ただ、ひしひしと感じるのだ。

コイツは、ヤバイ。

本当に、現実はどうなっているのだ。

弾が、当たっていないではないか。

風切り音が耳朶を叩く。

まるで振り子。右へ、左へ、大剣を振り回しあの紅の機体は動く。

そして、盗賊は気が付いた。

(敵は……、今ッ)

風切る音は死神の足音。それとも、鎌を振る音か。

「俺の真上にいるッ　!!」

死神の声は、やけに冷たく響いた。

『遅い』

12話 リバーサル(後書き)

遂に反撃開始です。

13話 紅色スカイダイブ

戦場は、唐突な攻守の変化に浮き足立っていた。

圧倒的機動を見せ付ける、赤い機体に、全員が異様なものを感じていた。

そして、その視線の只中で、コテツは機体を動かす。

「こ、こんな技術を隠し持っていたと言うのですかっ！ コテツ・モチツキ！」

「君以外にも言ったのだが、この動かし方は褒められたものではない」

山の下へと向けて、シユティールフランメが駆ける。

片足だけで、跳ねるように。

「半ば、今回の戦闘で壊すつもりで動いていると言って良い」

腕も足も一本しかないと言うのに、コテツの胸中にあるのは、生半ではない全能感。

コテツが今、この機体の主導権を握っている。機体の限界を見て動かすのではない。コテツの限界に、機体を合わせている。

だから、飛び交う弾丸の渦中でも、負ける気はしない。

「別に訓練も手を抜いている訳ではない。機体に負担を掛けないもつとも効率的な操縦を模索している」

今まで、訓練で本気を出さなかった理由は、そこだ。

今の操縦法の肝は、コテツが機体に合わせないことにある。

機体に振り回されるのではなく、機体を振り回す。そうすることで、戦力は強引に底上げされる。

だが、それには問題点も一つある。部品の損耗が著しく激しいのだ。

今とて、繊細な操作によって完璧な角度で行われるはずの強引な着地が、操縦系統の悪さにより大雑把な判定で行われることとなり、衝撃が損耗に繋がっている。

無論、十全なメンテナンスを受ければまったく問題ないのだが、常に万全であるとは限らないのが戦場。

「だが。今この時においては数分持てば問題ない！」

大剣を振るう。

弾丸を弾き、そして、勢いそのままに機体は大剣を追うかのように飛び上がる。

更に大剣を振るう。遠心力で勢いを横に殺して着地。

そしてまた跳ぶ。

『止める！！』

「止まらん！！」

眼前に現れた敵が、両断される。

シユティールフレームはそのまま前へとすり抜けた。

更に二体前に出て、銃撃を行う。

コテツは、フットペダルを大きく踏み込む。

機体が、再び空へと舞い上がる。

それは、大剣を下に、滑空するようにしつつ銃弾を弾いた。

そして。

コテツは、前方の空を睨み付けた。

宙に浮かぶのは、白と黒の機体。ディステルガイスト。

コテツは、相棒に向かって叫ぶ。

「あざみつ、来い！」

『はい！！』

シュテイルフランメは、ここまででいい。

背後からの弾丸を、振り向きもせず逆手で後ろに回した大剣で受け止める。

右へ、左へと細かくステップを踏みながら前へ。

そして。

背後から今一度迫る大口径の狙撃の弾丸。

「行くぞ、クラリツサ。舌を噛むなよ……！！？」

「え？」

背後に斜めに突き刺す大剣。

シュテイルフランメはその大剣に足を掛ける。

弾丸は。

その大剣に直撃した。

『ご主人様！！』

「おおッ」

大剣の反動も受けて、機体が、空へと舞い上がる。

背後から、いくつもの弾丸が迫る。

避けるための、防ぐための大剣はない。

しかし、否、だからこそ機体はまっすぐに昇っていく。

空に浮かぶモノクロの機体へ。

この世界で、相棒となったデイステルガイストの元へ。

「デイステルガイストッ！」

「はい！！」

デイステルガイストとシユテイルフランメの影が重なる。

同時に、コテツはコクピットハッチを開いた。

自ら目視する視界の向こうには、既にコクピットハッチを開けたデイステルガイストがいる。

「おおおおおおおッ！！！」

跳躍。

「きゃああああああああ！！！」

抱え上げたクラリツサの悲鳴と共に、コテツはコクピットから跳んだ。

一瞬にして風の抵抗を受ける体。

眼下には、緑の景色。

そして、目前には相棒のコクピットが見えた。

「おかえりなさい、ご主人様！」

「ああ」

そこには、あざみが待っていた。

着地、成功。

コテツは、すぐさまシートに座る。

デイステルガイストのコクピットは複座であるため、ある程度広

い。
クラリツサは右後方へ。

「……救出完了」

操縦桿を握り、コテツは眼下を見つめる。

下では、シャルロツテが敵と戦闘を繰り広げている。

クラリツサが無事に救出されたため、積極的に踏み込んでいた。
コテツも、援護せねばなるまい。

「では行くか　　！！」

やきもきしていた。

今、隣にいる男に、クラリツサはずっと、そんな気持ちを抱いていたのだ。

ソムニウムのSH乗りなら誰でも憧れるエトランジエ。

呼び出されたのは、死んだような目の男だった。

しかして、その男、SH乗りの憧れは。大勢の期待と羨望を胸にやってきた彼は、弱かった。

だが、そんなことは構わないのだ。最初は誰だって弱い。クラリッサだってそうだった。

問題なのは、強くなるうとしなかったこと。

まるで何もかも諦めたようなその目。

クラリッサは、嫌な目だと思った。

どこか、クラリッサを見上げる者達の視線に似ている気がした。

同期は、異例の若さで副団長にまで出世したクラリッサを羨ましが
る。

『羨ましい』『才能がある奴はいいな』『天才は素晴らしい、と』

(違う、私は努力してきた……)

同期の言葉が嫌いだった。

クラリッサは、努力しているつもりだった。真面目に訓練し、時には半日以上SHに乗り続けたこともあった。

強くなりたくて、ずっと訓練を続けた。

だから、クラリッサはそういう目が嫌いだった。

上を見上げるくせに、そこへ向かおうともしない目。

ただ、彼らはそれでも構わないのだ。その目を向けられるほうは厄介だが、向ける側としてはまったく問題ない。回りも何も言わないだろう

しかし、コテツはどうだろうか。わかりきっている。コテツは誰かに見られ続ける。

そして評価を下される。『今回のエトランジェは役立たずだ』と。ただ、実際にそうなくてもコテツは動じなかった。上も見ず、下も見ず、ただ前を見ていた。

だが、思う。愉快な訳がない。その状況が好きなのではない。

だから、やきもきした。苛々したのだ。
深く考えていたわけではない。悪役になるうだとか思っていたわけでもない。

ただ、クラリッサにとっても、エトランジエは憧れだったのだ。
だから、弱い上に上を見ようとしなないコテツを、どうにか動かしてやりたいと思ったのだ。

この、独活の大木を。
だが。

今、この時を見てみればどうだ。

(こんな、生き生きとして……)

まさに、状況は圧倒的。

クラリッサを気遣ってか、機体の動きは酷く緩慢だ。
なのに、当たらない。ふらり、ふらりと弾丸を避ける。
まるで、幽霊のように。
幽鬼のように。

『ひっ……、』

「手遅れだ」

そして、ふらりと接近し、するりと斬る。

『うわああああー!!』

それだけで、周囲に敵影はいなくなった。
今、今斬ったのが最後から二番目。
そこで、コテツは山の上へと呼びかけた。

「さて、残りは狙撃手、お前だけだが、どうするっ、」

そして、一步、前に出る。
次の瞬間、ディステルガイストが首を逸らし、そこを弾丸が駆け抜けていく。

「……面白い」

機体が、走り出す。

右へ、左へ、避けるたびに弾丸が駆け抜ける。

(相手も……、上手いですね……！)

当たれば、できるだけダメージが大きくなるように相手は撃ってきている。

対するコテツは。

(楽しそう……)

いつもと同じ仏頂面が、どこか楽しそうだった。

そして、そんな時、声が響いてくる。

相手の、狙撃主の声だ。

『あー、くそ、アンタ上手いな』

『お互い様だ』

『ひよいひよい避けてくるような奴に、言われたかあ、ないね』

軽そうな、男の声だった。まるで、苦笑しているかのような。

二人とも、妙技を披露したままだというのに、妙に軽い。

そして、走る足が唐突に速度を落とす。

「さて、着くぞ」

冷たく響いた声に、やっぱり返ってきたのは軽薄な声だった。

『知ってる』

瞬間、緑の機体が山の木々の中から身を現した。

緑のシートがはらりと落ちたところを見るに、シートを被ってうつ伏せに隠れていたのだ。

そして、起きるなり、緑の機体は逆手に持ったナイフをディスプレイガイストへと振るう。

『行くぜっ、こっちも負けられねーんでね!』

「あざみ、あの機体は一体なんだかわかるか」

「私にもわかりません。ただ、どうも接近戦用カスタマイズを受けた機体のようです。気をつけて」

「わかった」

会話をしながらコテツが刀でナイフを弾くと、すぐに相手は拳を戻して今一度刃を放つ。

また受ける。

放つ、受ける。

高速の連打と、防御が始まった。

「やるな」

『どーも。アンタ、名前は?』

「名乗らなければ駄目か?」

『どういっつこったよ』

「名乗るとか、騎士のそういう感覚には馴染めん」

『同感。だけど、アンタの名前は知りたい』

「コテツ・モチツキ。これでいいか？」
『わかった。覚えておく』

そこでやっと、ナイフの連打が止んだ……、と、思ったら次は蹴りだ。

コテツは横から顔面付近へ迫る足を、腕を立てて受け止める。

「……そちらは名乗らないのか」
『問われて名乗るもおこがましいが……、アルベール・ドニ。機体はシャルフ・スマラクト。しがない盗賊だ』

その隙に、コテツは左手の刀を振り下ろす。
即座に、アルベールは機体を後ろに引かせた。

「良い腕だ。騎士になろうとは？」
『憧れたこともあったがね。俺にや馴染めねえや。魔術も使えねえしな』

「それで、山賊に？」

振られる刃を、アルベールはダッキングを用いてかわす。

『そんなわけないだろ。俺とて元冒険者だぜ？』
「なら何故？」

今度はアルベールがナイフを振るい、コテツは二歩下がって間合いの外に出る。

『昔、仲間と一緒にとある依頼を受けてな。ボコボコにのされて打ち捨てられたのさ。そのまま死ぬはずだったが、救助を受けて俺はこうして生きてる……、つつうわけだっ』

更に踏み込み。逆手持ちから順手に変わり、鋭い突き。身を半身にして回避。

「その救助者が山賊だったのか」

「いや？ 俺を助けたのは、何の変哲もない村の奴らだった。村のガキが俺を見つけて、だ。その時俺達は冒険者をやめて、その村で生きることを決めた」

「ふむ」

「問題は、その後その村が焼けたことさ。唐突に盗賊がやってきて、村はどうしようもなくなった、村民は困るよな。隣村に助けを求めてみたが、結局受け入れの余裕はない。そうなりゃ、生き残りは後は野となれ山となれ、だ」

ナイフを刀で受け止めつつ、コテツは呟いた。

「ただの村民が山賊に、か」

「俺たち救われた冒険者が盗賊をどうにか追い返したのが生き残りの多さにつながったが、その生き残りの多さが受け入れられないという結果に繋がった訳だ。残念だ」

クラリツサとしては、聞いてて耳が痛い問題だ。

盗賊の退治も、その後の被害の責任も、国の管轄内である。

誰が怠慢だったのか。地方領主かもしれないし、クラリツサだったのかもしれないし、もっと別の誰かかもしれない。

顔をしかめてみるが、状況はどうあっても変わらない。ただ、クラリツサは黙って苦虫を噛み締めたような顔をする。

「なるほど、大体わかった」

「幸いだっただのは、俺たち救助された冒険者がいた事だろ。皆SH

持ちだ。だから山賊やつてられる』

(なるほど、それでこんな数を揃えて策を用いるのですね……！)

と、そこでクラリッサはやっと納得した。

やけにSHが多いことと、盗賊や山賊にしては高度な戦術を用いることに。

大半が元冒険者で構成されているなら、こういった戦術を取ることもあり得る。

『あー、くそ……、上手いなアンタ。だが、俺も負けらんねえ。行くぜ!!』

振るわれる拳。煌く刃。

「甘いつ」

打ち返す刀。

ナイフと刀は、刀が、勝った。

刀が相手のナイフを捉え、弾く。

ナイフが手を離れ、後方へと飛んでいった。

(やった……！)

クラリッサがそう思ったのも束の間。

「畏か……!!」

ナイフを弾いたと言つのに、拳はそのまま迫ってきているではないか!

『キマった!!』

拳は刀の刃を捉えた。

(弾かれる！ そしたら、体勢が崩れて無防備に)

そんな中、クラリツサはコテツが操縦桿を握る手を緩めたのが、見えた。

弾き飛ばされる刀。

だが、ディステルガイストはそのまま拳を振るうことに成功していた。

『んなっ!』

相手が、前のめりになりながら、避ける。
そして、二機は、大きく距離を取った。

『……やるねえ。楽しいよ、アンタ』
「気が合つな」

13話 紅色スカイダイブ（後書き）

敵らしい敵がやっと出てきました。

次回、戦闘決着です。

しかし、今回は戦闘パートが長すぎた気がしますね。もっとテンポよく行きたいです。反省点が増えました。

14話 Let's Rock!!

緑の機体が、拳を構えている。

コテツは、この世界に来て今までになく、愉快的気分だった。

「あざみ。出力を七十%落とせ」

「ええ!?!」

唐突な言葉に、あざみは驚いていたる。当然、クラリツサもだ。だが、コテツだけが笑っていた。

「すまんが、俺の我俣だ」

普段からは考えられないほど獰猛に、だ。

「全力でやりたい」

そして、驚いていたあざみだが、コテツが言つと、唐突に彼女は笑い始めた。

「ふ、ふふふ、ふふ、そうですか。ああ、ふふ、はい。私のパートナーは我俣ですね。ですが。私のパートナーとしては素敵な我俣です」

『出力低下』

機械音声が響き、出力が落ちたことを確認する。

後はクラリツサだ。自称相棒はともかく、彼女はコテツの我俣に付き合わせることはない。

そう思ってコテツは口を開く。

「クラリツサ、君はシャルロツテに回収してもらえるか？ 些か危険だ」

対するクラリツサは、首を横に振った。

「ここまで来たら、最後まで付き合います。コテツ・モチヅキ。今更降りるなんていわせませんが。騙していた分、存分に見せなさい」
「騙したつもりはないが」

「わかっているわ。だから、それで手打ちにしてあげるって言うてるんです。負けたら承知しません」

ならば、異存はない。

そして。

(負ける気もない……！)

コテツは、腕を振って出力の状況を確認。そして、左右に構えた腕を、体の前に。

『おいおい、出力を低下だの聞こえてきたんだが、舐めてんのかい？』

「気に食わないなら、上げないと手に負えないくらいやればいい」
『違うない』

睨み合う二機。

「ふふ……、そしたら、今回はデッドラインは無粋ですかね……」
「なにをする気だ？」

妖しく笑ってあざみは言った。

「私の得意分野は光ですからね。こういうことも可能なんですよ？」

瞬間、前に出したディステルガイストの腕、そのすぐ前に光が灯る。

そして、光は文字を描き始め。

『行くぞっ！』

「相手が拳を振り上げた瞬間、言葉になった。描かれた文字は。

右腕に『Let's』。

左腕に『Rock!』。

「Let's Rock!! 意識するなら……」『ノリノリで行こ

うぜ』ってところですかねえ？」

「中々粋な演出だ」

> i 3 2 3 5 3 — 3 1 2 5 <

『おおおおおおおお！』

翠に煌く拳が迫る。

屈んで避ける、そこから足払い。

小さく跳んで避けられた。そこから、相手は空中で蹴りを放つ。

大きく仰け反り、回避、そのまま蹴り上げ。

だが身を捻ってかわされる。

コテツは着地時に蹴り上げた足を地に付け軸足に、回し蹴り。腕で受け止められる。

『甘え！！』

胸に拳が迫る。

「……甘いつ」

コテツは迫る腕を掴むと同時に、受け止められていた足に更に力を入れ、投げる。

『おわつとと、地面はどこだ？』

「下だ」

『そりゃそつだ』

自ら敢えて飛ばされることで、横に一回転しながらも、アルベールは着地。

そして、屈んだ姿勢からの鋭い蹴り。

まるでカポエラのようなようだ。どんな瞬間でも威力の乗った蹴りを放ってくる。

だが、コテツの顔に焦りはない。

「鋭い。だが、それだけだ」

身を逸らして、避ける。

『手厳しいねえ。そいやつとー！』

壮絶な打ち合い。
神がかったラッシュ。

『おおおおおおおおあああああッ！！』

それは最後に。

緑の拳が抜けた。

『俺は！ 恩を、返すッ！！』

迫り来る拳。

このまま行けば、機体の頭部に直撃する。

果たしてどれほどのダメージがあるかは分からないが、相手の渾身の拳だろう。無傷とは行くまい。

(羨ましいことだ)

そんな中、全てがゆっくりに見える世界で、コテツはふと、考えた。

(……俺には生きる理由もない)

死にたくは無い、とは思うが生きる理由は今だ見つかっていない。

『その死にたくない』だって、大した考えがあるわけではない。ただ、自殺したいとは思わないだけだ。

つまり情性だ。情性で生きている。

生きる理由など、どこにも存在しないのだ。

(だが……！)

しかし、ふと、コテツは思い浮かべる。
背後にいる、己を主と言った相棒。
応援すると言ってくれた従者。
不器用に、湯を入れ続けた、少女。
そう。

(……死ぬ理由も見つからないッ!!)

アルベール・ドニ。

金の長髪に、碧い瞳。軽薄そうな顔。着古した、迷彩服。

これでも、昔は真面目に騎士を目指していた男だ。

それが無理だと悟ってからは冒険者に転向。そして、山賊と言う
数奇な運命をたどった。

そして、騎士を断念せざるを得なかったアルベールだが、しかし、
魔術は使えないがその分別の分野を限界まで鍛え上げ、練り上げた。
自分でも、一角のものだと自認している。
対する相手は、どこかおかしかった。

(ありえねー、ありえねーってこりゃ)

何故なら、最初のナイフを敢えて弾き飛ばされての一撃。

アレは必殺のはずだったのだ。あえて抵抗無くナイフを弾き飛ばされて、そのまま刀に拳を入れる。

そして、体勢が崩れたら追撃だ。後は反撃の隙も与えない。

(だが、アイツはそれを回避した……！)

彼もまた、意趣返しのようにあえて自分から刀を手放した。結果、無様に体勢を崩されるどころか反撃を放ってきた。

そして、このラッシュ。

相手の技量は凄まじかった。

(すげえよ、そりゃ。拳での接近戦仕様じゃねえーんだろ？ なのに、拳闘仕様のシャルフ・スマラクトに付いて来る……)

わざわざ、拳で拳を打ち落としてくる。

(ああ、すげえ。そう、十分アンタは頑張ったともさ。だがね、機体の仕様はガチだよ。出力を下げてなけりゃ、これで俺に負けることもなかったかもしれんけど)

あくまで正々堂々とやってきた相手に敬意を払い、アルベールは拳を振るう。

そして。

(ありえねー……、ありえねーよなあ、こりゃあよっ)

勝った、と思ったのだ。勝利を確信していたのだ。

渾身の拳は突き抜けたはずなのだ。

ラッシュに競り勝ち、その拳は相手に直撃するはずだったのだ。確かに、最大の拳がヒットしたと、思ったのだ。

『お……、お、おおおおおおおッ！……』
だというのに。

(何で俺が殴られてるんだっ！！)

避けられた。

土壇場で、首を逸らされた。

一寸も無い距離で。

(ありえねえ！ あの戦いの中で避ける余裕なんてどこにあった！
！ どうやったらアレを避けられる！？ まるで、まるで分かって
たみてえに！！)

そして、もぐりこむような拳が、顔面に直撃した。
大きく、後ろに飛ばされる。

「ぐおおおおおッ！」

必死でアルベールは機体を操作した。
倒れたら終わる。
そこで終わる。

「転ぶなよおおおッ！？」

果たして、祈りは届いた。
大きく背後に滑りながら、シャルフ・スマラクトは立っている。

確かに、大地に足をつけていた。
だが。

だがしかし、自嘲気味に、アルベールは笑う。

「あーくそ。乱暴なノックだなあ……。死神さんはよ」

既に、眼前にそれはいたのだ。

煌々と赤く目を輝かせる、モノクローム。

眼前に立つ、死神。

「イカしてる……。いや。最高にイカしてるぜ、アンタ」

まるで、鎌の刃でも首に当てられたかのように。

ひやりとした声が、耳に届く。

『 終わりだ』

瞬間。

アルベールの体を衝撃が貫いた。

(これで、良かったんっ、かねえ……。？ どうせこんなこと、続け
てられるわけもねーしさ……)

緑の機体が、立ち上がることは無かった。

14話 Let's Rock!! (後書き)

えー……、デイステルガイストの外見がちまちま変わってる件に関してですが、デイステルガイストはある程度の自己修復機能を持っていて、戦闘毎に得た経験の元、装甲の形を最適化している……、見たいな感じで納得してください……、すみません、画力の無さです。ごめんなさい。

ちなみに、腕の字は書き換えたわけではなく、あざみが光魔術で腕の前に字を描いた形となります。終わった後は、粒子撒いて消えました。

ということ、戦闘終了。次はエピローグ。

15話 剣戟長閑

「……よくやったわ、コテツ」
「ああ」

王女の執務室。

今日も王都は長閑である。

「山賊の捕縛、お疲れ様。何か欲しいものはあるかしら？」
「報酬なら既に貰ったが」

貰ったのはそれなりの額。相手が相手だけに、そこそこの金額はもらえた。

だが、アマルベルガは首を横に振る。

「良かったのは、騎士団副団長の態度を変えたことだわ」

つまり、クラリツサが態度を変えた、と言うことだ。

それがどうしたのか、と首を傾げるコテツに、アマルベルガは説明する。

「渋々ながら、彼女が貴方を認めざるを得ない、というニュアンス

の言葉を謁見の間で言ったおかげで、予想以上の効果が出たの。これで、貴方への誹謗中傷も多少は落ち着くわ」
「そうか」

盗賊の討伐が終わって以来、別に態度が変わることも無かったが、それでもコテツの一端は認めてくれたということか。

「それで、成果に見合った褒美をあげると言ってるの」

言われて、コテツは思索するように顎に手を当てた。

「なるほど……」

「何か無いのかしら？」

問われ、コテツは少しの思考の後、答える。

「そうだな」

去っていくコテツの背を見送って、ふとアマルベルガは呟いた。

「行ったわね」

「……お呼びですか？」

それと同時に、入れ替わるようにシャルロッテが室内へと入ってくる。

それを見届け、まるで溜息でも吐くように、アマルベルガは言った。

「欲がないのも、困り者だわ」

「コテツ、ですか」

「ねえ、シャルロッテ。召喚当初、一番最初に私は彼になんて聞いたと思う？」

シャルロッテが首をかしげ、アマルベルガは続ける。

「富と権力と名誉。それに女でもいい。貴方はなにがいい？ そう聞いたのよ」

「答えは？」

「……どうでもいい、よ」

「……コテツの言いそうなことです」

同時に、アマルベルガは溜息を吐いた。

「先代ほどお人好しでもなければ、先々代ほど女好きでもなく」

「強欲でもなければ名誉も欲しがらないですか？」

「そういうの、扱い難いわ」

そう言って、もう一度溜息を吐く。

「悪人でないだけ、マシでしょう」

「悪人の方が扱いやすいこともあるわ」

悪人なら、金で釣る、物で釣るなどの対策もあるのだが。
しかし。

考え出して、頭が痛いアマルベルガは思考を止めた。

そこに、シャルロットから声が掛かる。

「ところで、コテツは一体なにを望んだのですか？ 今回の件は」

問われ、アマルベルガはつい先ほどの会話を思い出した。

「彼が望んだのは」

「よお、アンタがコテツ・モチヅキだって？」

「ああ。話は聞いているか？」

コテツの部屋。そこには、コテツと客が一人。
長い金の髪に、軽薄そうな顔。

アルベール・ドニは、敵意を向けるでもなく、コテツの前に立っていた。

「聞いている」

「そうか」

コテツがそういうと、極めて軽薄そうに。

アルベールは極めて重要な言葉を口にした。

「国の犬になれってんだろ？」

「ああ」

そう。今回の件でコテツが要求したのは、アルベールだった。エトランジエは、権力や階級から乖離したところに存在する。究極な所、極限に一人。

(面倒ごとを押し付けたいだけ……、とも言うが)

だから、仲間が欲しい。

コテツは、最前線で動き回ることによって成果を上げるタイプだ。それをするため、戦場でフリーになるために、後方を任せる仲間が必要だ、と今回の件でも再確認することとなった。

何もかも、一人では不自由がすぎるのだ。

無論、問題が無いわけではない。エトランジエは権力、階級から乖離している存在であるため、人数が増えると、まったく新しい勢力となってしまう。

そうすると、国内の勢力に危険視されかねない。

それ故に、勢力と見られない程度の人数に仲間はとどめておかな

ければいけない。

となれば、優先されるのは質。そして、コテツは騎士と今一つ合わない。

そう考えるとアルベールだけが、完全に条件を満たしていた。故の勧誘。それに対し、アルベールは軽薄なままだった。

「それで、返事は」

問いに、にへらとアルベールは笑う。

「いいよ。やってやるよ」

「そうか」

「なんせ……、村の皆が人質だからな」

「そうだ」

アルベールを仲間にする交換条件。

それは、山賊団の仲間の命を保障することだ。

後は、少しの金。それだけだ。

だが、十分のようだった。

アルベールから大した不満もあがりはしない。

だがしかし。

しかし一つだけ。その軽薄さを潜めて、彼は問うた。

「一つ、聞かせてくれ」

じつと、アルベールはコテツの目を見ている。

コテツも、彼を見返した。

「なあ……。俺を倒したのは国の犬、だったのか？」

国に対し、アルベール、いや山賊団全てが複雑な感情を抱いていることは、人の機微に疎いコテツでも想像できた。

適切な援助をしてくれなかった国、そしてその国に仇なした自分たち。複雑だろう。

だから、国の犬に従うのは、抵抗があるのかもしれない。

「そうかもしれん」

だが、否定する要素はなかった。

今のコテツは、女王の言うままに動くだけだ。

「アンタにや、生きる理由も、やりたいこともねーのかい」
「ない」

あれば、今頃ここにはいるまい。

コテツは言い切った。

そうして、返ってきたのは、

「ああそーかい。俺は、王女の犬の犬、か」

失望したような、そんな声。

それを聞いて、コテツは椅子から立ち上がった。

話が纏まったことを報告しておかなければなるまい。

だが、ただ一つ、部屋を出る前に、コテツは一つだけ呟いた。

「ない、が。今はそれを探している」

そして、彼は歩き出す。

「この国の行く末も、現状も知ったことではないが、……今の所の宿を壊されるのは困る」

果たして呟いた言葉は、アルベールに届いたのかどうか。ただ、別の言葉が返ってくるだけ。

「この話は、王女がやれって言ったのか？」

コテツは、否定の言葉を返す。

「いや、俺の要求だ」

「……アンタが？」

少しの間が空いて、問い返された。

コテツは、簡潔に返す。

「ああ」

そして、最後に。

もう一つ、彼は問うた。

「なあ、俺の仲間の命は、保障されんのかい？」

「こちらのミスでお前の仲間が死んだなら。俺が王女を握り潰す」

「……つく」

返事はない。

だが、数歩歩いた所で、ばん、と。

コテツは唐突に背中を叩かれた。

怪訝そうに振り向くと、そこにはアルベールが笑っている。

にっこりと、人好きのする笑みで。

「は、っはははっ……。王城で王女を握り潰す、だって？ 最高にイカれた答えだ。やっぱ気に入ったよ、アンタ」

「そうか」

「手伝うよ、アンタのその探し物」

馴れ馴れしく、アルベールはコテツと肩を組んだ。

コテツは、表情一つ変えずに返す。

「助かる」

「ところで、俺の仲間は……」

「誰も殺してはいない。少なくとも構成員三十七人は全て捕縛された。あまりに潔く聞き分けがいいものだから連れて帰るのに苦労したぞ」

「おお、サンキュ。さすがダンナだぜ」

「……なんだそのダンナという呼称は」

「雇い主だろ？ だからダンナ」

「……そうか」

「俺のことは、相棒って呼んでくれてもいいんだぜー？」

「押しかけ相棒は間に合っている。アルベール」

「アルって呼んでくれ、長いだろ？」

「そうだな」

「ダンナ」

「なんだ」

「サンキュ」

「……なんのことだ」

「俺たちの、命の恩人だろ」

「顎でこき使いたいだけだ」

「へいへーい、了解ですよっとダンナ」

二人の男が、廊下を仲良さげに、歩いていく。

そう、今日も王都は長閑であり。

そして、今日も荒野には剣戟が響いている。

『遅いですよ！ コテツ・モチツキ！』

「……いつも通りだ」

『本気を出しなさい！！』

「本気を出さずに勝つための訓練だろう。これは」

赤の機体と青の機体が交わり、そして離れる。

『う、うるさいですね！ 黙りなさい！！』

「……………」

『何とか言ったらどうですか！』

「どっちなんだ」

『好きになさい！！』

「そうか。ではそう言えばなんだが……………」

『……………なんですか』

細かく後ろへと跳んで距離を稼ぎながら、コテツは呟く。

「俺を擁護する発言をしてくれたらしいな」

すると、コクピットの向こうから、やけにわかりやすい動揺が返ってきた。

『だ、誰から聞きましたかそれを！』

「王女から」

『……………な、なんですか。なんなのよ……………、笑いに来たんですか……………？』

「……………いや、ありがとう」

『……………えっと。は、反応に困ることを言わないでくれますか！』

「……………了解」

『ば、馬鹿にして！！』

「……………していない」

『……………しています！！』

「……………していない」

呟きつつ、迫る大剣をコテツは受け流す。

『さあ！ 馬鹿なことを言っていないで訓練を続けます！！ あなたは、この私がどこに出しても恥ずかしくないように鍛えてあげますから！ コテツ……！』

ひたすらにクラリッサが攻め、コテツが受け流し続け。

「了解」

それはまるで、今の会話の縮図のようだったが、どこか楽しげに。

今日も王都は長閑である。

15話 剣戟長閑（後書き）

やっと二章終わりました。

そして、二章の間になんだかユニークPV総計が二万越えしたり、千人を越える方にお気に入り登録していただきまして、身が引き締まる思いです。

さて、アルベールが加入です。ロボット物には必須といえる主人公の相棒的ポジションに納まりそうな感じですよ。

とりあえず、仲間も増え、安定期に入ったので次章はゆるく短めの奴で行きたいと思います。

15・5話 剥れパートナー（前書き）

八割方設定書きです。本編的には無駄な設定も多いです。必要な部分は本編でも再度書きますし、必ずしも見る必要はありません。

15・5話 剥れパートナー

ある日の昼。

コテツは、部屋でひたすら黙って本を読んでいた。

今日の訓練は休みである。そうすると、当然一日暇が出来上がる。しかしながら、この世界について無知であるコテツは、こういうつた暇に少しでも知識を溜め込まなければならぬ。

の、だが。

「ご主人様あああ！」

「……何の用だ」

背後から飛び掛るように、あざみが抱きついてくる。

コテツは、半眼で背後を見つめた。

あっけらかん、とあざみは言う。

「あ、いえ、別に用はありませんけど」

「……」

「ぐ、冷たい視線が痛いです……、いやでも私山賊の件で凄い地味地味だったような気がするんですよっ！　だ、大丈夫ですよね？

クラリツサさんとなんだかんだ言いながらくつつくとかないですよね？　ね？　ね？」

「なにを言ってるんだ君は……」

「とにかく、そういうことなんです。私は細やかなところで好感度を稼ぐんです」

「とりあえず、言っている意味がわからないが。一応の所、問題な

いと返しておこう」

「はい。ところで、なに呼んでるんですか？」

唐突に、あざみはコテツの肩から顔を出して、コテツの手の中の本を覗き込んだ。

コテツは事実だけを簡潔に伝える。

「辞典だ」

「……辞典？」

首を傾げるあざみ。

確かに、辞典は普段の読み物としては違和感があるだろう。

コテツは、その辞典に目を落としながら、答えた。

「魔術とやらで、話せる読める書けると来たが、意味の分からない単語もある」

すると、ぽんとあざみは手を叩く。

「あ、なるほど。確かにそうですね。ご主人様は今世間知らずですから」

「ギャップが今後悪影響を齎すかもしれん」

「先の件のように、ですか？」

「ああ。俺の軍の常識と、騎士の常識が食い違っていた結果だろう」「そうですね……、はい、勤勉なのはいいことだと思いますよ。あ、そうだ、でしたらお話ししましょうか？」

「なにをだ？」

「色々です。これでも私、長生きですから。博識なつもりですよ、多少は」

「なるほど」

あざみは、コテツの背後から抱きついたまま、耳元で囁き始める。

S
H

「S H。シユータルヘルツオーク、ですね」

「この世界で作られた、魔術と科学をあわせた人型機動兵器、という所までは分かる」

「まあ、現在の一般的な認識だと思いますよ」

「……そういえば、君はそのプロトタイプだったか」

「はい、だからそこそこ詳しいつもりですよ。もともとS Hはこの世界の魔術で研究されていた魔導人形、所謂ゴーレムですね。それを初代エトランジエが科学を取り入れて製造したのが、アルトです」

「そして、それを解析して作り出したのが」

「そう、ノイと呼ばれる機体群です。ただし、初代エトランジエの技術を解析しきるコトはできず、アルトとノイの間には性能差が横たわっています。まあ、腕のいい魔術師が造れば匹敵する可能性もあるのですが」

「そんなものか」

「ええ。足りない科学は魔術でカバーです。まあ、全体的に未熟な

科学を魔術で補う空気はありますね。アルトは、科学を魔術で補助しかし、後年の物に至るにつれ、魔術と科学の融和を目指したものが目立ちます」

「初代には、アルトの技術を伝えるつもりは無かったのか？」

コテツが問うと、あざみは困ったように頬を掻いた。

「本当はですね。初代は、こうして民間にまで普及して、一般的に戦闘を行うなんて考えてなかったのですよ」

「ふむ？」

「本当は、龍を殺すための、S H、なのです」

聞きなれない単語に、コテツは首を傾げることとなる。

「龍？」

「ご主人様の居た世界と違って、ここには魔術がありますから。特殊な生物は多岐に渡ります。そして、その中でも人にとって危険なもの。その際たる例が龍なんですよ。今となってはほとんど数はいませんが、大きくて、簡単に大魔術をぶっ放しますから。そんな龍が、運悪く街や村の上を通ることがあるのです」

「つまり、災害に近い、と」

「そう。初代の時は、王都にそれが迫っていたそうです」

「それに対抗するための、アルトか」

「はい、つまりそういうことです」

エーポス

「私のコトですね。アルトは高性能な分、内部処理や制御が肝心なのですが、ハードはともかくソフトは門外漢だった初代だけではどうも対応し切れませんで。魔術師の協力を得て先天的に決まった機体と接続できるヒトのようなものを造りだしたわけです」

「見た目上は、人にしか見えないが」

「頑丈、老いない。あと、ついでにシリーズによつては違つかもしれませんが、高めの身体能力と、十二分な魔力容量を備えています」

「他はなにか？」

「そうですね、女性型しかいないことですかね」

「君しか知らないから分からないが、そうなのか？」

「なんでかは私も良く知らないです。製作者が男嫌いだったとか、女性の方が細やかな気配りができるだとか、いろいろ諸説ありますが、詳しいことは……」

「まあ、別に問題にはならないだろう」

「そうですね、後の役目は、悪用を防ぐ、でしょうかねえ。正式に操縦士になつてしまえばある程度の権限で無理できますけど」

「そうでなければ、エーポスのほうが立場は上、か」

初代エトランジェ

「んー、これは私も詳しく過去を聞きだしたりとかしたわけじゃあ

りませんからねえ。大したことは言えませんが」

「とりあえず、聞かせてもらいたいのは、彼がどうしてここに来て、そしてどうなったのか、だが」

「来たのは、事故だそうですね。ご主人様と同じ、時空間圧縮系の爆発でも受けたんじゃないですかね。そして、残念ですけど彼がどうなったのかは、誰も知りません。一機の機体と共に、ふらりとどこかへ消えてしまいました」

「……そうか、謎が多いな。代々続くエトランジエのことも、分かっていたようだしな」

「そうなんですか？」

「君の機体の腕の文字や、エトランジエと言う名称。彼はドイツ人らしいが、所々にわざわざ英語を使っている。これは後続のエトランジエへのメッセージのようなものだろう。後続までがドイツ人は限らないからな」

「うーん……、不思議な人でしたけどねえ。ユーモアのある、ヒゲの生えたナイスミドルですよ。気になりますか？」

「興味はあるな。調べてみたい所だ」

エトランジエ

「説明されてると思いますけど、ソムニウム王国で召喚される異世界人のことです。主に、SHに何らかの形で関わる人間が召喚されるとされています」

「何らかの形で、とはパイロットであるとは限らないのか？」

「はい。腕のいい操縦士ではなく、操縦士の素質があるもの、つま

り先代みたいな例もありますし、もしくはノイに画期的な改造案を生み出した人物もいます」

「技術者もありうる、か」

「はい」

「ところで、初代が来たのは偶然、だそうだが、その後何故、このシステムに繋がったんだ？」

「実は、初代が行方不明になった後ですけど、初代が召喚された地点は空間が不安定なことになっていることがわかったんです。それを調査した結果、そこに巨大な魔力をぶつけると、まあ、途中で複雑な術式が入りますが、異世界人を召喚できることがわかったのです。そして、初代のような利用価値の高い人間が他世界にいるとなれば、答えはひとつでしょう。ちなみに、一応初代に似た波長の人間を探すことでSHに関わる人間を探してるみたいです」

「反対は無かったのか？」

「これがですね、最初は非人道的と言っていた方もいたのですが、どうやらこちら側から開けるのは片側の門だけらしく、来るのは、向こう側でも門を開けた人間だけだったのです」

「つまり、死に掛けた人間、か？」

「はい。もしくはご主人様のような空間が不安定な状況だった、みたいな。ともかく、こちらと、他世界の両方で門を開けて初めて世界が接続されます。すると、健全な人間は召喚されないとはいいますから。その上、世界を渡ったときに何があるのか、怪我まで治りますから、逆に人命救助、という大義名分までできちゃったんです」

「そして、死んだと思ったら生きてた、だから大した不満も出てこないか」

「あっさり国の重鎮に納まれますしね」

「ちなみに、怪我が治る理由は確定してませんが、世界を渡る途中の空間で、多量の魔力素を浴びるために体が修復される、と推測されています」

ソムニウム王国

「この大陸の端っこの国です。王都の背後は海ですね」

「どんなものだ？」

「番付的には中間ですかねえ。昔はそこそこ強かったんですけど。」

先々代が国を傾けまして」

「先代は？」

「名君ですよ。傾いた国を一人で立て直しました。その無理が祟って早死にしたといってもいいんですけど」

「そして、今、か」

「何とか立て直した国を王女がどうにか保ってる状態です。実は、戴冠式もまだなんですけどね。だからって他に任せてはまた傾きますから、一人で踏ん張ってます」

「他に王族はいなかったのか？」

「先代の王が無茶すぎて子を残す暇もなかったんですよ」

「だから一人だけ、か」

「そういうことです」

生物について

「そう言えば、先ほど話に上がったが、危険な生物は多いのか？」
「そうですね。ご主人様のいた世界と比べれば、ずっと。この世界には魔術がありますから」

「先ほど聞いたが、何故魔術と生物が関係する？」

「たとえばですけど、ご主人様の世界では龍なんて空想でしたよね。じゃあ、何で空想なんでしょう」

「存在しないからだ」

「存在できないんですよ。そもそも。オーソドックスな龍といえば羽の生えたトカゲですかね。ただ、その羽で浮力が得られるわけがありません。だから龍は存在しえないんです。代わりに、存在できる形として、恐竜が存在します」

「魔術があるならば、飛べる、か」

「そういうことです。生き物はその環境に合わせて進化するものですから、当然のように魔術があるなら、そういう方向に進化するわけです」

「つまり、俺の常識を外れ、魔術をベースにした生き物が現れると見てもいいんだな？」

「はい。それらを総称して、魔物と呼んでいます。魔術に適應した動物ですから。もちろん、魔物になっていない、未適應の動物もいますよ？ まあ、とにかく、魔術ぶっ放す敵から、ありえないほどでかい敵もいますから、気をつけてくださいね」

「ふむ……、そういうえば、盗賊を倒しに行ったときも見かけなかったが……」

「まあ、あの辺は整備されていますから、大きい獣はいませんし小さいのはわざわざSHに近寄りませんよ」

「それもそうか」

銃について

「ところで、今の所人間サイズの銃を見たことが無いのだが」

「あー、実はですね、S Hの銃の解析は済んだんですよ。構造もわかっただんです」

「ふむ、なら何故？」

「ところが、小型化すると精度が酷くなって、まともに動かないんです。だから、今の主流は単発式のです。S Hみたいに連射できるならいいんですけど、単発だとも使いにくいですから。魔術のほうが便利ですし」

「なるほど」

「ああ、でも超凄腕の魔術師が部品製作すればいいのが作れるそうですよ。設計図引かないといけませんけど」

「どちらにせよ軍備には向かない」

「はい。一部の冒険者が懐にしのばせる位です」
「そうか」

「まあ、今日はこんな所に行きましょうか。魔術とかについては、また後日」

「そつだな」

と、一旦話が止まった所で、今度はあざみが質問した。

「ところでなんですけど、先の件の……、アルベール、でしたっけ？ 彼を部下にしたって本当ですか？」

「アルか。ああ、そうだが」

「あ、そうですね……、って聞いてませんよ！ というか愛称呼びですか！ 私も呼んでください！」

「……君は愛称にするほど名前が長くないだろう」

「あざみんって呼んでください。ご主人様」

「断る」

「えー……、じゃあ、とりあえず詳しく説明してください」
「わかった」

頷くと、コテツは辞典を閉じ、口を開いた。

「アルは、先の件の褒美として、王女に身柄を要求した」

「えっと、私に不満とか、ありますか？ なんか機体が鈍いとか」

「そういうのじゃない。俺は前線で一人戦いたい。が、こうして他と組まされることを考えると……」

「後方のお守りというか、部隊との間に摩擦が起きないようなクッションが欲しい、と？」

「理解が早くて助かる。他にも多少思うことはあるが。留守の間を任せたい、とかな」

「ははあ、自由に動きたいからおいておくってことですか？」

「だいたいそんなところだ」

「はい、大体わかりました」

アルベール・ドニ

「今は俺の部下ということになっている。最初は騎士を目指していたそうだが、魔術が使えない、考え方が合わない、と冒険者に転向。その後、依頼を失敗し、近くの村民に救助され、その村の村民となるが、村が焼けて山賊に、と言ったところか」

「数奇な運命ですねえ」

「乗機はシャルフ・スマラクト。接近戦から狙撃までこなす万能なパイロットだ」

「確かにそこそここでしたかね。器用貧乏かもしれませんけど。ああ、でもどちらかと言えば格闘戦のほうが得意そうですね。ナイフを使えば軍格闘臭いですけど、徒手になったらカポエラみたいになりましたし」

「近づかれる前に倒すのが一番だ、とは言っていたがな。ちなみに年齢は二十八、だそうだ」

「年下ですね、そうは見えませんが」

「背も高いしな」

「ご主人様も低くは無いですけど、相手は外人顔ですもんねえ」

「……」

「……」

「あ、もしかして若く見えるの気にしてるんですか？」

「気にしていない」

「即答ですか」

「……気にしていない」

「なんか可愛いですね」

シャルフ・スマラクト

「アルの乗機だな。濃緑色の機体で、機体自体は近接カスタマイズを受けているらしい」

「確かに、マニピュレーターの強度は驚きの領域でしたね」

「後は運動性と出力を重視したようだ」

「結構なハイスペックに纏まってますよねー。腕のいい魔術師でもいたんでしょうか」

「基本的には狙撃銃とナイフがメイン武装。後は魔術具を少々と言っていたが……、魔術具とはなんだ？」

「ああ、魔術の籠った道具のコトですよ。メインじゃないってことは多分、使い捨てですね。イメージは手榴弾でよろしいかと」

「なるほど。適正が無くても使える、ということか」

「高いのを切り札として持つてる人も結構いますね」

「と、まあ、こんな所か、話すべきは。今の所は、だが」

そう言って、コテツは言葉を切った。
しばらく、無言が続く。

そして、不意にあざみは呟いた。

「……私が、ご主人様の相棒ですからね」

「どういうことだ」

「ご主人様の相棒は、私ですからっ」

と、そこで思い当たるのはアルベールのことだ。

「……君とアルでは相棒の意味合いが違うと思うが」

「……ご主人様の相棒は、私なんです」

今度は、拗ねたような声。

コテツが、なんとなく振り向くと、頬を膨らませて、あざみはそこに居た。

「あー……、嫉妬、してるのか？」

「違います、これは決定事項なんです。ご主人様の相棒は私、嫁は私、私のお婿さんはあなた。あーゆーおーけい？」

言われて、内心コテツは困り顔。

「嫌だったら、操縦下手になってください」

「それはできない相談だな」

「なら、決定事項です」

そう言って、再びあざみは頬を膨らませた。

視線を前へと戻したコテツは、やはり内心困っていた。文字通り死ぬほど戦に明け暮れていた彼にはこういった距離の関係は馴染みが無い。

元の世界において、コテツは周囲から一歩引かれる存在だった。エースとはそういうものだったからだ。

よって、エースや英雄と扱われた彼だが、他人からのアプローチは遠巻きなものだった。同じエースから追いかけられたこともあるが、彼女は常軌を逸していたため、コテツ内のカウントには入っていない。

後は、ガチホモ集団と名高い部隊に配属され、渋みがかつた男たちに迫られただけだ。その件に関しては思い出したくない記憶の一つとして、心に刻まれている。

つまり、仕事以外での深い付き合いに碌なものなかったのだ。

(参るな……。反応に困る)

無表情のまま微動だにしないコテツ。

(何か、すべきか)

コテツは、逡巡に逡巡を重ね、行動を考える。
そして結局。

「ふえ？」

あざみの頭を、コテツは撫でる。

そして、驚いた顔のあざみに向かって、ただ一言。

「……頼りにしている」

「……あ、はいっ」

あざみは、目を瞑って、コテツの手を受け入れた。

振り向くと、さつきとは一変、あざみが目を瞑って、「ニコニコと笑っている。」

「ねえ、ご主人様、中庭行って一緒にお昼寝しましょうよ」

「いきなり、なんだ」

「いいでしょう？ ね」

「何故」

「大切なパートナーですから、大事にしてください」

「しれっと自分で言うのか、君は」

「えー、じゃあ今度一緒に出かけましょうよ。街とか、案内しますよっ」

「ふむ、それは頼みたい」

「じゃあ、決まりですね。絶対ですよ」

「ああ。覚えておこう」

コテツは苦笑しながら溜息を吐き、長閑な時間は流れていく。

15・5話 剥れパートナー（後書き）

これですつきり、02終了です。

次回は手ぬるく短く、そこそこに、日常に近めの部分を掘り下げたいと思います。

あと、魔物とか、ギルドがどうか、出てないファンタジー要素も

とりあえず、構成を練る必要もあるので、更新まで少し空くかも知れませんが。一週間前後かと。

できるだけ早くどうにかするので、しばしお待ちを。

そう言えば、なんだか週間ランキングで八位に食い込んだり、最近ビビりまくりです。こりゃ、もっと頑張らないといけませんね。

16話 夢現

どこか、意識はぼんやりとしている。

「あざみ」

名前を呼ばれた。あざみは、ぼんやりとした頭で考える。この声は誰だ、そうだ、聞き覚えがある。これは、姉の声。

「なんででしょう?」

あざみは名前を呼ばれて、まるで、決められていたかのように口が動いた。

ここはどこか。夜の城のテラスだ。そしてこの会話。記憶にある。ならば、これは、夢だ。

「まだ、主は見つかっていないのね?」

果たしていつだったか、そこまでは覚えていないが、確かに記憶にある。

確か、自分はこう返したはずだ。

「『別に要りませんよ、マスターなんて』」

すると、透き通った薄紫の髪が綺麗な姉は、困ったような顔をし

て、こう言った。

「悪くないものよ……。いいえ、とても素敵なことだわ、主がいるって」

「わかりませんね。お姉さまの言葉でも、どうも実感できません。マスターなんて居ても自由が制限されるだけじゃありませんか」

そういうと、姉は困ったように笑う。

(今なら、わかりますよ、お姉さま)

エーポスは、貴重な存在。言わばアルトそのものだ。そして、アルトは他の機体とは一線を画す。

軍事的に大きな意義をもたらす存在でもある。

と、なれば、生活はまるでお姫様扱いだ。さすがに王女に狼藉を働けば牢屋に入れられることになるが、王女に頭を下げずとも、何も言われず、傍若無人な振る舞いをしても許される。

見た目どおりの小娘ではなく、長い時を生きた彼女らは、王であっても無視できない。

無論、姉妹たちの中に進んで狼藉するような者も居ないが、それだけの立場がある。

(本来の全力を出し切るといふ、あるべき姿に戻れる喜び、対等に接してくれること、戦闘になれば、それ以上に使ってくれること)

だが、エーポスはアルトを動かすために存在しているのだ。

今だからこそわかる。エーポスは、主と共にあることこそがもっとも自然な姿だと。

故に、あざみは喜びを感じていられる。

「貴方にも、いつか見つかるわ。パートナーが」

「いりませんよ、そんなの」

「見つければわかるわ。私も、今はすごく楽しいから」

姉は笑った。果たして、何故笑っているのか、あざみにはわからなかった。

姉のパートナーは六十年もすれば死んでしまうことだろう。なのに、笑っている。

（私も……、見つけましたよ、お姉さま。今が、すごく楽しいです）

だが、今ならば姉の気持ちができる。コテツという主に出会えたのは、この生の中で最高の出来事だ。

隔絶した操縦士としての能力と、不器用な人となり。それでも、不器用なりにあざみと上手く付き合っていこうという姿勢が、嬉しい。

この世では、そう。たった一人、その操縦士だけが、エーポスと対等でいられるのだ。

「見つけたら、離さないでね？」

その時のあざみは仏頂面をしていたが、今は内心で微笑んだ。

（はい、もちろんです）

そうして、ふっと、目が覚めた。

「……ん」

朝日が眩しい、目覚め。

城の一室で、あざみは目が覚めた。

ここは、あざみに与えられた部屋だ。コテツと同じ部屋に寝泊りしようと思ったのだが、それは当の主に丁重にお断りされたので、仕方ない。

ぼうつとした頭のまま、どうにか身を起こすと、あざみは眠い目を擦る。

「夢、見てた気が……」

呟きながらも、あざみはベッドから降りた。所詮、夢は夢、忘れて当然のことだ。

何故か胸が温かいのは気になったが。

しかし、とにもかくにもだからといってどうということも無い、あざみはクローゼットから服を取り出した。

それらをベッドに乗せて、あざみはまずはパジャマのボタンを外す。

するり、と服が体を離れ、それもベッドに置かれる。ズボンのほうも同じように、だ。

そして、屈みこむようにして下着を脱いだ所で、あざみは姿見のほうを見た。

「特に、異常無し、ですね。健康的です」

そこには、健康的な肢体が映っているだけだ。妙な腫れや痣も無ければ、変に青くも無い。

「性的魅力は、そこそこだと思っんですけど……」

あるべき膨らみはちゃんとある。

どちらかと言えば肉付きのいい大人の女性というより、スレンダーな年頃の少女の風体だが。

「ご主人様の好みはどっちなんでしょう」

これで、守備範囲は十二歳以下の少女だ、といわれた暁には手に負えない、と思いつつもあざみはブラウスに短いスカートと、いつもの格好へと着替えた。

そして、定期的に使用人が変えに来る桶に溜まった水を使って、歯を磨き、顔を洗う。

使っている歯ブラシと歯磨き粉は、工学以外にはあまり頓着しなかった初代エトランジェがせめてこれだけはと定着させたものだ。

他にも、エトランジェが定着させたものは、いくつもある。

「さて、身だしなみも大丈夫ですね」

今一度鏡を見て、胸元のリボンの位置を整え、にっこりとあざみは笑った。

(ああ、でも少し位お化粧をした方がいいでしょうか。けど、ご主人様そういうの好きじゃなさそうに見えますし)

化粧の香りに顔をしかめそうなタイプだ、とあざみは思考し、頭を振った。

(あーもう、男の人のことなんて気にしたことも無かったからわかりませんっ……!!)

考えを振り払うように、あざみは動き出す。

まずは部屋の外へ、そして当然のようにコテツの部屋へと向かう。コテツの部屋とあざみの部屋はそう、遠くない、というよりは近くにあざみが引越した。

私情半分だが、エーポスとその主はできるだけ傍にいたべきだという意見は、誰が聞いてももつともなものである。

(ともかく、ご主人様を起こしにいきましょう。こういふことは、日常から、ですよ)

うきうきとした気分で、コテツの部屋の前に立ち、そして、ノックもせずに扉を開けた。

いつもの部屋、無表情で仏頂面で、私生活でこれといって特筆すべきことも無い主の、何の変哲も無い部屋だった。

「ご主人様ーっ、朝ですよー！」

だが。

その部屋からは返事が返ってくるどころか。

「……あれ？」

誰もいない。

きよろきよると辺りを見回す。いない。

ベッドの布団をめくる、いない。

ベッドの上に寝転がってみる、いない。

枕に顔をうずめ、まだ残るぬくもりを堪能してみる、いない。

「 いません」

主のベッドの中、仰向けに布団の端を両手で握り、まるでまさに寝ようとしているような体制で、あざみは呟いた。

ぬくもりが残っているということは、布団を出てさほど時間が経っていないということだ。

不可解である。この時間、コテツは起きてはいても外には出ないし、今日は訓練が早いという話も聞いていない。

だが、いない。

「別に隠れてるとかないですよね、ご主人様ー？」

その不可解さを解するために、あざみは不本意ながら立ち上がった。

徐に部屋を出て、廊下を歩き始める。

歩きながら、あざみは首をかしげた。

(……うーん、どこいったんでしょう、あの人。あー、でも気が向いたからってふらっといなくならないとも限らない気がしますし……、っと、危ない、通り過ぎる所でした)

そうして、思考に沈んでいると、思わず目的地を通り過ぎる所であつた。

すぐさまブレーキをかけて、あざみは右手に見える扉の前に立つ。そして、次に開いたのは。

「……あざみ？ 一体何かしら」
「ご主人様がないんですけどっ！」

王女の執務室の扉である。

ドアを乱雑に開けるなり、あざみは言った。
対するアマルベルガは、ペンを持った体勢のまま、半眼であざみを見つめている。

そして、数秒の時間を置いて、やっと謎の衝撃から立ち直ったアマルベルガは口を開いた。

「……コテツなら、ギルドへ登録に行ったわ。軍人なら、当然ですよっ？」

呆れたような声に、あざみは驚愕のあまり表情を凍らせる。
たとえ突如眼前に大規模魔術が出現しても、こっちはならない。

「え？ ちょ、ちょ、ちょ、すとつぶ。待ってください」

「何かしら？」

「行った？ ご主人様が？ 外に？ つまり、もう城にいない？」

「そうよ」

「き、聞いてませんよ！ そんなの！！」

ばん、と机を叩くが、王女は涼しい顔。

「言っていないんでしょうね。コテツがわざわざ一緒に来いなんて言
うと思うっ？」

「ないですね」

「……そこ、即答するのね」

「ないです」

「まあ、とにかくそういうこと。リーゼロッテを付けておいたから、心配はないわ」

そして、王女の言葉の中でリーゼロッテ、と聞き、思わずあざみは耳を振るわせた。

それは安心できる要素ではない。

「え、いや、大有りですよそれ」

「なにかしら」

「ありますって！ あの巨乳怖いです！ 女狐です！ ご主人様の貞操のため私追いかけますから、後よろしくお願いします！」

こうしてはいられない、と脱兎の如く走り出そうとするあざみだったが、アマルベルガに止められる。

「貴方はディステルガイスト使用の手続きがあるでしょう？」

そう、そうなのだ。

実は今日のあざみの予定は、書類を書いては提出することだ。

ディステルガイストを自由に使えるようにするには、それなりの手順が必要なのだ。

思わず、あざみは足を止めた。

「ぐ、ぐぐ」

そして、そんなあざみの弱みに付け込むように、アマルベルガは言う。

「自分の乗機が使えるかどうかの作業をほっぽり出すパートナーを見たらコテツは……、まあ、何も言わないんでしょうけど、内心役

に立たないクス女だと思うに違いないわ」
「ぐぐぐぐぐぐ……」

今にも走らんとしていた足は地面に縫い付けられたようでもあった。

葛藤するあざみ。

そして。

「……ご主人様、あざみは職務を全うしますっ……！！」

悲壮感たっぷり、彼女は言ったのだった。

16話 夢現（後書き）

想定外に筆が進んだので、フライングで一話更新。
今から書き溜め作業に入ります。

まあ、今回のコンセプトは『緩め』なので、もしかしたら書き溜め
無しで更新するかもしれません。

17話 チェインハンド

「あれ？ ダンナ、その可愛い子誰？ ダンナの嫁？」

「滅多なことを言うな、アル。彼女の沽券に関わるだろう」

コテツは、城門の前でアルベールと出会う。

アルベールが興味を示したのは、コテツの隣を歩くリーゼロツテだった。

「え、えと。嫁、ですか……？」

リーゼロツテが、赤くなって戸惑う。

そんな彼女を見て、アルベールはにやにやと笑っていた。

「可愛いねエ。ダンナ、嫁のために生きるってのも、上等なんじゃない？」

「相手がいないが」

「あ、俺に背中から撃たれてえの？ ダンナ」

「何をいきなり」

理不尽だ、とばかりにコテツはアルベールを見つめた。だがしかし、ひよいとアルベールはその視線を受け流す。

「まーいや。で、ダンナ、これからデートかい？」

「いや、今から冒険者の組合……、ギルドと言ったか。その本部に行く所だ」

「本部？」

聞き返してくるアルベールだったが、すぐに納得したのか、コテツの返事を待つ前に再び口を開いた。

「あー、なるほど。城の兵士は皆カード持ちだっけか」
「そういうことらしいな」

そう、コテツが外に出ようとしているのは、ギルドに正式に登録に行くためだ。

無論、コテツは冒険者ではないし、城の兵士も違う、だが、皆ギルドに登録したという証明のカードを持っているのだ。

理由は、幾らかある。

ギルド自体、国がスポンサーとなり、多大な出資をしている。そのため、国の兵士の手が足りないときは、ギルドから傭兵をかき集めることもある。

その際に、情報の共有を行うなら、ギルドで一括して行う方が手間が少ないのだ。

そしてもう一つ。兵士にもしも遠方への任務があった場合、現地で国から何らかの援助が出る場合がある。補給物資、もしくは追加の軍資金など。

その際の受け取りに、各地のギルド支部を使うのだ。任地で何かあった場合も、腕の立つ冒険者が集まりやすいギルドは都合がいい。それ故に王国軍の兵士は全て、冒険者ではないが、ギルドの身分証明を持っている。

そして、ご多聞に漏れず、コテツもまたその身分証明を受け取ることになったのだ。

「手続きは済んでいるらしいから、証明を受け取るだけだが」

そうして、アルベールは納得したらしい。

一度頷いて、彼は帰す。

「なるほどね。あー、でも俺もその内更新にいかねえとなあ。と、まあいいや、ダンナはデート楽しんできてよ」

そう言って、アルベールはひらひらと手を振った。

デートだのと、釈然としないが、どうすることも無くコテツは歩き出す。

そして、隣を歩いていたリーゼロッテへと視線を向ける。

「さて、リーゼロッテ」

唐突に呼ばれて、驚いたようにリーゼロッテは肩を震わせた。

アルベールとの会話が長かったらしく、気を抜いていたようだ。

呼ばれてすぐさま、気を引き締めようとはばかりに、文字通り肩肘を張る。

「は、はいっ！　なんででしょう？」

「そのギルド本部とやらはどこだ？」

「あ、えっと、こっちですっ」

コテツの問いに対し、張り切ったようにリーゼロッテが歩き出した。

少し早めのペースで、尻尾を揺らしながら歩く。コテツも、それに続いた。

しかし、果たして何歩歩いた辺りだろうか。

コテツの目の前で、彼女の体が傾いだのだ。

「きゃんっ！」

可愛らしい悲鳴が響き、躓いたのだ、と理解したコテツはすぐさまその腕を捕まえた。

斜めに揺らいだ彼女を、引き寄せる様にコテツは腕の中に抱きとめる。

「大丈夫か」

抱きとめられた彼女は、別に怪我もなく、上手く助かったのだが、コテツが思うよりも数段彼女は動揺していた。

「あ、と、えあ、は、はいっ！ 問題ありません」

機体に乗ってない時はまるで変温動物と揶揄される鈍さのコテツであるが、この動揺具合はさすがに不自然だと悟ることができた。そして、彼はその不自然さに対し、口を開く。

「どうかしたのか？」

すると、言い難そうにしながらも、結局リーゼロッテは答えてくれた。

「その、優しくされるのって、珍しくて、ですね……、あの。私が転んだら唾を吐きかけるくらいで丁度いいと思います」

「……無理だ」

一体どれほど冷たく当たられたんだ、とコテツは思わず半眼になる。

「君は俺に鬼畜になれと」

言いながら、コテツは内心溜息を吐いた。

この世界に着てからそこそこの月日がたったが、未だにコテツには慣れないものがある。

その一つが、亜人差別だ。

多数が少数を駆逐するのは、世の常であれども、目下動く死体のようなものであるコテツとしては、精力的に動くもの全てが眩しい。常に人を見上げているコテツにとって、見下すのは馴染みがないものだ。

(むしろ、俺より彼女の方が、よほど人間的にできている)

と、思いながら、ふと気が付く。

アルベールとの会話だ。彼は差別を行っていただろうか。

「アルには差別の意図が見受けられなかったが、どういうことだ？」

差別を受ける　、野蛮な獣の混ぜ物として扱われ、常に見下される亜人のはずだが、アルベールにはそのような空気は見受けられない、どこるか褒めるような言葉すら口にしていた。

果たして、アルベールが特殊なのか、それともまた別に理由があるのか。

結果は、

「あ、冒険者の方は亜人を差別しない人が多い、らしいです。実力主義のところらしいですから」

と、言うことらしい。

確かに冒険者としては、単純に身体能力が高いという点が重要になってくるのだろう。

更に鼻が利くとか耳がいいとかがあれば完璧だ。

(むしろ、亜人を重用しないからこそアルトを運用できないのではないか……?)

あざみを満足させられる操縦技術など、世界を回ってもそう見当たらないだろうが、乗っても大丈夫、という点ならば亜人の方が数が多いのではなからうか、とコテツは考える。

そしてそれと同時に、もう一つの考えも浮かんだ。

(いや、逆にそれを恐れているのか……)

アルトを動かすには、常軌を逸した操縦技術が必要である、とはいえ、体に掛かる負担に耐えられる、というまず第一段階でのハードルが低いのだ。

むしろ人がやるより、望みは高い。

が、それをやると、人と亜人の関係が反転しかねないだろう。なんせ、アルトは強い。己の乗機だからこそわかる。亜人にその気があるかないかは関係なく、人はそれを恐れ、虐げ続けるというわけだ。

「まあ、俺には関係の無いことか。案内を続けてくれ」

考えを振り払い呟いて、コテツはリーゼロッテを見た。

「あ、はい」

再び歩き出す二人。

そして、すぐに城下町がコテツの視界へと飛び込んで来た。思わず、声を漏らす。

「こうして街に出たのは、初めてだな」

「そうなんですか？」

「城の外に出たのは訓練と山賊討伐の時だけだ。自ら外を見て回る余裕は無かったからな」

そう言っつて、コテツは街並みを見つめた。

訓練の際も、山賊の件の時も裏道を通ったため、こうしてまじまじと見つめるのは初だ。

見た目上はまさに中世ヨーロッパ。レンガ造りの街並みが、コテツには新鮮に映る。

「活気があるな」

眼下は、とても賑やかだ。休みだからだろうか。

言っつと、リーゼロッテは嬉しげに微笑んだ。

「はいっ。では、はぐれないように手でも繋ぎましようか？」

そんな、楽しげなリーゼロッテに対し、コテツには断る理由もなかった。

「ああ」

頷いて、手を伸ばす。

すると、ぴくり、とリーゼロッテの耳と尻尾が反応した。恥ずかしがるように、赤くなり、彼女は耳を垂らす。

「え、あの。えと、冗談……、だったん、ですけど、その「む、そうなのか？」

「その……、コテツさんは冗談だと思わなかったんですか？」

「素人だからな。何かあるか分からん。経験者に口出しをすべきではない、と思っただけが……」
「えっと、じゃあ……、その」

おずおずと、リーゼロッテが手を差し出した。
本当に、手を繋ごう、と彼女は言っている。それくらいは、コテツにもわかった。

「ああ」

コテツが、その小さく柔らかな手を握る。
そうして、隣り合って二人は歩いた。

「君と手をつないだのは、二回目だな」

「え？ あ、もしかして、隣国との」

「ああ、そうだ」

隣国がステルス戦艦で襲撃を掛けたとき、コテツの手を引いたのは、他でもない、彼女だ。

どことなく、感慨深い気分、コテツは浸る。

「手を引く君が、予想を超えて力強かったのが、印象に残っている
何でもないことのようにコテツは言うが、女性に言つべき台詞ではない。」

途端に、リーゼロッテは顔を赤くした。

「それは、私が亜人だからでして……」
「こうしてみると、小さな手だ。あの時の、力強さとは、似ても似つかん」

不思議そうに、コテツは己の手の繋がった先を見る。
そして、不思議そうに手を見るコテツに対し、リーゼロッテは微笑んだ。

「コテツさんの手は、大きくて優しい手ですよ」

コテツは、反応に窮した。こういったときの反応はどうすべきか、考える。

だが、窮している間に、リーゼロッテは話を続ける。

「私、男の人と手を繋いだのって、初めてです」

「俺じゃあ、役者が違うか？」

自分にはこういったものは似合わなさ過ぎる、と言った言葉に返ってきたのは、まるで叱るような声だった。

まるで、出来の悪い兄を、しっかり者の妹が叱るような、そんな空気。

「ダメですよ。コテツさん。卑屈なのは美德じゃないです」

果たして、客観的に見て自分はどうかなのか。

コテツは考える。

(主観的に見れば、機動兵器に乗る以外に能も価値もない男だ)

客観的な答えなど、永遠に返っては来ない。

結局、わからないからコテツは曖昧な答えで返した。

「善処しよう」

そうして、二人は目的地へと辿り着く。

ギルド本部。

冒険者の総本山、と言ってもいいだろう。

17話 チェインハンド（後書き）

さすが休日、筆が進みます。

次回辺り、ギルド行きます。お約束です。
やっと異世界テンプレらしくなってきました。

18話 スターティングクエスト

冒険者組合。

通称ギルド。

「実態は、職業斡旋所と言ったところでしょうか。土木工事から皿洗いまで、仕事を回してくれます」

「ふむ」

「あとは、個人同士で依頼を受けるときに、申請すれば間に立ってトラブルが起こらないようにしたりしてくれます」

「無駄なトラブルを避けたければ、それが賢明か」

ギルドは、国営機関にかなり近い所のようなのだ。直接経営しているわけではないようだ。

冒険者が集まって作ったというよりは、冒険者が余りに野放図に動き回ると困るからトラブルを減らすために作られたような空気がある。

「しかし、まるで免許だな」

そう呟いて、コテツは手の中のカードを見た。

登録は、すぐさま終わった。というよりは、既に手続きが済んでいたもので、王女からの紹介状を見せて本人確認をするだけで終わったのだ。

そうして渡されたのが、掌ほどの大きさのカードだった。

表面にはコテツの顔写真とデータ。裏面には幾何学模様が刻まれており、何らかのデータが入っていると見える。

それをまじまじと見つめるコテツに、リーゼロツテは人差し指を立て、口を開いた。

「ええと、SHのコクピットに入れておけば、スコアの記録もしてくれるそうですよ」

「便利だな」

「それに、SHなんかで中に映像を記録しておけば、討伐依頼の証明になるそうです」

「しかし、非常に便利だが、改竄や偽造される恐れはないのか？」

たとえば、討伐証明映像をコピーして、似たような依頼が来たときに見せるような真似をする輩が出てきそうなシステムである。

が、そのような事柄には、当然対策もあるらしい。

「ああ、その辺りはコピー保護とか、プロテクトだとか、魔術保護とか積んであるらしくて、そもそも、解析できたら冒険者じゃなくて学者として一財産稼げますよ」

「ということはもしかすると、このカードやシステムは……」

「はい、歴代エトランジェ様の一人が、初代ギルドマスターでして、彼が創ったものです」

いやに近代的だと思ったら、そういうことらしい。

たしかに、コテツが探せば、そこかしこに、歴代の影が見える。

例えば、街灯。しかもガス灯ならまだしも、太陽電池式である。

そして、上水道はないが、現代に近い下水道は何故か普及しているのだ。これもまた、エトランジェの影響だろう。

街灯には防犯効果がある、とか、街の清潔さは疫病などの防止に繋がる、という建前もあるのだろうが、せめて最低限これだけは、という文化の違いに戸惑ったエトランジェの最低限の要求、というものも感じられた。

これも、その一つだろう。

「代々エトランジ様は色々な物を残していくんですよ。先代は、とらんくす、っていう、下着を開発したとか」

（何を作ってるんだ先代……）

「他にも公表されてませんが付け耳っていう物がありました。先代は亜人との融和を唱えていた方ですから、きっとそういう主張のためのものだって言われています」

（それは思うに先代の趣味だ……）

「あとやきゆうけん、という遊びを……」

（本当に何をやっているんだ先代……！）

顔も知らぬ先代だが、思わず半眼になってしまふ。

これ以上聞きたいような、聞きたくないような、だ。

これ以上は色々ダメだ。コテツは黙って考えを振り払う。

そして、極めて真面目な思考へ。

（しかし、冒険者が……、半ば傭兵みたいなものだな）

思いつつも、コテツは依頼の紙が所狭しと張られているボードを見た。

「どうかしました？」

付いてきて、同じくボードを眺めるリーゼロッテに、コテツはボードを見たまま答える。

「いや、物は試し、一つくらい依頼でも受けようかと思ってな。君は先に帰ってくれて構わないが、外に出るもので、一番危険度が低いものはわかるか？」

免許を取ってすぐにペーパードライバー、と言うのも寂しいものだ。

だから、外も見ておきたいし、一つ位依頼を受けてみようと考えた。

「私も付いていきますよ。私はコテツさんのメイドですから。んー、でも危険度が低いですか。条件つきで探すなら、受付で聞いたほうがいいかもですよ?」

「そうなのか?」

「依頼はボードに貼りきれないほどありますから。国が重要と判断したものがまず最初に貼られます」

「他は?」

「どうしても依頼を受けて欲しい時、緊急で何か欲しいものを取ってきて欲しい時なんかは、お金を払えば貼ってもらえるんですよ。皆まずはボードを見ますからね」

「なるほど。とすれば、難度の低い依頼はあまり貼ってない、か?」

頷きながら、コテツはボードの紙を一枚一枚眺めていく。

問題なく字が読めるのは、召喚魔術にそう言った知識の伝達が含まれているかららしい。

便利ではあるが、思う所もある。

(他の知識を伝えないのは常識や情報は移り変わっていくからか、それとも下手に情報を渡して賢くなられたくないのか……)

知識を与えずにおくということとは、染まらないという反面、染めやすいということでもある。

(その時の国に都合のいいことだけ知識として教えていけば、半ば

洗脳されたような兵士が　、まあ今はそんなこともないようだが)

と、そこで、隣から声が掛かった。

「あ、これなんてどうでしょうか。ソルシエの実の採取だそうです。森は近いですし、出るのも狼くらいですから」

「ボードに張るような依頼なのか？　それは」

「多分、ソルシエの実は魔術師の方が使うものですから、実験かなにかで緊急で欲しいんだと思われます」

「別に依頼の大きさと、ボードに貼るか否かは関係ない、か」

「どうやら、大したことのない依頼でもボードに貼られることは少なくないようだ。問題なのは、本人がどれだけ依頼を受けて欲しいか、らしい。」

「まあ、ともあれ、リーゼロッテの指差したその依頼は、非常に丁度いい。」

「外、というものを見ておきたいのだ。生身で。ぶつつけ本番で常識の違いに戸惑うのはいけないとこの間悟ったばかりなのだ。」

「リーゼロッテの言う狼が、コテツの認識とずれている可能性だつてある。」

「では、受けてくるとしよう。その紙を持っていけばいいのか？」

「はい。あとはカードを出してください」

コテツは、言われたとおり、カードと依頼書を受付に提出。

「どうやら、カードに受けた依頼と成否が記録されるらしい。」

(あまり失敗を繰り返すとブラックリストに入れられそうだな……)

前金だけ受け取って逃げたりだとか、そう言った旨い話はないら

しい。

考えている間に、既に受付は終わったらしく、カードが返ってくる。

それを受け取り、リーゼロッテの元へコテツは歩き、そして外へ向かおうと思ったのだが。

「ん？ 見ない顔だな、新入りか？」

リーゼロッテの目前で、背後から声を掛けられる。

振り向くと、そこに居たのは、大男だ。

赤銅色の肌に、まるで筋肉の塊のような体躯。蓄えられた真っ赤な髭。頭は禿げ上がっている。

上半身は半ば裸といってもいいだろう。ベルトが巻かれ、背には槍のようなものが見える。

イメージは歴戦の猛者、そのものだ。

「おいおい、随分ひよろつちいなあ、てめえ。どこのお坊ちゃまかしらねえが、こんなんで大丈夫かよ？」

男は、コテツを見るなり、鼻で笑った。

コテツは、どうすることもなく、その視線を受け流す。

こういったことは、前の世界でもあった。

古参は新入りに対し、上下関係を分からせようとする。そういうものだ。

こういった、力こそ全てである場所では、尚更に。

(これは、お約束という奴か……)

新入りへの洗礼。昔は一度機動兵器に乗れば皆黙ったものだが。

しかし、コテツは冒険者ではないから頻繁にこちらを出入りする

こともない。

無理に力を見せる必要もなければ、相手がどれほどの者かも分からない。

だから、一発や二発なら甘んじて受けよう、と。
思ったのだが。

「なんだあ？ 魔術師か、オイ。本当に大丈夫か？ 防具は持つてんのか？ 魔術師なら魔法薬はちゃんと買っとけよ？ 生命線だからな、ああ、俺魔術つかわねえから貰ったやつ分けてやる、それと」

雲行きが、怪しくなってきた。

「魔術師だからって剣がいらねえわけじゃねえんだぞ？ 近づかれたらどうすんだ、その亜人の嬢ちゃんを守ってくれるかもしんねえけどもよ、囲まれたら全方位守れるって訳じゃねえんだぞ？ あとアレだ、ハンカチは持ったか？ ちり紙は……、ってどうした？」

どうやら、敵意はないようである。

むしろ、無さ過ぎて、コテツが頭を抱えるほどに。

「すまない、君という人間が掴めない……」

「ああ、自己紹介がまだだったな。俺の名はヴォルト。姓は要らねえだろ？ 冒険者同士なんだしな」

いや、違うそうじゃない、という言葉をコテツは飲み込んだ。

コテツは悟る。この男はおせっかい焼きだ、と。ついでに話も通じない。

「コテツだ。そしてこちらが」

「リーゼロッテです」

「どうやら、冒険者同士なら、わざわざ姓を口にしない流儀らしいので、コテツもそれに倣った。」

「つまり、わざわざ詮索したりしない、ということだろう。そして名乗りを終え、」

「フン、コテツにリーゼロッテ、か。どうしてこの道に入ったか知らねえが……」

と、ヴォルトが言いかけたその時。

また一人、人数が増えた。

「ボス、依頼取れましたぜ、ってボス、何やってるんすかい？」

「ん、いや、こいつらにこの世界の厳しさを教えてやるうと思っとな」

（……荒くれの中にも優しい人間くらい居る、ということしか分からなかったわけだが）

「ボス、と呼ばれたヴォルトの背後にやってきたのは、細身の男だった。」

別に然程そうでもないはずなのだが、筋骨隆々の大男であるヴォルトと並ぶと、まるで貧相に見える。

そんな彼の特徴は、短い茶の髪と、外人らしい甘いマスク。腰には細身の剣があった。

「相変わらずっすね、ボス」

「おおよ」

ヴォルトが大仰に頷き、それを見届けたあとで、男はコテツを見つめる。

見定めるような視線が、コテツを貫いた。

「つつても、こんなのに塩送つてもしょーがないでしょうが」

「なにを!? ラッド、テメ冒険者である以上、一緒に仕事をする
こともあるだろうよ」

「そんな時に、信頼できる相手になってないと困る、でしょう? ど
うちにせよ無駄でしょうが」

そう言つて、ラッドと呼ばれた男は、馬鹿にしたような目でコテ
ツを見た。

「ひよろいうえに、亜人の女を連れてくるお坊ちゃんだぜ。どう考
えたつて将来性ねえや」

「馬つ鹿やる! この先どうなるかわかんねえだろうが!」

「そうやって追い抜かされたら、俺たちが損だよ、ボス」

「追い越されたら追い越しゃいい」

「だから脳筋つて呼ばれてるんすよ、ボスは。どうせこりやどこぞ
の貴族のお坊っちゃんでしょうよ。期待かけたつてむだでしょ」

「き、期待なんかしてねえし! 坊主に世間の荒波つて奴を教えて
ただけだし!」

言い争いを続ける二人。

そんな中、コテツは一応当事者の一人のはずなのだが。

(……これでも三十過ぎなんだが)

割とどうでもいいことを考えていた。

そして、ここでもぼつっとしていてもどうしようもないことに、気
づく。

だから、口を開いた。

「とりあえず、行くか、リーゼロッテ」

「えっと……、いいんですか？」

「……多分な」

そうして、コテツ達は音もなくそこを立ち去ったのだった。

「ところでリーゼロッテ」

「なんですか？」

「……俺はそんなに若く見えるか」

「……え？」

「いや、忘れてくれ、なんでもない」

晴れ渡る空。

茶の道と、緑の草が茂る街道は、やけに爽やかだった。

「コテツさん、本当にそれ一本で良かったんですか？」

リーゼロッテの問いは、コテツの腰元の一本の剣に向けられている。

「鎧を着て戦ったことはないからな」

腰元の剣。それは、出てくる前に武器屋で購入したものだ。おあつらえ向きに、アマルベルガが支度金を用意してくれていた。ので丁度良かったのだ。

確かに、軍人なら帯刀もするだろう。

「結局、想像通り銃はなかったが」

「銃はオーダーメイドの高級品ですから」

そう言って、リーゼロッテは苦笑いする。

本当にコテツの欲しい武器があるとすれば、それは銃火器だ。

わかつてはいても、欲しくなるものである。当然のように腰に銃があつた身としては。

しかし、この世界、生身の人間用の銃はまったく普及していない。SHの銃の構造は既に解明され、さまざまな銃が作られている。しかし、構造が理解できたからといって、単純に作れるようになるわけではない。

SHサイズなら、魔術師が魔術で部品を製作できるのだが、生身の大きさだと、部品の精度が著しく落ちる。

製鉄技術がまったく追いついていないのだ。それを魔術でどうにか補っている状態。

だがしかし、小さく細かなものは精度が悪く、強度にも問題が出る。

「さすがに単発では役に立たんしな……」

結果が、構造を単純にした単発銃と、極めて腕のいい魔術師によるオーダーメイドだ。

そうになると、もう冒険者がたまたに単発式を懐に隠して奥の手にするくらいしか、使い道がない。

「まあ、おいおい考えるところでしょう」

ない物は仕方がない。コテツは心中そう断じた。

故の腰の剣だ。果てしなく適当に選んだと言ってもいい。そもそも、アマルベルガの支度金も大した値ではなかった。

登録を終えればコテツは帰ってくると思っていたのだろうし、腰に剣が刺さってないのはしまらないからせめて何か差しときなさい、というのが彼女の言葉だ。だから、腰に差して格好が付けば適当な剣でもいい、とアマルベルガは小額を渡したのだ。

確かに、カードの受け取りが終わればコテツはフリーだが、それでも街を見てくる程度で、依頼を受けているなどとは、夢にも思っていないだろう。

しかし、関係のないことだ、とコテツは、道の向こうを見た。

しばらく向こうに、森が見える。あれが目的地。

「じゃあ、行きましようか」

「ああ」

「そういえば私、男の人と二人でお出かけするのも、初めてです…」

「俺では……、いや、君の初めてになれて光栄だ、と言うべきなのか？」

「そ、それはダメだと思いますっ。あらぬ誤解を招くんじゃ……」

「む？　どんな誤解だ？」

「え、えと。それはですね、ええと」

困ったように、尻尾が右へ左へと泳ぐ。
そして最後に、リーゼロッテが両拳を胸元で握り前かがみになる
と同時、尻尾はピーンと天を指した。

「と、とにかくダメですっ！」

こうして、まるでピクニックにでも行くかのような手軽さで、二人は冒険に出かけたのだった。

18話 スターティングクエスト（後書き）

やっと外に出ました。

ギルドで依頼、俄然異世界らしくなってきました。
ただ、説明が多くて困ります。

19話 平穩安穩安閑

日差し降り注ぐ街道。

「えいつ！」

コテツは、剣で襲ってきた狼を薙ぎながら、横で別の狼を蹴り上げるリーゼロツテを見ていた。

腹に痛撃を貰い、唾液を吐き散らして狼は飛んで行く。一見華奢に見える少女の蹴りによって、だ。

「……凄まじいな」

その様を見て呟いた言葉に、リーゼロツテは少し顔を赤くした。

「戦いは素人なんですけど……」

むしろ、身体能力だけで戦えるのだからこそ凄まじい。

「今回の群れから外れた二匹みたいです。右手の方向から、群れの匂いがします」

そして、鼻も利く。

(冒険者も下に置かないわけだ)

これらの能力は役に立つどころか、酷い扱いをすれば、依頼の現地で亜人に皆殺しにされる可能性すらあるだろう。

冒険者として対等であることは、非常に賢明な判断だ。

かく言うコテツも、それなりの戦闘力はある。SHの操縦がそつくりそのままパイロットの強さに繋がるわけではないが、エース機に乗って鍛えられた体と、常軌を逸した動体視力と反射神経、そして確かな勘は、狼と一対一はもちろん、囲まれたとしてもそう負けはしないだろう。

「では、かち合う前に急ぐべきだな」

「はい」

森は目の前でもある。そして、避けられる戦闘は、避けるべきでもある。

二人は群れから離れるように走り出した。
発見される前に、森に駆け込む。

「森の中は？」

「……、だいじょうぶです。群れは居ないと思います」

すんすんと臭いを嗅ぎ、耳をぴんと立て、リーゼロッテは言う。

森の中は、木漏れ日だけがそこを照らしており、日差しはとても柔らかい。

群れは居ない、とリーゼロッテは言うが、そこかしこに生物の気配を感じる。

先ほどの街道よりも多彩な種類の生き物が、居ると思われた。

「では進むか。目的の木を見つけたら頼む」
「はい」

この世界の生き物は、コテツの主観から言えば、全体的に強靱であるといえる。

さほど大きな差があるわけでもないが、しかしどこことなく、元の世界の生物に比べ、筋力や耐久力に差があるように思えた。

「ソルシエの実は、濃い紫色の実で、見れば分かります。抽出して加工すれば、豊富な魔力素が手に入るので魔法薬に利用される、だそうですけど、魔術師じゃないので詳しくは……」

「俺も魔術師ではないからな。よく分からんが」

そう口にする、コテツの少し前を歩いて先導していたリーゼロツテが、コテツの方を見て首を傾げた。

「……？　　そういえばコテツさんは魔術適正は……」
「ない、だそうだ」

魔術適正とは、文字通り、如何程魔術に適應できるかを示す単語だ。

空気中の魔力素を自分の体に通し、指向性を与えることで魔術は完成するのだが、如何程の魔力素を自分の体に通せるかによって、発動できる魔術の威力は変わるのだ。

そして、コテツは魔術適正を召喚時に計ったのだが、適正はなし。外気から魔力素を取り込むことはできないと知れた。

それをどう思ったか、リーゼロツテは申し訳なさそうに顔を伏せた。

「えと、ごめんなさい……」

「いや、いい。今までなかったものが突然あると言われても戸惑うだけだ」

「で、でも、内在魔力は測ってませんよね？」

「ああ」

内在魔力は、その人間の体内にある魔力素を指し、その魔力素で魔術を行使することもあるし、周囲の魔力素を吸収して魔術を放つ場合は、周囲の魔力素に己の魔力素を付加して指向性を与えることとなる。

内在魔力は測定が難しく、設備が特殊な場所にしかないと、コテツの測定は後回しとなったのだが。

とにかく、その内在魔力を以って、リーゼロッテはコテツを励ました。

「だったら、もしかしたら内在魔力は素晴らしいかもしれませんよっ」

「だといいが」

コテツとしては、あってもなくてもどちらでもいい能力だ。今までなくても良かったのだから、無理して欲しいとまでは思わない。なので、魔術の話はそこで打ち切ることに。

「そう言えば君は、森の歩き方に随分慣れているようだが」

城暮らしとは思えない、とコテツは口にして、話題を変える。

リーゼロッテは、コテツを先導し、後ろを振り向いたまま返事を返した。

「コテツさんこそ、やけに慣れてますよ？」

「兵隊である以上は、密林で活動することもある」

宇宙に戦場が移る前は、地球の密林で戦ったこともある。そこで生身で機動兵器に立ち向かったこともだ。

その経験が、コテツの足を鈍らせないのだが、果たしてリーゼロツテはどうなのか。

「私の生まれは森ですから」

答えは簡潔だ。つまるところ、なんにせよ慣れである。

「そうなのか」

「はい。森の奥の小屋にお母さんと住んでました」

「それが、城に？」

「はい。お母さんが死んで、街に出てみたんですけど、まあ、色々ありました。そんな中、偶然王女様に会いまして」

具体的なことは、ぼかされている。

話したくないのか、気を遣われたのか。

「そうか」

ただ、どちらにしてもそれを無視して踏み込んでいい道理はない。コテツは短く答え、対するリーゼロツテは、優しく笑った。

そして、

「だから、私、森の中は得意なんですつ。なんせ、十年くらい森に、きゃんっ！」

彼女は太い木の枝に顔をぶつけた。

後ろを見ながら歩いていたせいだろう。いくら亜人とは言え、前

方不注意は危険なようだ。

そして、そんなリーゼロッテは後ろに大きく仰け反って背後へとバランスを崩し、本日二度目のコテツの腕の中へと収まった。

今回は手を伸ばすまでもなく、自ら胸の中に納まる形となったので、コテツとしては楽だった。

「……大丈夫か？」

「えっと……、あはは、ごめんなさい。けど、別に私には
「優しくするな、か？ 悪いが、体も口も、勝手に動く方だ」

リーゼロッテは、恥ずかしげに体を縮こまらせる。

「えっと、その……、恐縮です」

そして、体勢を立て直し、再び歩き出した。

「大丈夫か？」

その動きがなんとなくぎこちなくて、コテツは聞いてみた。
のだが。

「あ、はい、だいじょうぶです。問題なしです、はい……、きゃん
っ！ー！」

今度は、木の根に足を取られ、また背後へと倒れてくる。やはり、
どこことなくぎこちなかったせいだろう

先ほどと違い、少し遠かったので、コテツは一步前に出た。
すると、先ほどと同じように、受け止めることができた。

「そそっかしいな、君は」

「う……、すみません。これでも城では敏腕で通ってるんですけど」「別に構わないが」

「今日は、コテツさんに助けられてばかりですね」

苦笑気味に言うフリーゼロツテに、コテツは真顔で返答を返す。

「俺でよければ、いくらでも」

リーゼロツテの体は、やけに軽かった。やはり動物的な部分が影響するの。

そんな華奢な体を支えるぐらいなら、いくらでもできる。

「そ、そうですか？ ……じゃあ、お願いしちゃってもいいですか」

「ああ、任せておけ」

「ありがとうございます、コテツさん」

そう言って歩くリーゼロツテの表情は見えない。どうやら、枝が顔に当たらないように注意しているようである。

だが、その尻尾は、なんだか楽しげに揺れていた。

それからしばらく歩いて、唐突に、リーゼロッテは中空、いや、とある木を指差した。

「あ、ありましたよ。コテツさん、あれがソルシエの実です」
「あれが……」

言われたとおりの濃い紫の実だ。分かりやすい。

「十分な量なってますね。空气中の魔力素があれば年中実はつけるんですけど、この量はラッキーです」

その実は、一本の木に沢山なっているが、それは珍しいことのようにである。

だが、喜びこそすれ、別に残念がるような理由はない。

「高い所にあるの、取ってきますね」

木を見上げるコテツに言うなり、リーゼロッテは駆け上がるように軽快に、木を登った。

さすが、というべきか、手馴れた様子で実を取っている。

コテツは、上はリーゼロッテが担当してくれるようなので、下のほうに実った実を回収する事にした。

紫の実に近づいて、引く。

別にコテツの常識から外れて特別硬いわけでもなく、普通に採れた。

そして、依頼書に記載された必要量になるまで、それを繰り返す。

優しい木漏れ日の中、ただ、それを続けた。

「ふむ、下はこんなものか」

結構な量を回収して、採取籠に入れる。

そして、木の下へと戻り、コテツは上で作業しているリーゼロツテを見上げた。

彼女は、エプロンの裾を持って、即席の袋のようなものを作り、その上にソルシエの実を乗せている。

コテツは、そんな彼女に向かって言葉を投げかけた。

「そちらはどうだ？」

「もう大丈夫ですかね。余分だった量はギルドで引き取ってもらえますし……、ってコテツさんっ」

不意に、何かに気が付いたようにリーゼロツテはうろたえた。

なんだ、とコテツはリーゼロツテを注視するが、彼女はそれに合わせるかのように更に慌てる。

「う、うえ、見ないでくださいっ！」

そこで、コテツも気が付いた。

それと同時に風が吹いて、スカートの中、白いストッキングとガーターベルト。

そして、その健康的な両足の間にある白い布が目映ったその瞬間。

「きゃっ、きゃあああ！」

彼女は、落下した。

(……またか)

驚きと同時に呆れがやってきた。

そして、半ば諦め気味に、コテツはその体を受け止めたのだった。

「あ、あ、あ、ごめんなさい！ 怪我はありませんか!？」

後頭部を強かに打ちつけはしたが、それで怪我をするほどコテツはそそっかしくはない。

リーゼロッテの下敷きとなり、仰向けに空を見上げながら、ただコテツはどこか長閑なものを感じていた。

(……命がけ、というほどでもなく。長閑に森を歩き、実を採ってそれを一人ではなく、二人で)

心配そうにコテツを見つめるリーゼロッテが、何故か微笑ましい。

「コテツさん!？ ほ、本当に大丈夫ですか!？」

リーゼロッテが、体を揺さぶってくる。

そんな中、コテツはぽつりと呟いた。

「……まあ、それも悪くはない、か」

呟いた言葉はどうやらリーゼロッテには届かず、彼女は首を傾げている。

「……? あれ? 今、コテツさん、笑いました?」

だが、言葉ではなく、表情として、彼女に届いた。

「そうか？」

「はいっ、笑いました」

リーゼロッテも、笑みを返してくる。

それが何故だかおかしくて、コテツは誤魔化すように言葉を唱えた。

「そうか。まあ、それじゃあ、帰るとしよう」

「え？ ああ！ ごめんなさい、重かったですよね？」

「いや、そうでもない」

急いで飛び退くリーゼロッテ。のろのろと立ち上がるコテツ。

「帰ろう」

「はい。あ、そうだ、実はいつまでお出かけするか分からないのでお弁当持ってきたんです」

「それは助かるな。道中食べるとしよう」

「はいっ」

来たときと同じように、長閑なまま引き返す。

森の中の生物は、別にわざわざ襲い掛かってくるような真似もせず。

鳥のささやかな鳴き声が聞こえてくるだけだ。

そうして、コテツの初めての冒険は幕を閉じた。

のであれば。

長閑で非常に良かったのだが。

「あれは……、ヴォルトに、ラッドと言ったか……、いや、それよりも」

目を引いたのは、街道に立つヴォルトとラッドの更に奥。そこにそびえ立つ、何か。

十メートルはあろう巨大な体躯。人型に近いが腕が長く地に着く、猿のような体型。

白い毛皮。そして、敵意は獐猛。

「一体あれはなんだ……!？」

振り下ろされる拳が、地面を穿った。

「どつやらのまま終わりとはいかせてくれないらしい……!?!」

それは魔物。

ブランサンジユと呼ばれる魔獣である。

19話 平穩安穩安閑（後書き）

次回、ちょっと生身で戦闘と参ります。

20話 ノンストッププレックレスライフ

街道を、街に向かってひた走る。

「すまねえ！ 巻き込んだみたいだ！！」

「いい！ そちらもアレに会いたくて会った訳ではあるまい！ それよりアレは一体なんだ！？」

背後には、白い狒々の姿がある。

気が付いたときにはコテツモリーゼロツテも、とつくに捕捉されていた。それに、ヴォルトとラッドに別方向へ逃げる、と言っわけにも行かず、共に逃げるしかなかった。

「ブランサンジュ……、魔獣だよ！ 何でこんなところにいるのかわからねえ！」

「……狩り残しでもいたのか？」

「ありえねえ！ 何のために俺ら冒険者や騎士団が常に目え光らせてると思っただ！！」

五倍を悠に超える体格差では、戦うと言う選択肢はどこにも浮かび上がりはしなかった。

となれば、ひたすらに街道を逆走するしかない。

幸い、背後の敵は非常に巨大ではあるが、その重量故か何とか走れば追いつかれない。

（地球では、あのような生き物は自重を支え切れまい……！ これ
が魔力で身体を補強する、ということか！）

生物が魔力素を取り込み適応し、進化したのが魔物である。

その中でも獣をベースとしたものが魔獣と呼ばれる。
地球の物理法則ではありえないその体を、魔力によって支える、
魔なる獣である。

「……来るぞ！ 散開！！」

俄に攻撃の気配が見えて、コテツは叫んだ。
直後に、四人の下へ拳が振り下ろされる。

コテツは横に跳んで回避。リーゼロッテも危なげなく、軽やかに
前へ跳んで避けた。

そして、二人の冒険者も、また何とか避けられたらしい。

これまで、何度か拳が振り下ろされているが、未だに負傷者はい
なかった。

的が分散しているおかげだ。肝要なのは、四人と言う人数。

ブランサンジュと呼ばれた魔物は、四つの的に迷うのか、狙いに
甘さが生まれる。それ故に、この逃走劇を繰り返されるのだ。

「ボス、街に着くまで何回これを繰り返しゃいいんですかね！」

「馬鹿野郎！ 死ぬまでだ！！」

そもそも、コテツとリーゼロッテだけであれば、逃げ切ることは
そう難しくない。

亜人の脚力と、コテツの全力疾走であれば、どうにか背後の敵か
ら距離を離すことができる。

それをしないのは、二人の人間の冒険者の存在だ。重量的に、担
いで走ることも難しい。

助ける義理もなかったが、彼らを見捨てたいとも、コテツは思わ
なかった。

だから、動局的の一つとして、彼らを支援する。

「リーゼロッテ、君は先に行ってくれて構わないぞ」
「いいえ、大丈夫ですから、気にしないで下さい」

そう言って、少し前を走るリーゼロッテに、何故かコテツは安心した。

(……そうだな、彼女はそういう人間だ)

コテツ一人だったら、見捨てて逃げ出していたかもしれない。

コテツの生きた戦場とは、そういうものだったからだ。リスクとリターンが噛み合わないなら、合理的に捨てる。

例えばリスクが大きくても見捨てずに救おうとすること。それは、コテツが戦場に落としてきた物だ。

彼女は、それを持っている。コテツは、それを拾ってみたいと思う。

いつの間にか落としたモノ。それが必要なかどうか知るためにも、コテツはその一つ一つを拾いなおしたい。

彼女なら、迷わず救おうとするだろう、そう思ったから、コテツは冒険者の二人を見捨てなかったのだ

「街が見えて来たぞっ、ラッド、テメエ気張りやがれ!!」

「へいよっど!!」

走り続けると、視界にぼつりと街の姿が見えてくる。

測ってはいないが、結構な距離を逃げてきたようだ

そのように、希望が見えてきたのだが、コテツは背後を見ながら口を開いた

「焦れて来るとしたらこの辺りか……!?!」

そう、ここからが正念場になるかもしれないのだ。
野生の獣に忍耐があるとは思えない、それに、獲物は逃げ切られる直前である。

果たして、背後の狒々がどこまで状況を理解しているか分からないが、街まで侵入することは危険だと分かっているのだろう。明らかに、背後から聞こえる吐息が荒く、苛立つような空気が見受けられる。

ということとは。

大きなアクションがあるとすれば。

今。

「来るぞ！ 全力で逃げろ！！」

四人の周囲を、影が覆う。

そう、狒々は、跳んだのだ。縮まらぬ距離を埋めるため。

この場の四人を、食い殺すため。

「……あ？」

間抜けな声は、ラッドのものだ。

彼は、呆けたように、空を見上げていた。

その空にある、跳躍した狒々の姿を。

「とにかく跳べっ！！」

コテツは、前に飛び込むように跳んだ。余る勢いを、前転して殺す。

直後に、彼を振動が襲う。

揺れる地面をコテツは疾駆、巻き上がる砂煙の中、リーゼロツテを視界に収め、走る勢いのまま、彼女を抱えて更に跳んだ。

「きゃっ、つて、コテツさん？」

間一髪、跳躍と同時に背後から風。巨大な腕が、背後を横薙ぎにしていた。

何とか、避けた。コテツもリーゼロッテも、無事である。

「くっ……、他の二人は!？」

それを確認するなりリーゼロッテを下ろし、コテツは背後を、二人の冒険者を探す。

ヴォルトは、地面に膝を付いてはいるが、どうやら腕は槍でガードしたらしい。問題ない姿が見えた。

彼はいい。まったく無傷とはいえずとも、普通に走れはするだろう。

奇襲も避けた後は街まで走り続ければいい。

だが。

「ぐっ、おおおおっ……」

その傍らには、足を抱えて呻くラッドの姿が、あった。

「くっそ、こんな目と鼻の先で……!!」

悔しそうにヴォルトが吐き捨てるが、決して状況は好転しない。

ブランサンジュの着地時に放たれた地面の破片が、ラッドの足に直撃したようであり、大きく足首の肉が抉れている。

それを見て駆け寄ろうとした二人を、鋭い声が貫いた。

「来るんじゃない!!」

ヴォルトは腕を横に、コテツとリーゼロツテの動きを制止する。

「ラッドはこのザマ。そして、俺もおめえらほど速くねえ。これ以上は世話かけらんねえよ、早く行け！」

「ボスも早く逃げてくれ！」

「俺がんなことしてたまっかよ！」

そう言つて、立ち上がりヴォルトが槍を構える。

コテツは、何もせずにそれを黙って見ていた。

ただ、微動だにせず待っていた。

ただ、立っていた。

視界の端に、彼らに駆け寄るリーゼロツテを見ていたからだ。

「コテツさん、彼を担いで走れますかっ？」

コテツは、それを見て、口の端を吊り上げた。

(……ああ。彼女はそういう人間だ)

巨大な敵と、二人の男の間に立ち、リーゼロツテは白い狍々を睨み付けた。

「おいおい嬢ちゃん、俺は先に行けつつたんだぜ」

「私が気を引きますから、早く向こうへっ！」

それは、コテツの居た世界の軍人なら鼻で笑つた行為だろう。

リスクとリタインの噛み合わない、無謀な行動だ、と。

だが、しかし、だ。

例えそれが、コテツの世界の常識とかけ離れていても、どんなに

無謀でも。

だからこそ彼女は、素敵なのだ。

「リーゼロツテ、君こそ逃げろ」

「コテツさん!？」

コテツは、彼女の前に立った。

そして、腰に差された剣を抜き放つ。

「ここは……、俺がやるっ」

視界には、敵の姿だけが映りこむ。

他のことは、何も気にならない。

「馬鹿やるっ、無茶だ!」

どんな言葉も、知ったことではない。

拳が振りあがる。それと同時にコテツは駆けた。

「残念ながら相手は俺だ!」

その拳の狙いは明らかに手負いのラッド。

それを逸らすためにコテツはブランサンジュの足、関節部に刃を突き立てた。

毛皮に阻まれ、深く食い込むことはなかった刃だが、鬱陶しいとは感じたのか、ブランサンジュはコテツへと見事目標を変える。

ただし、ここで一つ問題も発生した。

「当てにはしていなかったが……!!」

握っていた剣、その半ばから先がない。

折れたのだ。狒々の毛皮は予想よりも硬く、持っていた剣は想定より脆かった。

迷わず、折れた剣をコテツは投げ捨てた。そして、振り下ろされる右拳を避ける。

大きく右後ろに下がると、ブランサンジュは、右拳を引き戻し、左拳を放った。

それを更に右に避けると、まるで駄々をこねるように、ブランサンジュは左腕を振り回す。

どうにか、コテツはそれを避ける。時に潜り、上を飛び越え、右へ左へと。

そして、左に大きく跳んだとき、ブランサンジュは左腕を引き戻すと、右腕を放ってきた。

どうにか、後ろに飛びながら伏せて、避ける。

「コテツさんっ、無茶ですっ！」

そんな中、聞こえてきたのはリーゼロッテの声。

どうやら、逃げ回っているうちに、後退させられたようで、逃げている三人と、上手く距離が取れていない。

「問題ない」

努めて冷静に、コテツは言った。

狒々を睨み付け、大地に立つコテツ。

彼に声をかけたのは、ヴォルトとリーゼロッテに肩を貸された、ラッド。

彼は驚いたように、理解できないというように、コテツに聞いた。

「あんたは、どうして……」

何故。どうして、と彼は問うている。
何故、戦うのか。どうして、ラッドとヴォルトを置いて逃げないのか。

答えは簡単で。ただ一つ、コテツは語った。

「……俺でよければ、いくらでも」

きっと、言葉の意味はラッドにもヴォルトにも、意味は分からないかっただろう。

ただ、リーゼロッテにだけは伝わる。

いや、伝わったのだ。

「コテツさん……」

そう、この会話は焼き増し。

森の時と、同じ。

「信じて、いいんですか……？　お願いしちゃっても、いいですか！？」

だから、返す返事も、また同じ。

「　ああ、任せておけ」

コテツは、今一度、ブランサンジュを注意深く見守った。

彼の心中には一つだけ、　策がある。

(……いくら魔術で補強されても。あらゆる物理法則から解放されたわけではない)

今まで、性能差のある相手とだって、コテツは戦ってきた。その度に勝ってきたのは、癖や弱点を見抜いて来たからだ。だから、今回もそうした。

(振れる腕は一本まで。バランスと重量の関係で両腕は同時に触れない！)

癖と制限。必ず存在するそれを、今、コテツは見切った。

(そして、この距離ならば、腕を伸ばしきって攻撃するしかない)

案の定、拳はそのように振るわれた。

コテツと狒々の長い距離を、拳が駆け抜ける。

そして、腕が伸びきる、コテツに拳が当たるその直前。

コテツは大きく真上に跳んだ。

(そこに大きな隙が生まれる!!)

引き戻される腕。

乗った。

コテツは、その腕に、乗っていた。

「お、お、おっ!!」

疾駆。

その太い腕を駆け抜ける。

腕から肩へ。そして、頭を、殴る。

「……せめて強化外骨格が欲しい所だ!」

残念だが、コテツの世界のパスワードスーツなどあるわけもない。武器も捨てた。後は、拳、ただ一つ。

ひたすら、殴る。彼は、何度も何度も、拳を狒々の頭へとぶつけた。

そこで初めて、狒々が吼える。目障りなのか、多少のダメージは与えられているのか。

そして、殴り続けるコテツに。

ブランサンジュの白い腕が、迫った。

迫る腕。死の気配。

コテツは、跳んだ。

「任せておけ、と言ったからな!!」

振るわれた腕が、真下を抜ける。

そして、コテツは勢いを付けて空中で一回転すると、ブランサンジュのその頭に。

渾身の踵落しを叩き込んだ。

額に直撃する足。衝撃の後、落下。

毛皮を掴んで勢いを殺し、着地。

無論、倒せたわけではない。武器もなしに倒せるわけもない。

だが。

目に見えて、動きが鈍った。

「今の内に逃げさせてもらおうっ」

コテツの攻撃は確かに、脳を揺らすことには成功していたのだ。

ふらふらと揺れながら動く狒々を背に、コテツは全力疾走を開始する。

一気に距離を引き離し、三人の下へ。

背後の敵の動きは鈍い。ぐいぐいと、コテツはそれを引き離していく

そして、程なくして、コテツは彼らに追いついた。追いついた、のだが。

「……いい加減、笑えてくるな」

立ち止まる四人。

背後には、ふらふらと定まらぬ動きを続けるブランサンジユが一匹。

そして、前には。

また別の、ブランサンジユが、そこにはいた。

人知れず、コテツは溜息一つ。

はたして、どうしたものか。

状況は絶望的である。背後のブランサンジユも、いつ回復するのか分からない。

まともにやりあえば、生き残れる気がしない。

その状況に、ヴォルトすら凍りつき、ラッドも、その体を震わせている。

そんな中。

その空気を引き裂くように、それは現れた。

『ご主人様、探しましたよっ！』

コテツは、呆れたように、肩をすくめて笑ったのだった。

「なんともまあ、いいタイミングだ、相棒」

20話 ノンストッププレックレスライフ（後書き）

今回はあっさり戦闘終了で。

03はほとんど世界観説明みたいなものです。

物語としては非常に中途半端なモノを感じてしまいますが……。
出さなきゃいけない設定と物語のバランスの難しさを感じます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6931w/>

異世界エース

2011年10月13日23時50分発行